

社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習  
—地域協働型社会参加を視点として—

教育科学専攻・人文社会系教育領域

218M015 増田直史

2021年2月10日提出

社会的有用感を高める社会科まちづくり学習  
—地域協働型社会参加を視点として—

目 次

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 序 章 本研究の意義と方法                   | 5  |
| 第1節 研究主題                        | 5  |
| 第2節 研究の特質と意義                    | 5  |
| 第3節 研究方法                        | 6  |
| 第1章 社会科における社会的有用感とまちづくり学習       | 8  |
| 第1節 社会科において社会的有用感に着目する意義        | 8  |
| 第2節 小学校社会科におけるまちづくり学習           | 10 |
| 第2章 小学校社会科におけるまちづくり学習の現状と課題     | 14 |
| 第1節 日本のまちづくり学習の現状               |    |
| 第1項 社会認識の形成                     | 14 |
| 第2項 社会的有用感の高まり                  | 16 |
| 第2節 日本のまちづくり学習の課題               |    |
| 第1項 社会参加の類型                     | 21 |
| 第2項 社会的有用感の高まり                  | 22 |
| 第3章 地域協働型社会参加を視点としたまちづくり学習からの示唆 | 28 |
| 第1節 総合的な学習の時間の実践におけるまちづくり学習     |    |
| 第1項 総合的な学習の時間と伊那小学校             | 28 |
| 第2項 伊那小学校の実践                    | 28 |
| 第3項 子どもの問いから追究する重要性             | 31 |
| 第4項 総合的な学習の時間におけるまちづくり学習の考察     | 31 |
| 第2節 米国のサービス・ラーニングにおけるまちづくり学習    |    |
| 第1項 サービス・ラーニングとは                | 32 |
| 第2項 サービス・ラーニングの実践               | 33 |
| 第3項 振り返りの重要性                    | 36 |
| 第4項 サービス・ラーニングにおけるまちづくり学習の考察    | 36 |
| 第3節 日本型サービス・ラーニングにおけるまちづくり学習    |    |
| 第1項 地域の課題を教材化                   | 37 |
| 第2項 プロジェクト型の学習を組織               | 37 |
| 第3項 振り返りの重要性                    | 38 |
| 第4項 学問的な知識・技能を習得、活用する場面を設定      | 38 |

|     |                                     |     |
|-----|-------------------------------------|-----|
| 第5項 | 地域住民との協働を重視                         | 38  |
| 第6項 | 日本型サービス・ラーニングにおけるまちづくり学習の考察         | 39  |
| 第4節 | 先行実践からの示唆                           | 39  |
| 第4章 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習のフレームワークと学習論 | 41  |
| 第1節 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習のフレームワーク     |     |
| 第1項 | まちづくり学習のスコープ                        | 41  |
| 第2項 | まちづくり学習のシーケンス                       | 43  |
| 第3項 | まちづくり学習のフレームワーク                     | 46  |
| 第2節 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくりの学習論           |     |
| 第1項 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の目的          | 47  |
| 第2項 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の内容          | 48  |
| 第3項 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の方法          | 49  |
| 第5章 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の実践          | 54  |
| 第1節 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の指導案         |     |
| 第1項 | 単元「5 Aのみんなで地域の魅力を発信！ふるさと新聞」の概要      | 54  |
| 第2項 | 「地域の人と協働してふるさと新聞の記事を書いて発信する」        | 56  |
| 第2節 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の授業の実際       | 75  |
| 第6章 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の分析          | 78  |
| 第1節 | 社会的有用感を高める社会科まちづくり学習の授業分析           |     |
| 第1項 | 評価基準による分析                           | 78  |
| 第2項 | ループリックによる評価分析                       | 80  |
| 第3項 | アンケートによる評価分析                        | 83  |
| 第2節 | 社会的有用感を高める社会科まちづくり学習の授業分析           | 89  |
| 終章  | 成果と今後の課題                            |     |
| 第1節 | 成果                                  | 95  |
| 第2節 | 今後の課題                               | 96  |
|     | 実験授業にかかわる資料                         | 97  |
|     | 参考文献                                | 108 |
|     | あとがき                                | 110 |

## 図表目次

|     |                                              |    |
|-----|----------------------------------------------|----|
| 第1章 | 社会科における社会的有用感とまちづくり学習                        |    |
| 表   | 1-1 社会的有用感に関する用語の対応する自己の感情と視点                | 8  |
| 図   | 1-1 社会的有用感とその他の視点との関係図                       | 9  |
| 表   | 1-2 まちづくり学習の段階と手順                            | 10 |
| 第2章 | 小学校社会科におけるまちづくり学習の現状と課題                      |    |
| 表   | 2-1 社会科教科書とまちづくり学習の分析                        | 19 |
| 表   | 2-2 方法としての社会参加                               | 21 |
| 表   | 2-3 直接的社会参加の類型                               | 22 |
| 表   | 2-4 ロジャー・ハートの参画のはしご                          | 23 |
| 図   | 2-1 参加の橋づくり                                  | 24 |
| 表   | 2-5 地域協働型社会参加の段階および参画のはしごとの比較表               | 25 |
| 第3章 | 地域協働型社会参加を視点としたまちづくり学習の示唆                    |    |
| 図   | 3-1 伊那小学校で学ぶ力                                | 28 |
| 表   | 3-1 「街を明るくする駅前を作ろう」学習の流れ                     | 29 |
| 表   | 3-2 Clean street, Green streets の各教科での学び     | 33 |
| 表   | 3-3 Clean street, Green streets の段階表         | 35 |
| 表   | 3-4 「生活の結び付くゴミ分別たんけん隊の学習活動                   | 37 |
| 第4章 | 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習のフレームワークと学習論          |    |
| 表   | 4-1 スコープとしての地域課題の領域と主要テーマ                    | 42 |
| 表   | 4-2 領域ごとの主題的学習の目的・内容・価値観                     | 43 |
| 表   | 4-3 発達を踏まえた社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習<br>カリキュラム | 45 |
| 表   | 4-4 まちづくり学習授業開発のフレームワーク                      | 47 |
| 表   | 4-5 まちづくり学習の目標                               | 48 |
| 図   | 4-1 社会参加の流れ                                  | 48 |
| 表   | 4-6 単元 開発に携わる人「中井中央公園」                       | 49 |
| 図   | 4-2 社会参加の規定因とウェルビーイング                        | 51 |
| 表   | 4-7 社会的有用感を高めるまちづくり学習の手順                     | 52 |

## 第5章 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の実践

|                                            |    |
|--------------------------------------------|----|
| 表5-1 単元 「5Aのみんなで地域の魅力を発信！ふるさと新聞」の構成（全13時間） | 56 |
| 表5-2 3次 「地域の人と協働してふるさと新聞の記事を書いて発信する」の授業展開  | 57 |
| 資料1 森社長合同授業概要                              | 58 |

## 第6章 社会的有用感を高める小学校まちづくり学習の分析

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 表6-1 評価規準               | 79 |
| 表6-2 ふるさと新聞ループリック表      | 81 |
| 図6-1 事後アンケート集計表         | 86 |
| 図6-2 事前アンケートと事後アンケートの比較 | 87 |
| ふるさと新聞掲載記事              | 89 |
| 写真 cafe ほのぼーのイベント掲載時の写真 | 91 |

## 序章 本研究の意義と方法

### 第1節 研究主題

現代社会では、地域における課題が溢れている。最近の教育課題として、2030年問題等もあり益々、地域とのつながりが重要になってくる。現代社会では、少子高齢化が進んでおり、高齢化などに伴って地域における課題が出てきている。地域にある課題とは、それぞれの地域に表出する課題であるが、多くの地域に共通してみられる課題も多くある。地域の課題を解決することは、地域、国及び世界と通じる部分が多くある。

また、教育課題として2030年問題が挙げられる。文部科学省は2030年の社会と子どもたちの未来を考えている。2030年には、65歳以上の高齢社会がさらに進み、今ある職業が自動化されるといわれており、2045年になると、人工知能が人類を超える時代へと到達するわけである。そのような中で学校が地域や世界と繋がりを持ちながら学ぶことのできる環境というのが必要となってくる。

現代の子どもは、地域や社会との結びつきが薄く社会的スキルの低下がみられる。静岡県総合教育センターの調査(2009)において、おり、保護者自体も地域とどのように関わっていけばよいのかについても理解していない場合も多くみられる。「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」によると「社会をよりよくするため、社会における問題に関与したい」という質問に対して「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した人は44.3%に過ぎない事からも社会に関心が無くなってしまっている現状がわかる。このため、社会科において、社会に役に立った実感を子どもたちに身に付けさせる必要がある。

学習心理学の考え方から、自己肯定感、自己有用感を高める事が大切であると言われていいる。自己肯定感が身につく、自分が他の人に役に立ったという自己有用感を実感する事を行っていくことにより社会により役立つことへの有用感(社会的有用感)が広がるという段階になっていくのだと感じる。その全ての過程を経て社会的有用感が成り立つと考えている。

このような、現代の社会状況がある。また、新型コロナウイルス感染拡大状況下においては、地域の中で今まで以上に家庭、地域の中で過ごす機会が増えてきたと言えるであろう。このような状況下の中で、地域との結びつき地域との関連が必要となってくる。このような中で社会の人と関わり認められることが重要となってくる。より社会的有用感を高めることが必要である。また、それが小学校社会科まちづくり学習を行う事で、社会的有用感を高める事が可能である。

### 第2節 研究特質と意義

地域活性化や地域アイデンティティの育成などをテーマにしたまちづくり学習の在り方についての研究については、これまでの研究で明らかになってきている。また、サービス・ラーニングなど、社会参加力など諸外国の社会参加に関する研究も唐木清志の先行研究から明らかになってきている。本研究の特質と意義は、以下の3点にまとめることができる。

第一に、社会的有用感を高めるまちづくり学習理論に基づいた単元レベルのまちづくり学習の授業を開発していることである。まちづくり学習の従来の授業では、社会科では社会認識の視点、総合的な学習の時間では、経験・体験のみを行う授業が多く用いられていた。本研究の目的は、地域協働型社会参加の視点から社会的有用感を高める意義を明らかにし、小学校社会科における社会的有用感を高めるような学習まちづくり学習を開発し、授業実践を行い、社会的有用感の変化の視点からその有効性を検証することである。また、サービス・ラーニング・日本型サービス・ラーニングの分析については、「ごみ」の実践を取り上げている。

第二に、本研究は、小学校中学年高学年の発達段階に応じたまちづくり学習を単元レベルで開発していることである。本研究では、地域課題をスコープに、小学校の発達形成を踏まえたまちづくり授業開発のフレームワークを設定し、まちづくり学習のテーマにおける単元を開発している。

第三に、本研究は、学習理論に基づいて作成した単元計画を、実験授業を通して吟味・修正を図り、授業モデルとして開発していることである。先行研究では、地域協働型社会参加をするまちづくり学習の授業の単元構想や開発が行われているが、本研究にある社会的有用感を高める実践となっていない。また、社会参加と社会的有用感の関係が述べられていない。それに対し、本研究では、それに対して学習理論に基づいて単元計画を、実験授業を通して吟味・修正を繰り返し、現時点で到達している社会的有用感を高めるまちづくり学習の授業モデルとして開発している。

### 第3節 研究方法

本研究の方法として次のような手立てをとる。

第一に、社会的有用感を高める学習内容としてまちづくり学習の定義を行う。社会的有用感を社会科で高めていくにはまちづくり学習だと考えられる。先行実践の論文・参考文献、教科書、学習指導要領を分析する。その上で、社会科まちづくり学習の視点を設定する。まちづくり、まちの捉え方、まちづくり学習の視点から、社会科まちづくり学習を適宜する。

第二に、社会的有用感を高める地域協働型社会参加の段階表を作成し、段階表に従った地域協働型社会参加を模式化することにより地域協働型社会参加に従った地域協働型社会参加を行う。

参加・参画には、直接的な社会参加・間接的社会参加などより細かく社会参加の方法が存在する。その中でも、地域協働型社会参加が社会的有用感を高める方法として使用する。参画には段階や視点をを用いる必要が有るとして、ロジャー・ハートの参画のはしご、メアリー・ジョンの参加の橋づくりなどから地域協働型社会参加に関わる段階表を作成した。そこには、地域の人と一緒になって関わると言った部分に着目して段階表を作成する。

第三に、社会的有用感におけるまちづくり学習のフレームワークを作成する。まず、まちづくり学習に関わるスコープを作成する。鹿児島大学が作成した地域課題表を基

に社会的有用感におけるまちづくり学習の領域を設定する。「歴史」「犯罪と安全」「健康と福祉」「環境」「まちづくり」の5領域を設定する。

地域課題をまちづくり学習として観点から捉えなおし、歴史伝統から生じている「歴史」領域、安全に過ごすという点での「犯罪と安全」領域、人口問題・少子高齢化問題からの「健康と福祉」領域、持続可能な地域づくりという点での「環境」領域、それ以外の横断的な視点からの「まちづくり」領域という5領域を設定できる。5領域は、社会的有用感を高めるまちづくり学習のスコープと設定した。次に、まちづくり学習のシーケンスを設定した。小学校の発達段階を鑑みて、カリキュラムを作成して、スコープとシーケンスを基にして社会的有用感を高めるまちづくり学習のフレームワークを作成した。

第四に、授業実践提案し、アンケート（質問紙調査）・ルーブリック評価を用いて社会的有用感の高まり変化を明らかにする。小学校5年生情報メディアの単元でのまちづくり学習における授業実践を行う。具体的には、単元名を「5 Aのみんなで地域の魅力を発信！ふるさと新聞」として、地域新聞である「三重ふるさと新聞」の記事内容調べ、取材、記事作成を通じ、子どもたちのまちづくり学習を地域協働型社会参加の方法（低段階から高次段階へ向けて）を用いて授業実践を用いて行い、地域協働型社会参加を行う前と行う後で社会的有用感の変化にどのように変わったのかの変化を分析し明らかにする。



## 第1章 社会科における社会的有用感とまちづくり学習

### 第1節 社会科において社会的有用感に着目する意義

#### 第1項 社会的有用感

表1は、社会的有用感に関する用語を自己有用感、自尊感情、自己肯定感、自己効力感、社会的充実感と捉え、自己と社会の視点で分けたものである。

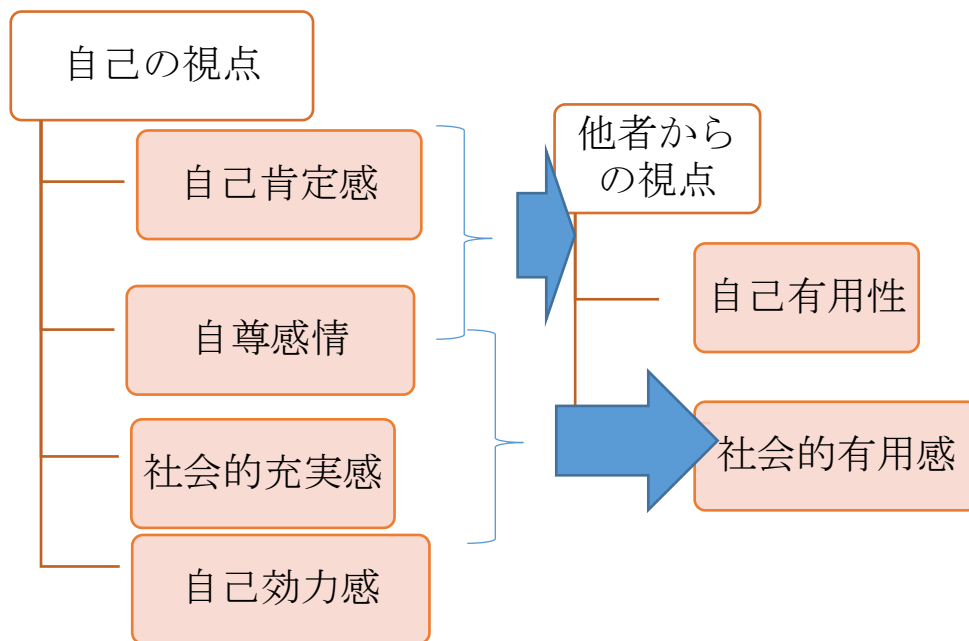
表1-1 社会的有用感に関する用語に対応する自己の感情と視点

| 感情                     | それぞれの感情の概要                                                                      | 視点 |
|------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|----|
| 自己肯定感 (=self esteem)   | 自分が自分について感じる感覚。かけがないと感じられる。                                                     | 自己 |
| 自尊感情                   | 達成感÷本人の願望によるものである。学習においては、自尊感情が高い人は困難に出会っても粘り強く努力するが、自尊感情が低い人はすぐにあきらめてしまう傾向がある。 |    |
| 社会的充実感                 | 自分が <u>社会に対して行った行動</u> により、満足して充実感を得る事。                                         |    |
| 自己効力感 (=self-efficacy) | 自分は困難を克服することができる。自分は、達成をもたらすような一連の行動を計画し実行する能力に対する信念。                           |    |
| 自己有用性                  | 他の人に役に立った必要とされていると実感した時や他者から感謝された時に感じる。                                         | 他者 |
| 社会的有用感                 | 自分が社会の為に役に立っていると行った行動などから社会的に認められていることから <u>社会の一員として認められた</u> 時に感じる。            |    |

自己肯定感はセルフエスティーム(2016),自尊感情は最新心理学辞典(2015),社会的充実感は森泉(2018),自己効力感は江本リナ(2000),自己有用性は岩手大学(2017),社会的有用感は唐木(2008)を参考にし、下線部を付加して作成

社会的有用感については、表1-1のように、高まる方法を示した。筆者は、これは手順や順序により構成されるものではないと考えている。活動を通じて同時に感情が生じたり、それぞれは個人の感情の為、全てが同じ時期に感じたりするとは感じない。ただし、表1に示された2つの項目は他と大きく違ってくる、それは「他者視点から」という点である。自己有用性は他者から自分が「感謝された」、「認められた」という実感である。後に再定義するが、社会的有用感は社会の為に役に立ったという経験から社会的有用感が得られるという事が考えられる。この2つの言葉は、他者からの評価を基に自分としての気持ちが入っている。自分だけの自身や性格が含まれる効力感や肯定感とは違ってくる。

表1-1について、自己の視点と他者からの視点の変化を見るために図1-1のように図式化して示す。



筆者作成

図1—1 社会的有用感とその他の視点との関係図

自己有用性とは、生徒指導・進路指導研究センター（2015）<sup>1)</sup>においても、自分が感謝されたり、自分が役に立ったりすると感じる事である。自分が何かまた、自己効力感、自分は困難を克服することができるのだという自信にもつながってくる。

社会的有用感を高めるためには、自己有用感と自己効力感、自己肯定感を持ってこそ、社会的有用感にも通じると考えられる。その3つに社会的に自分が充実しているもの（社会的充実感）が追加される。自分が行ったことが充実していなければ社会的有用感という所まで一人一人が自覚として持っていくことは難しいからである。

唐木（2008）は社会的有用感について述べている。唐木（2008）を参照し、本研究では社会的有用感を以下のように定義する。

自分が社会の為に役に立っていると行った行動などから社会的に認められていることにより社会の一員だと自らが感じる事。

社会的有用感が高まっている状態とは、自分が社会の為に役に立っていると行った行動などから社会的に認められていることにより社会の一員だと自らが感じることでその人が変革<sup>3)</sup>した状態とする。

社会的有用感が高まっている状態とは、自分が社会の為に役に立っていると行った行動などから社会的に認められていることにより社会の一員だと自らが感じることでその人が変革した状態とする。

社会科と社会的有用感の関係についてである。小学校社会科の学習指導要領の目標と大いに関連している。社会科では、「国際社会に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成する」教科で有るとされている。社会的有用感では、自分が肯定され自分に良いイメージがついたという所にとどまらず、自分に役に立ち（＝自己有用感）、それが社会の中で役に立ったという事を実感することである（＝社会的有用感）。社会科では、公民としての資質・能力を育成する為には、自分が公民（市民）である。という実感が芽生えなければ行われぬ。

研究動機にもあるが、子どもたち自身が社会と関わろうとする経験もなく、社会にかかわろうとすることも行えていない。社会に自ら関わり役に立ったという実感を持たせる必要が有る。社会に役に立ったことにより一市民であるという実感がなければ地域学習やそれぞれの地域（地域教材）を扱ったまちづくり学習を行ったとしても自分事とはならない事が考えられる。

## 第2節 小学校社会科におけるまちづくり学習

社会科において社会的有用感を高めるには、社会科まちづくり学習を行っていく必要がある。

安藤真理（2004）は、以下の要素を含む必要が有ると指摘している<sup>4)</sup>。

- ① 身近な環境である「まち」
- ② 「まちづくり」は協働行為であり、価値観の共有が必要
- ③ 様々な能力が活かされる必要
- ④ 総合的な考え方，方法による解決
- ⑤ 行動を振り返る

安藤は、要素の5点を踏まえてまちづくり学習を行うのに重要である。またその要素を基に手順と段階を示している。

表1-2 まちづくり学習の段階と手順

| 段階 | 手順                                |
|----|-----------------------------------|
| 1  | まちに対する関心の喚起                       |
| 2  | まちに関する体験や調査，研究を通じた知識の獲得           |
| 3  | 個人的な価値判断                          |
| 4  | 自分の考えの表現，コミュニケーション（多様な意見があることの知覚） |
| 5  | 価値観の共有                            |
| 6  | まちに対する夢・将来像を持つ                    |
| 7  | 様々な技能・才能を活用した協働作業によって望みを実現するための行動 |

安藤真理(2009)より筆者作成

日本建築学会(2004)はまち学習と、まちづくり学習のように以下のように指摘している<sup>6)</sup>。まちづくり学習には、前提として、まち学習が有る。まち学習とは、本書では、2つの手法を定義している。

1つ目は、地理学的に、寺本潔の実践のように、教える側があらかじめ地域資源を調べ上げておき、引率しながら子どもに見せる方法である。授業の中で気づいてどんな方向に見つけていくのかといった方法である。

2つ目は、定められた範囲を児童たちに自由に歩いてもらい、発見そのものに重きを置き、教師と児童がともに受け止めた上で、教室の学習の中で様々な資料を用いて調べていく方法となる。

まち学習では、まちを食べるための学習である。おいしく料理を食べるために必要な「たべる」人の為の学習である。一方で、まちづくり学習とは、料理でなぞらえると仕上げる為の方法をたくさん知っている。多様な味付けの手法の中で仕上げ方を選択していくことが重要である。まち学習では調べたり、深めたりなど受け身であるが、自分から、どのような方法で行っていくかを「選択し、創っていく学習」であると定義している。また、まち学習とまちづくり学習を時系列的なつながりを持つことにより、持続可能なまちづくりができる。

寺本潔(2012)は、「場所や人への愛着を抱かせるためには、それらと直接かかわる活動や体験を保障するだけでなく、その体験を振り返らせることを重要になってくる。また、「まちづくり」を住み手<sup>7)</sup>の立場から捉えなおしてみると地域の開発自体が必ずしも住民の生活環境改善に寄与していない場合がある」と指摘している<sup>6)</sup>。

寺本は、まちづくりについて、都市計画の専門家である川上光彦を参考に、のように分析している。「これまでの都市・農村整備が行政や開発企業の手で進めていたのに比べ、自律的に都市や農村の「まちづくり」を意識し、愛着のもてる住みよい街にしていく必要性が生じている、地域と連携した教育の意義を見いだせる。まちを単に都市環境の保全という視点だけでなく、そこに暮らしている人の関心や知覚、愛着に呼び覚ます視点に焦点を当てて「まちづくり学習」という「まちづくり」の全段階に位置する市民意識啓発の意義がある。そして、住民が「まち」を意識させる試みが必要である。寺本は、前述したまち学習とまちづくり学習の違いからも分かるが、直接関わる活動であり愛着という視点に着目している。間接的から直接的にかかわる事よりまちづくりへの関心も高まるのであろう。そして、市民の意識を変える学習にすることにより「まちづくり」へと生かされていくことが分かる。まちが勝手に変わったなと思うような態度ではまちづくり学習は生かされていないことが考えられる。「まち」というものを住民一人一人が意識していく必要が有る。

安藤(2004)、日本建築学会(2004)及び寺本(2012,2002)<sup>8)</sup>のまちづくり学習にかかわる考え方を参考に、社会科まちづくり学習の視点を次のように設定する。

- 1 学校周辺もしくは大小様々な地域にある問題を調べ、調査し探究的活動する。
- 2 地域にある物的資源・人的資源を活用する。
- 3 直接的な社会参加
- 4 住み手の立場から捉える。

上記を挙げた理由は次のとおりである。

1については、安藤(2004)でも指摘しているように、生活科で学んだ知見である学校周辺のまちを社会科として、学校周辺にあるまちについて拡大して考えていくのでもよい。学校周辺にある商店やスーパー、工場などについて調べていくことも容易に考えられる。また、社会科であることから、子どもたちが、資料や見学を基に調べたり探究して行ったりすることが重要となってくる。これは、3～6学年どの学年でも当てはまる事である。

2については、文部科学省「学校で作る地域の未来<sup>9)</sup>」では、「次代を担う子供に対して、どのような資質を育むのかという目標を共有し、地域社会と学校が協働する事により、従来の地縁団体だけではない、新しいつながりによる地域の教育力の再生・充実は、地域課題解決等に向けた連携・協働につながり、持続可能な地域社会の源となる。」と書かれている。地域には様々な資源が溢れている。物的資源であれば、橋、道路、工場、店、商店街、警察、消防署、市役所などである。また、人的資源であれば、物的資源で働いたり経営されていたりする人々、また、昔から地域に関わっている人々、地域の自治会や児童会の方々、昔の地域の姿を知っている人々などが存在する。ここにある資源をどのように利用して社会科まちづくり学習を進めていくかで変わってくる。

3については、直接的に子どもたちが街に出て社会参加をしていくことによりまち学習からまちづくり学習へと変化しやすいと考える。自ら調査し発信していくことがより町づくりをしていると感じやすくなる。それにより、子どもたちが活動したり活躍していったりすることにより町全体が少しでも良くなっていくと考えていくことができると感じる。

4については、まちづくりというのに街を作るという制作者という立場から考えてしまいがちである。もしくは、行政の立場から、どのようなまちにしたらよいのだろうかという風に考えてしまいがちである。例えば、伝統的なまちづくりであるとか、子育て世代が集まる街にしたいとかである。しかし、住むのは誰かと考えれば、住民＝住む人、“住み手”である。住む人もしくは、住む人たちがどのような街にしたいかによって変わってくると考える。双方のまちづくりが変わってくる。

伊勢市に河崎という商人の町があり、ここを中心に成功したまちづくり事例がある。まちづくりブック伊勢(2000)によると、伊勢のマスタープラン<sup>10)</sup>作成事業を通してのまちづくりには、三重大学工学部の教授、そのゼミナール生、早稲田大学のまちづくり、公共政策研究の教授とそのゼミ生、そして、地域の高校生、地域の建築家、子どものまちづくりの専門家である千葉の聖徳大学教授、行政関係では、伊勢市役所建設部・都市整備部・まちづくり整備部、材木店、市民代表を中心に行われた。ワークショップでは、中学生から65歳く

らいまでが参加していた。毎回20人程度が集まって話し合っ自分他のまちを作っていたようである。この本では“このまちに住みつづけられるだろうか”と問いをしている。まちの魅力をこれまで以上に高めて強めていく必要があると指摘している。この本が取った市民アンケートでは「将来の伊勢の都市像」は圧倒的に、「生活型」が多い、つまり住み易いまちづくりが必要だという事が理解できる。住民一人一人がまちをつくる“意志”を持ち、まちを作っていくことが大切である。そこから、まちづくりには、住民が住むことを考え民間・行政・学識経験者らそして住民が合わさり作っていくことが良いと考えられる。

まちづくりやまちの捉え方、まちづくりの視点から、筆者が考えるまちづくり学習を次のように設定する。

自ら物的資源・人的資源を使い、地域課題の解決方法を考え、企画し、まちの一員として地域の人と協働し、社会参加する事で住みよい地域の未来を創る行動力を養う学習。

### 【注】

- 1) 「自己有用性」岩手県教育委員会特別支援教育課中学校事例  
<http://www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi/mysite3/pdfki-wa-do/jikoyu-yo-kan.pdf> は、自己有用性について定義をしている。
- 2) 唐木清志(2008)「子どもの社会参加と社会科教育の在り方—社会科における知識・技能活用能力の育成—」全国社会科教育学会シンポジウム発表資料」
- 3) 変革とは、ESD(education for sustainable development)における行動による変革と合致する。
- 4) 安藤真理(2004)「子供を対象とした『まちづくり学習』の学校教育における展開の可能性に関する計画—横浜市—」実践報告論文集(5)財団法人住宅総合研究財団 pp.64-74
- 5) 日本建築学会(2004)「第1章まちづくりを学ぶという事」『まちづくり教科書第6巻まちづくり学習』日本まちづくり学会編 pp.2-11
- 6) 寺本潔(2004)「第1章 いまこそ「まちづくり学習」を」『町おこし総合学習の構想』明治図書 pp.9-14, 寺本潔(2012)「まちづくり学習」『社会科教育辞典』ぎょうせい p.114-115
- 7) 筆者は、住み手=住民の視点からもとらえる必要があると述べている。
- 8) 3つの視点から筆者なりの視点を設けた。
- 9) 地域協働については以下を参照。「学校で作る地域の未来」  
<https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/>
- 10) マスタープランとは、開発計画 等を行う場合や建築物 を建てる時の基本計画、基本設計 のことを指す。

## 第2章 社会科まちづくり学習の現状と課題

### 第1節 日本のまちづくり学習の現状

社会科では、社会認識と公民的資質の両方が必要であるとされてきた。小学校学習指導要領(2018)目標によると、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり、解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民的資質の資質・能力の基礎を育成する」と示されている。よって、思考力判断力表現力等・学びに向かう力人間力等が重視されているのが読み取れる。

筆者は、学習指導要領(2010年版)<sup>1)</sup>、小学校社会科教科書(日本文教出版)、論文の3つでまちづくりに関する項目について比較分析していくこととする。ここでは、社会認識・社会的有用感(公民的資質)がどの程度扱われまちづくり学習についてどの程度書かれているかについて書いていくことにする。

#### 第1項 社会認識の形成

社会科としてまちづくり学習を行っているか総合的な学習として行っているかで大きく変わってくる。

社会科として行っている場合は、下記の事が該当する。

地域を知ると言った学習が主に、小学校3年生と4年生の社会科地域学習で行われている。また、本論文で述べている「まち」学習<sup>2)</sup>にあたる部分である。

まず、論文から分析してみたい。岩田一彦(1993)が指摘する、問いと習得される知識との関係である手順のような流れで地域学習は行われている。

はじめは情報を求める間で「だれが」、「どこで」と考えながら調べていくのである。ここで、恐らく初めて関わっている人の存在を知っていくことであろう。例としては、スーパー学習であれば、スーパーに関わる人や、そこに売っているものである。

その後、「どのようにして」と言われる問いである。これでは、情報の問いでは、見ただけで分かるが、見て、自分なりに考えたり、他者に聞いたりしないと分からない問いになってくる。

次に、「なぜ」といった情報間の関係を求める問いである。工場の学習であれば、「なぜ、分業が行われているのか。」「なぜ、この部品を長年作り続けているのだろうか」等と言ったところに繋がっていくであろう。ここは、いわゆる結果から原因を考え、因果関係を求める問いである。「どこで」「だれが」と言った問いは、調査などに行けば見ただけで、もしくは調べただけで分かるが、「どのようにして」、「なぜ」と言った問いは、それぞれが観たり聞いたりしたメモや授業を通じての話し合いの深まりによっても変わってくるであろう。

「○と○がどちらがよいですか」といった

このような、問いと知識を使って追究していく活動がなされている。

また、木下春雄(2003)によると、「学校によっては、教科書や副読本によって学習してお

り、見学や調査などをしないで知識を深めていく授業もある」と指摘している。

このような授業では、学習すべき社会認識はついているが子どもたちが街づくりに入り込んでいる現状ではないと考える。

しかし、総合的な学習としてまちづくり学習を位置付けて実施している場合は大きく変わってくる。社会科ではなく、「探究的な活動」に重きを置くために、調べ学習等を行っていくが、子ども一人一人やグループ一人一人考えているテーマが違う為に、社会認識といった部分はあまり存在しない。子ども一人一人獲得していく知識が別々だからである。よって、社会事象により社会認識が子どもの中に入っているとは言えない現状にある。

次に、学習指導要領を分析してみる。本論文では、実践等が移行措置期の2019年実施の為、2008年小学校学習指導要領解説編を参照し分析する。まちづくり、まち地域に関する学習にかかわる事を抜粋する。

第1章1の改訂の経緯によると、次の7つが方向性として出されている。

|                                                                                                                                                       |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 改正教育基本法などを踏まえた学習指導要領改訂<br>「生きる力」という理念の共有<br>基礎的・基本的な知識・技能の習得<br>思考力・判断力・表現力等の育成<br>確かな学力を確立するために必要な時数の確保<br>学習意欲の向上や学習習慣の確立<br>豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

また、「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実については、徳育や体育の充実のほか、国語をはじめとする言語に関する能力の重視や体験活動の充実により、他者、社会、自然・環境と関わる中で、これらと共に生きる自分への自信を持たせる必要があるとの提言がなされた。」ともある。体験学習の充実があるように、体験学習をさせていくことで地震や能力が伸びていくことが分かる。そして他者・社会、自然・環境とかかわる事が重要である。まちづくり学習は、これに大きく関わっていますが、まちづくり学習は、他者との協働、地域や社会の状況を把握し問題解決していくことが大切である。そして、地域の環境や関係づくり（自治会等）の連携・改善へと発展していくわけである。

小学校社会科の学習指導要領の具体的事項について、以下のように示している。

|                                                                                                                         |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 生活科の学習を踏まえ、児童の発達に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史等に対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考え方を養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、より良い社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う事を重視して改善を図る |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



このように、社会認識の部分でまず、理解という所に着目していく。そして、地域や国に対する愛情を深める必要が有ると述べています。愛情を深めるというのとまちづくり学習は多く関わる。知識、概念や技能などを活用しとあるが、知識がなければ活用できない。本論文であるまちづくり学習も該当する。それぞれの地域やまちに関する地域課題や地域にある問題を使用していくことにより社会的有用感(公民的資質)が高まりやすくなっていると考える。その為には、見学に行ったり、調べたり、調査したりしながら自分の知識を深めていく必要が有る。

学習指導要領の第2章の社会科の目標と内容に着目する。まちづくり学習の内容について出るが、筆者が分析する限り「まちづくり学習」「まちづくり」言う言葉は指導要領には出てこない。漢字の「町」などは、3年生の地域学習で出てくる。

ここからわかる事としては、社会科まちづくりでは「まち」を知るという学習はできているのである。そして、述べてきているように社会参加もしくは参画の基礎部分というのは扱ってはいるがはいるが、社会認識で留まっている現状が考えられる。

地域学習の態度に関する項目では、まちづくり学習が望まれていると分析している。3・4年生の目標に「地域社会の一員として自覚を持つようにする」「地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする」とある。また、第3章1には「共に努力し協力しようとする意識」を育てる事が大切であるとある。

地域社会に自ら関わり形成する態度を養うだけではなくともに地域の人と努力しまちを作っていこうとする姿が見受けられる。このように、まちやまちづくりという言葉がないがまちづくり学習を進めていこうとする姿が感じられる。

## 第2項 社会的有用感の高まり

岩田一彦(1993)が指摘する価値判断<sup>3)</sup>は、社会的有用感に該当する。なぜなら話し合いを通じて、議論を深めていく。主課題に対し、一人一人が意見を考えていくことができる。

「〇と〇などどちら良いと考えますか」と言った価値判断するような問いも必要となってくる。規範的知識であるが、これによって子どもたちは社会的事象を基に考えようとしているとできている。

柿沼他(2013)は、総合的な学習の時間が導入後「まち学習」「まちづくり学習」は実施が増加していると指摘している<sup>4)</sup>。しかし、関与する側と教育現場との連携が難しく、単発的なイベント等が行われている場合が多くある。問題の解決策を話し合い、議論する授業は少ないという課題を変えている。それにより、ロジャー・ハートの高次段階になっていないと指摘している。(第2章第2節参照)

子どもたちの学習では、社会科の副読本などから知り、更に知りたいものを調べ学習、調べたことをまとめ話し合い発表している場合が多くあり、行っている場合もポスターを貼る。企業や行政、関わった店などに提案するなど(発信まで)の通り一片の活動で終わっている場合が一般的である。社会科まちづくり学習では、情報を調べまとめるだけでなく社会

への関わり方を選択・判断し地域社会に対する誇りと愛情、地域社会への一員としての自覚が必要となっているがここまでに至っていない。これにより、社会的有用感まで高める事ができていない。

地域の人と協働する場面がまだまだ少ない事が挙げられる。授業内に、教員が依頼しゲストティーチャーに話をしてもらおうというのは、増加している。もしくは、単発で2・3回行うと言ったのは、出前授業でよく合う事である。しかし、それはあくまで単発に過ぎず。子どもたち一人一人が社会と関わり社会的有用感が高まるまではいけていない。地域の人と一緒に協働することによって初めて実感すると考えているからである。

これもまた、総合的な学習として行っている場合は、別である。1年かけてもしくは、半年かけて総合的な学習として、地域の人と協働しながら自分たちが地域で課題であると思ったものを取り上げて、活動を行っている場合、子どもたちの中では、やる取り組み内容で変わってくると思うが、社会科で現在行われている街づくり学習に比べると社会的有用感が高くなるのである。奈良女子大学附属小学校「しごと」学習<sup>5)</sup>、伊那小学校等の総合学習(第3章第1節参照)もこれに該当する。

次に、学習指導要領(2019)からの分析してみることにする。

学習指導要領 第1章総説 3 社会科改訂の主旨の改善の具体的事項には次のように示されている。

生活科の学習を踏まえ、児童の発達に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史等に対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考え方を養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、より良い社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う事を重視している。

社会的有用感の部分では、知識や技能は社会認識をつけた後で、それを活用していく必要がある。まち学習からまちづくり学習に変化するのであれば、活用していく必要があるので、体験したり、調べて発表していく中だけでなく、実際に実生活の人と一緒に町を作っていくという事は関わっていくべきである。まちづくり学習は、本事項と重なっていることが考えられる。また、「参画する資質や能力の基礎を培う」とあるが、社会参画については、第2章2節で述べるが、社会の形成に参画するという事とまちづくり学習というのは非常に合致する事である。持続可能な地域づくり<sup>6)</sup>に自ら関わっていくことにより、地域社会に関わっていくことが必要であると考えられる。子どもたちが地域に関わることができたことにより社会形成に関わった事により、社会参加に関われたと感じると考える。そして重視している事により、参画する資質や能力の基礎が養われることになる。

学習指導要領 2項 社会科の目標及び内容によると、このように示されている。

社会科の目標では、3点が大きく書かれている。

#### 1 社会生活についての理解

地域社会や国家の発展に貢献しようとする態度を育てることが重要である。

まちづくり学習では態度は育っていくものだし、それを育てていくことが重要である。

## 2 我が国の国土と歴史に対する理解と愛情

「身近な地域や市、県の様子についての指導を踏まえて、我が国の国土の地理的環境とそこで営まれている産業の様子などの理解を図り、我が国の国土に対する愛情を育てる」としている。

この事から、地域社会の愛情を育てる事が重要なものになっている。地域の愛情を育てるにはまちづくり学習は育ちやすいのではないだろうか。ただ、愛情だけないものになっている場合はまち学習からまちづくり学習に買われてないと筆者は分析する。

## 3 公民的資質の基礎

公民的資質というのは、国家社会の形成者というのは、市民・国民として行動する上で必要とされる資質と示されている。これは、平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚を持ち、自他の人格を互いに尊重し合う事、社会的義務や責任を果たすこと、多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力。

これについては、まちを自らが作っているという事により、市民公民としての自覚を持ちながら、様々な視点から多面的に物事を考え、問題解決につなげる事ができるであろう。ただし公民的資質の基礎と言っている事から、「基礎」という部分に引っ掛かり、社会や地域と関わって「楽しかった」「面白かった」でとどまってしまう事も多いであろう。しかし、中学校高校での公民的資質を高めるためには、基礎においてまちづくり学習などを進めて自分が「国民」「市民」の一人だと感じる事が大切である。

社会科で社会的有用感を高める意義があると考えている。大学院の講義「学校教育特別研究Ⅱ」の一環で、半年間伊那小学校の実践を検討し2019年2月1日に伊那小学校公開学習指導検討会に参加した。伊那小学校は、1974年以降総合的な学習の時間（以下、総合学習と略す。）の実践校として有数の学校である。伊那小学校では、駅弁づくり、商店街の活性化、動物飼育、衣服づくり等の実践が行われており、3年間継続実践で行われている。伊那小学校実践を見る限り子どもたちは3年間の総合実践の中で子どもたちは達成感を実感しており、ほとんどが興味・関心から実践が行われている山根栄次（2010）<sup>7)</sup>にも書かれているが、子どもの興味・関心から学ぶという点は社会科と総合学習はどちらも共通しており、多くの学校で行われている学習法が、プロジェクト型の問題解決的な学習（PBL）<sup>8)</sup>である。

次は、教科書で分析する。三重県でシェア率が高く、全国的にも多くの学校で使用されている教科書である日本文教出版の『小学社会3・4・5・6上下巻』を以下の5点で分析し、表2-1に示すこととする。本表では、社会科教科書とまちづくり学習との関わりについてまとめたものである。まちづくり学習について、十分に教科書に記載されているものを◎、記載されているものを○、不十分に記載されているものを△、該当箇所が記載されていないものを×と表現している。観点は以下のとおりである。

- 1 自己効力感
- 2 社会的有用感
- 3 模擬的社会参加
- 4 直接社会参加
- 5 地域協働型社会参加

1, 2については, 社会的有用感に関する図から自己の視点から自己効力感, 社会の視点から社会的有用感を取り上げる。3, 4, 5については, 地域協働型社会参加の社会参加の視点から模擬的社会参加, 直接社会参加, 地域協働型社会参加を取り上げる。

表 2-1 社会科教科書とまちづくり学習の分析

| 単元                               | 1. 自己効力感                | 2. 社会的有用感                  | 3. 模擬的社会参加             | 2. 直接的な社会参加                 | 3. 地域協働型社会参加         |
|----------------------------------|-------------------------|----------------------------|------------------------|-----------------------------|----------------------|
| i 小学3年わたしたちがすんでいるところ pp.2-37     | ○市の様子についてはなしあう          | △自分たちだけで終わっている             | ◎ガイドブックを作る             | △作っただけで終わっている               | △地域の人のインタビューしている     |
| ii 小学3年農家イチゴづくり pp.82-86         | ○イチゴづくりしてみたいと思う         | ○イチゴづくり実際にしてみる             | ○                      | △インタビュー, 体験                 | ×                    |
| iii 小学3年工場について 明太子づくり pp.110-111 | ○お客さんに良いものを食べてもらいたい     | △明太子を作るお客さんに向けて            | ○                      | △ここからは読み取れない                | ×                    |
| IV 小学3年昔の道具 pp.121-127           | ○昔の道具を触ってみる             | ○キャッチコピー作成                 | ○                      | ○(子どもの時の暮らしを聞く, 資料館にインタビュー) | △                    |
| V 小学3年昔から伝わる行事 pp.128-132        | ○                       | ◎(保存会が中心となる中町づくり)          | ○                      | ◎実際に保存会の練習に参加している           | ○地域のひとと協働で祭りを行っている   |
| VI 小学4年上ごみの始末と活用 pp.20-37        | ○ごみステーションなどの見学          | ○ゴミを減らしていく取り組み             | ○                      | ○自分たちができることをやる              | ○環境に良い街づくり           |
| VII 小学4年上かけがえのない水 pp.54-57       | ○(水を大切に使う工夫, 節約について考える) | △(水資源を大切にくりかえす工夫を大げさにしていく) | ○(学校でどこの水かやる)          | △水を節約する工夫を考える               | ×                    |
| viii 小学4年上消防 pp.64-66            | ○消防署見学                  | ○火事が起った時の消防訓練              | ○(実際に作業を見たり, 参加したりする。) | ◎消防・防災訓練への参加                | ○自治会行事への参加           |
| ix 小学4年下伝統的な街, 蒜山の街 pp.132-139   | ○伝統的な街について, 特色ある街づくりをする | ○                          | ○見るのみ                  | △参加するのではなく, 見ているのみ          | ×                    |
| x 小学5年上沖縄の暮らし pp.24-27           | ○自分たちと比較して              | ×                          | ×                      | △企業の人にインタビューする。             | ×                    |
| xi 小学5年上高い土地の暮らし pp.38-43        | ○人に訪れてもらう工夫             | △                          | ◎アートフェスティバルや農作業        | ◎農作業やアートフェスティバル             | ◎農作業やアートフェスティバルに参加する |
| xii 小学5年上水産業 pp.90-91            | △水産業のまちを知る              | ×                          | △                      | ○漁協の方に聞く                    | ×                    |
| xiii 小学5年下琵琶湖の環境                 | ◎赤潮発生して水質保全活動           | ○自然を基にする運動                 | ○琵琶湖を守ることを             | ◎滋賀県フオロー手インク                | ○生き物の吉原を守る運動         |

|                                |                               |                        |                                     |                                        |                                 |
|--------------------------------|-------------------------------|------------------------|-------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------|
| pp.78-81                       |                               |                        | 考える                                 | スクール                                   | 動, 湖岸掃除                         |
| Xiv 小学5年下<br>自然災害<br>pp.90-92  | ○地震や津波に<br>ついて自分事<br>とらえる     | ○地域の人<br>の行の<br>達成感    | ○自分たち<br>で災害にあ<br>ったことを<br>考える      | ○市役所の人<br>に来てもら<br>う防災マッ<br>プ作り        | ○地域の目<br>治体の人と<br>ハザードマ<br>ップ作り |
| Xv 小学5年下<br>日本の森林<br>pp.95-101 | ○森林との役<br>割, 関わり              | △森林を守<br>る活動           | ○森林を育て<br>る仕事を知る                    | △森林を守る<br>会を訪れる                        | △                               |
| xvi 小学6年上<br>奈良時代<br>pp.32-35  | ○東大寺などの<br>寺                  | △寺を近く<br>の人に説明<br>するのみ | ○修学旅行な<br>どで寺を訪<br>れる               | ○寺を知って<br>もらうパン<br>フレット                | ×                               |
| Xvii 6年下<br>政治の働き<br>pp.28-32  | ○市役所,<br>税金の行方,<br>裁判所の役<br>割 | ○目らっ<br>ていう意<br>識      | ○自分たち<br>のよ<br>うにつか<br>うにつか<br>うにつか | △市議会を<br>訪れる, 子<br>どもも議<br>会をやっ<br>てみる | ×                               |

単元に示した数字は、ページ数を示している。◎は、十分に記載があるもの、○は、記載があるもの、不十分に記載されているものを△、記載がないものを△としている。日本文教出版教科書を参考に筆者作成

教科書を分析してみると、自己の視点、自己効力感は、ほとんどが△は少なく○か◎となっている。ほとんどの教科書で自分事と捉え、自分で調べてまとめていきたいと意欲を書き立たせるものになっている。しかし、社会的有用感について分析するとほとんどのものが○や△が多くあり、社会的に認められたと教科書教材を行うだけでは感じにくいのではないかと考えられる。教科書教材に沿った単元で地域教材を用いたまちづくり学習を行う必要がある。社会参加については、模擬的社会参加のように、学校内でやってみるといった教材は多く用いられていることが明らかになった。また、直接的な社会参加でも、訪れ、インタビューするなどの参加の方法が多くなっている。祭りに参加し、田植えや稲刈り、まちづくりに参加や参画していくといったものは少ない現状にあることが見受けられる。

## 第2節 日本のまちづくり学習の課題

社会的有用感を高めるまちづくり学習の現状から分析すると、以下のようなところが課題である。

1つ目は、まちづくりにかかわる具体的な行動が不十分であるという点である。まちづくりをしないといけないとどのようにまちづくりにかかわるか、どのようなものが効果的なのかが示されていない現状がある。具体的な方法を示す必要がある。筆者は、社会参加を一つの方法として示す。

2つ目は、学校教育の中で社会科や総合的な学習の時間において地域の人と協働する仕方が分かっていない。コミュニティ・スクール<sup>9)</sup>や地域協働が叫ばれている。さらに、地域の人と連携し推進して事業を行う必要がある。しかし、具体的にどのようにしたらよいのかなどが示されていない。

よって、筆者は以下の2つの課題を克服するために、地域協働型社会参加が有効な方法だと考えられる。

筆者は、社会的有用感を高めるには、地域協働型社会参加の方法を用いる方法が良いと考えている。唐木(2008, p.46)によると社会参加の意義はこの2つに分けられるとされている。社会参加を社会科の方法として利用することは重要である。社会参加を社会科の方法と

して捉えることの意義は二つある。1つ目は、社会参加することによって得られる社会的有用感、社会の一員としての自覚を深めるのに必要不可欠であるということである。2つ目は、社会認識の質は社会参加という具体的な体験・経験を通してさらに高められるということである。社会参加学習を筆者なりに類型化してみると以下のように分類される。下に行くほど、社会参加の程度が高度化して、社会的有用感を高めやすいと考えている。

## 第1項 社会参加の類型

表2-2 方法としての社会参加

| 参加の種類        | 内容                                                                                                                                  | ロジャー・ハート参画のはしごの段階                                                                  |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 消極(間接)的社会参加  | 日常生活における消費行為それ自体を社会参加と考えている。日常している行為自体が社会的価値の創造、社会形成に関わっているものを認識させる。<br>授業内でこのような事をしていきたい、これからこうなるといいなと考えるだけで留まるなどはこれにあたる。          | 2<br>子どもたちは、ほとんどこれを受けて何か行動しよう、社会にかかわっているとは考えていない。                                  |
| 象徴的・疑似的社会参加  | 社会の問題の解決に模擬的にかかわる事を通じ当事者は相互関連性を持っていることを知る。<br>ロールプレイやシミュレーションを通じ自分たちで直接的関与が難しい場合や関与が出来ない場合に行われる参加方法である。<br>模擬裁判や環境問題・戦争・紛争問題などがあたる。 | 3～4<br>子どもたちは社会の問題があることは理解し模擬的に考える事は出来たと思う。ただ、社会の一員であるとはまでは考えられていないし大人とともに行ってはいない。 |
| 直接的(積極)的社会参加 | 社会の問題の解決に直接的に関わる事である。当事者の相互関係的を直接的にとらえる。<br>地域社会の問題を取り上げて、その問題の解決に、今ある活動などに積極的に参加する。そして、意見をいう事で解決していく。提案型、社会参加、企画に参加するものがこれに含まれる。   | 5～8<br>直接的(積極)社会参加の程度により異なる。                                                       |

橋本 康弘 (2012,p.195-196) を基に筆者作成

以上のように社会参加にも類型があり、筆者も社会参加の高次段階である直接的社会参加を推奨したい。直接的社会参加は、他の社会参加より直接かかわっているというメリットがある。直接的社会参加は関わっているの社会的有用感が高まりやすいと思われがちである。直接的社会参加についても既存してあるものに参加するだけ、市役所などの行政・企業に提案するだけでは実行できたそれで終わりになっており、その結果、子どもたちも達成感や社会に役に立つという実感を得られていないと感じてしまうのである。よって、地域協働型による社会参加に意義を感じ地域と協働することが必要であることを述べているわけである。この点について直接的社会参加の類型を述べる事とする。提案型、発信型、協働型、新しい問題解決型、イベント(行事参加型)が該当する。直接的社会参加については、表2

－3にまとめることにする。

表2－3 直接的社会参加の類型

| 参加の種類                                                     | 内容                                                                                                            | ロジャー・ハートの参画のはしごの段階                                                                                    |
|-----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| イベント（行事）参加型                                               | 社会認識として今まで学習した地域や全国にある行事に足を運び、参加者としてイベントに参加する。この時に運営には関わらない。                                                  | 2～3<br>社会のイベントや行事などに参加していても運営に関わらないためただ参加しただけにとどまっている。                                                |
| 提案型<br>小西正雄提唱<br>(1997,pp.8-20)                           | 社会認識として今まで学習したものに対して一人一人もしくはグループで改善策などを提案する。提案するだけで、提案したものについては、教師がもっていく。                                     | 4<br>自分たちがその問題に関わりなにかしようということは感じられるが、提案をクラスで考えるだけで留まっている。                                             |
| 発信型<br>小西正雄提唱<br>(1997,pp.10-15),<br>西村公孝<br>(2000,p.198) | 提案したものを実際にその人に学校に来てもらったり、自分たちが工場、商店などに出向いて提案したことをプレゼン、資料等で発信したりすることで自分事として考える。                                | 4～5<br>子どもたち自らが発信することで社会の為に自分の声で変わるかもしれないと感じる事ができるのではないかと感じる。                                         |
| 主体的社会参加型<br>(新しい問題解決型)<br>今谷順重提唱<br>(1991,p.35)           | 自然に、自発的かつ主体的に社会生活に参加しながら作る方法。具体的には、時間的にも場所的にも難しいので、修学旅行などの学校行事と社会科学習を絡めて行う。                                   | 3～4<br>社会参加として学習してきたことを実際にその人達に会って話をしたりしているが行事での事なので修学旅行などで実際に見て発信するのは1回きりになる可能性が高い。また、社会科としては行えていない。 |
| 地域協働型<br>唐木清志提唱<br>(2008,p.70, pp.85-87)                  | 学習を踏まえ地域の人や社会で活躍する人と一緒になって活動し社会に認められることである。<br>例として挙げると、地域にある公園のカフェ必要性を感じ、街づくり協議会に人と自分たちも話し合いながら企画立案して作っていった。 | 6～8<br>ロジャー・ハートも提唱するように大人と一緒にやって行くことにより、子どもは参画しやすくなる。そして、現実離れしたのではなく現実に直結した理想に近いものになると考えられる。          |

筆者作成

上記の表から、地域協働型社会参加を望むべきだとしている。社会的有用感を高めるには地域協働型社会参加（地域の人と関わって社会参加）を望むべき理由として、次の2点を挙げる事ができる。

- ①地域、社会との結びつきが強まる
- ②協働していることで社会にかかわった実感がつく

## 第2項 社会的有用感の高まり

地域協働型社会参加を検討するために、まず、ロジャー・ハートの参画のはしごを参考

にする（表6参照）。これを見ても、ロジャー・ハートは、操つられている状態である操り参画を第1段階、第8段階として、「子ども主体で始め、大人と一緒に決定する」という風に段階を踏んでいく。段階を踏んでいくにつれて、子ども主体で始め大人も共に行っていくというのが分かる。

表2-3 ロジャー・ハートの参画のはしご

|   |                            |
|---|----------------------------|
| 8 | 子ども主体で始め、大人と一緒に決定する。       |
| 7 | 子ども主体で始めて、子どもが指揮する         |
| 6 | 大人が始め子どもと一緒に決定する           |
| 5 | 子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる   |
| 4 | 子どもは仕事を割り当てられるが、報酬は割り当てられる |
| 3 | 形だけの参画                     |
| 2 | お飾り参画                      |
| 1 | 操り参画                       |

ロジャー・ハート（2002）より筆者作成

しかし、これでは、参画の大きな全体について述べているため、具体性に欠けており、社会的有用感を高めるといった目的をした社会参画ではないことが挙げられる。

木下(2003)は、次のようなことを指摘している。

「社会科や総合的な学習の時間ではよく行われている学習である。4段階以降だと子どもが活動に積極的に参加している。」

筆者は6段階以降を必須とし、できる限り7段階以上を目指すべきである。まちづくり学習の中では、商店でも、工場など街の人と関わっていく。その時には、大人の人が存在しそれぞれにシステムや規則がある。その時には、子どもと大人が協力することにより、適切な社会参加が行われる。子どもだけ、大人だけと言った参画もあるが、子どもだけが行った社会参加は、活動だけにとどまりがちであり、社会の中で活かされる可能性は極めて少ない。

ロジャー・ハートの理論の前提として、ユネスコの子どもの権利<sup>10)</sup>がある。子どもの意見の尊重（第12条）にある。

第12条「締約国は、自己の意見を形成する能力のある児童がその児童に影響を及ぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利を確保する。この場合において、児童の意見は、その児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする。」

これを見ると、子どもは自由に意見を表明しなければならず、大人に言われるだけではい



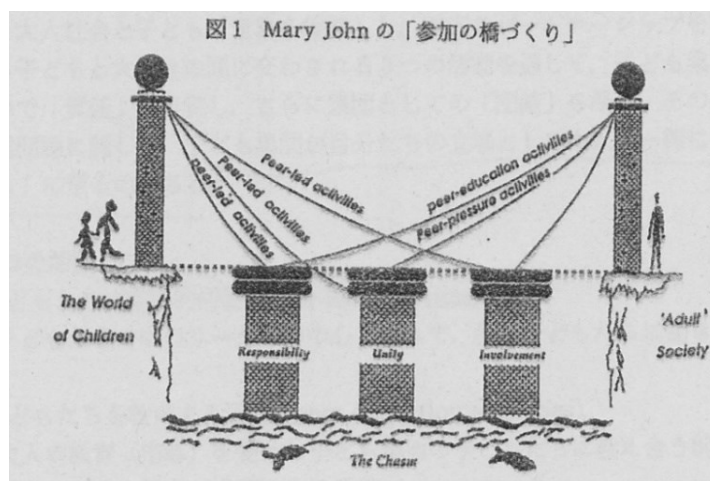
けないことが読み取れる。

ロジャー・ハートの論文には次のような批判論も言われている。

ロジャー・ハートは、参画は大人として行う必要があると指摘し、実際の実践事例を例として挙げているが、しかし、事例を見ると、8段階まで高まっていると思われる実践は少なくハート自身も「本物の参画にならないこともあり、まだ手探り状態」と言っている。

田代高章(1999)は、はしごという発想自体が父権社会的な伝統的観念<sup>1)</sup>強化する危険があること、子どもたち自身が自らの力を変容させていくというプロセスを明示するモデルが必要であることを指摘している。

田代高章(1999)に書かれているメアリー・ジョンの参画の橋づくりも参考に(図2参照)。このモデルは、子どもの「組織化」に着目している。子どもたちが参画をしていく為の組織化に合わせて大人の役割も明記され、子ども同士の関係性、大人と子どもの関係性の変容も見受けられる。参加の意義としては、民主社会の形成と個々市民性の形成である。また、子どもと大人、及び同輩として子どもと子どもとの関わりのある活動を通じて構築されていくものと考えている。



田代高章(1999,p.191)より筆者作成

図2-1 参加の橋づくり

参加の橋では、協力的・共同体的かつ、協動的な関係で問題解決に参入していく。その為の柱として次の3つがある。

- ① 自らの責任をもつ(責任)
- ② 子どもたちの集団が、自律的な集団として、責任の下に大人と関わっていくレベル(団結)
- ③ 子どもたちの集団が大人との関係でパートナーシップに基づき協働して諸問題に取り組むレベル(参入)

他にも、フランクリンの「参加の11段階」、ホルダーソンが「参加の輪」<sup>12)</sup>として、

ハートの理論を基に問題点を修正し作成している。

以上の参画のはしごと参加の橋づくりから学ぶと次の事が言える。

地域の人と協働で行う協働的社会参加を提唱し大人とともに社会とかかわっていき社会に参加していく必要であり、大人が主体性を持つのではなく、大人同士、子ども同士、子どもと大人が関係を持ちながら対等な立場で議論しながら変化すべきである。

これを基に、ロジャー・ハート（2002）の参画のはしご、メアリー・ジョンの参画を参考に、地域協働型社会参画を見据えた参画のはしごの表を作成した（表2-4参照）。

表 2-4 地域協働型社会参加の段階および参画のはしごとの比較表

| 地域協働型社会参加の段階                                                         | 地域協働型社会参加の特徴                                 |
|----------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| 9 地域の人と全ての子どもが一緒になってイベントや事業を立ち上げて最後まで行い社会に認められ、これからも地域や社会の一員として活動する。 | 主体的に取りかかりと抽象的か地域協働型では社会に認められて、地域や社会の一員として活動。 |
| 8 地域の人と全ての子どもが一緒になってイベントや事業を立ち上げて最後まで行い社会に認められる。                     | 子どもが指揮するになっているが、全ての子どもと地域の人と一緒にって行い認められる。    |
| 7 地域の人と全ての子どもが一緒になってイベントや事業を立ち上げて最後まで行う。                             | 大人がしかけて行う点。又、決定し合いながら最後まで行う点。                |
| 6 大人と全ての子どもが情報を集め一緒になってイベントや事業を立ち上げて最後まで行う。                          | 大人と一緒にって行うとしており、この段階では地域とは限定は指定なし。           |
| 5 大人から情報をもらい、一部の子どもがあるイベントや企画などを一緒になって作る。                            | 情報をもらうのは同じだが、一部の子どもと一緒に作る。                   |
| 4 大人から仕事が割り当てられ、その仕事内で話し合いながら大人と子どもが詳細を決めて取り組む。                      | 報酬に着目するか、詳細を決めながら行うか。                        |
| 3 大人が言われたものに取り組む。                                                    | 言われたものに参加する。                                 |
| 2 地域の行事やイベント、清掃活動等に参加する                                              | ただの参画か地域に参加か。                                |
| 1 地域のことについて知り、調べる。                                                   | 操られて行うか、受動的に調べる。                             |

ロジャー・ハート（2002）、安倍芳江（2010）を参考に筆者作成

これまで提案されてきた参加・参画の段階と違う所は大きく5点である。

- 1 全ての子どもが一緒になってという点
- 2 社会の人に認められ地域や社会の一員として活動する点
- 3 より具体性を持たせた点（「お飾り参画」等）
- 4 イベントや事業を立ち上げる点
- 5 地域の人と協働する点

この5つを強調した理由を次に示す。

1について、全ての子どもが行う事が6段階以上の人が行うのでは、一部の人だけが参画したことになりかねないと感じたからである。全ての子どもが社会参加していくことが必要である。

2について、社会の人に認められて地域や社会の一員として活動すると言ったことである。社会の人に認められると言った他者からの意見と言った部分が社会的有用感では大切となってくる。社会の人に認められ一緒になって行っていくことが重要であり、社会や地域の人と関わっていくことが結果的には社会的有用感へとつながっていくからである。

3について、より具体化をすることを心がけた。ロジャー・ハートの参画のはしごでは、参画について大きな枠組みで書かれている。実際に日本でプログラムを組んで行っていく場合、参画のはしごをそのまま行っても社会的有用感が育つとは考えにくい。例として、お飾り参画があるが、飾るとは何をどのように行うのかが明確ではないことがある。それ以外の段階の言葉も大きな枠組みで何をどのようにどんな人と行うかが書かれていない。これをより具体化した。

4について、イベントや事業を立ち上げて行うという事である。イベントや事業、何をやるというのを子どもたち自身で考えて取り組んでいく必要がある。今ある事業を改良する、もしくは、今あるイベントのある企画を増やしていくのもいいと思うが、地域の活動に参加するだけでは、高次段階には望めないと考えている。子どもならではのイベントなどを自ら発案し、子どもだけでなく、地域の人と話し合いながら理想論で話すのではなく、現実的にどんなことができるかを考え、取り組みまちづくりとしてどんなことが必要かを考え、調べ、調査し、行っていく必要があると考えたからである。

5について、2、4と大きく関わる事である。子ども同士で考えた社会参加では、よくない。地域の人と一緒に「協働して本事業を行う必要がある」なぜなら、地域の事を「こうじゃないか」といった予想で終わってしまったものを計画で考えたり、調べたらこうだったからと言った偏った見方で考えてしまったりすることがある。それを行わないためにも、現実的で、その地域の現状に即したものになっていなければならない。そして、地域との企業、商店街などの協働する会社も1回で終わるのではなく、継続的にかかわっていく必要がある。

## 【注】

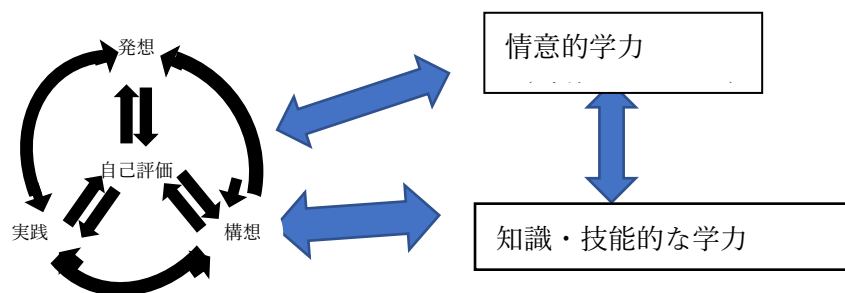
- 1) 第5・6章にかかわる授業実践が2019年の為、指導要領は2010年版指導要領を用いる。
- 2) 「まち」学習については、1章2節にあるまちづくり学習のことである。
- 3) 佐長(2006)『社会科研究』第65号によると、価値によると、トリスモデルを参考に構造表が作られ、価値を判断することである。
- 4) 柿沼葉子(2013)柳沼葉子 市川健太 岩倉成志 野中康弘(2013)「日本橋常盤小学校における『まちづくり学習』の授業効果の持続性—授業実施5年後のパネル調査—」土木学会論文集 H(教育)vol69,no1, pp.9 - 20によると、まちづくり学習は、単発の授業、ゲストティーチャーを呼んで体験や街をフィールドワークして終わりが増えている。
- 5) 身近な現実の問題を追究して新しい社会生活の在り方を見通させ、それに向かって自己の生活態度並びに生活環境を作り替えていく意欲と実践力育てることに主眼があるとしている。  
<http://www.nara-wu.ac.jp/fusyo/gakkosyokai/philosophy.html>
- 6) 環境政策局(2000)によると、「持続可能な地域づくり」には二つの側面があります。一つは、環境への負荷が少ない地域づくりです。地域が環境に配慮することで、環境が持続可能な地域をつくっていくことを目指します。もう一つは、主体的で継続的な地域づくりです。地域自らが主体となった取組を継続的に行うことで、持続可能な地域をつくっていくことを目指します。
- 7) 山根栄次(2001)「社会科と「総合的な学習の時間」との連携の可能性」『三重県教育実践総合センター紀要』pp.9-16 三重大学教育学部より
- 8) 「Problem Based Learning」(問題解決型学習)と「Project Based Learning」(プロジェクト型学習)と2つに訳されるが、本論文では前者を取る。
- 9) 文部科学省 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/community/](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/)によると、コミュニティー・スクールは、「学校と保護者や地域の皆さんがともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子供たちの豊かな成長を支え「地域とともにある学校づくり」を進める法律(地教行法第47条の5)に基づいた仕組みです。」としている。
- 10) 1959年に作られたユネスコの条例であり、様々な論文では、この条例を基に多くの社会参加について語られている。
- 11) 夫権社会的観念とは、家父長制における夫権社会のことを指している。
- 12) 安部芳江(2010)「第2章 子ども参加支援理論の国際的展開と課題」『子ども支援学研究的視座』pp.51 - 65 学文社 は、様々な論者から示唆している。

### 第3章 地域協働型社会参加を視点としたまちづくり学習からの示唆

#### 第1節 総合的な学習の時間の実践におけるまちづくり学習

##### 第1項 総合的な学習の時間と伊那小学校

総合的な学習は、2000年から段階的に始まっている。現在は、週2時間の授業で記述的評価となっている。知識は、経験を積んでいくことで学習し理解していく。デューイの経験主義「子どもは経験の中から学ぶ」から来ており、子どもたちが経験や探究を主として行っていくものである。実践例として、長野県伊那市立伊那小学校<sup>1)</sup>などを紹介する。長野県伊那市立伊那小学校の5年生の実践から社会科と関連し得る総合的な学習（伊那小学校では、1・2年を総合学習、3－6年を総合活動）を取り上げる。伊那小学校は、3年間ごとにしかクラス替えがなく、担任もほぼ持ち上がりである。総合は、子どもの興味関心で行われる場合が多くある。実践例では、動物の飼育、学校探検、コメ作り、等が挙げられる。その中で、今回は駅前商店街の活性化の実践「明るくにぎやかで多くの人が集まる駅周辺を夢見て一地域の人たちと関わり合いながら駅周辺の活性化に取り組む子どもたち」を取り上げる。



平成28年度伊那小学校公開授業研究紀要 p.5より筆者作成

図3-1 伊那小学校で学ぶ力

##### 第2項 伊那小学校の実践

###### 【街を明るくする駅前をつくろう】実践の背景

小学校4年生4月社会科の学習で伊那市街地のごみの捨てられ方を人通りが多いところを中心にごみの種類と量を調べた。その中で、伊那北駅では、コンビニ弁当の容器や空き缶、たばこの吸い殻などの種類と量の多さに愕然とした。駅員さんから過去に捨てられている粗大ごみを見せて頂いた。ミニテーブルやぬいぐるみの処分に負担金額が必要なごみを見て憤りの声も起きた。その後、遥介の「ほかの駅もこんなにゴミが多いのか調べてみたい」という発案で、飯田線内の無人駅を中心にゴミの捨てられ方を調べた。他の駅も多くのゴミで汚されていた。聞き取り調査などを行い、地元の方々が『駅の汚れに心を痛めている事』『自主的にゴミを片付けている事』を知った。舞子の「伊那北駅もいつかはゴミだらけで人が集まらない駅になってしまう」という一言がきっかけとなり10月25日から駅の清掃活動を開始した。

【学習の流れと学習概要】

本学習の流れについて、人とのかかわり（地域協働）と、子どもたちの気づき（学習展開）を載せている。総時間は52時間といった長時間の内容になっている。表3-1に学習の流れを表す。

表3-1 「街を明るくする駅前を作ろう」学習の流れ

| 人とのかかわり                                               | 子どもたちの気づき 総時間52時間                                                                                                                          |
|-------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 明るくにぎやかで多くの人が集まる駅周辺にするためにさらに手を加えたいけど、地域の人はどう思っているのだろう | 駅前広場にみんなで計画したバーゴラやベンチ、日時計を作りたいな。                                                                                                           |
| 地域の人達の考えも自分たちの活動に取り入れたら駅前広場はもつとよくなる                   | 地域の人たちはどう思っているのだろう。                                                                                                                        |
| 自分たちの関わってきた活動をもう1度振り返って質問内容を考えてみたいな。                  | 単元目標：自分たちの考えを振り返り、地域の声を生かした今後の活動について話し合おう。                                                                                                 |
| 駅前広場に対してそれぞれの立場で違うんだな。                                | 地域の考え方を知る方法を考える(10)<br>調査する項目、調査対象<br>→班ごとにアンケートの内容を決め、それを基に質問内容を決める。                                                                      |
| 駅前広場が抱える問題点を結果から探ろう。                                  | ○アンケートを実施して考えをとろう<br>アンケートをとろう(10)<br>伊那北区の住民、伊那北高校生、市役所、商工会議所へのインタビュー                                                                     |
| 自分たちの考えと地域の考えを比べながら考えてみよう。                            | ○結果をまとめよう(20)<br>質問ごとに結果をまとめよう<br>アンケート結果から問題点を探ろう                                                                                         |
| 賛成の理由も反対の理由もわかる。迷うな。                                  | まとめた結果をもとに 地域や行政の方々と駅前広場を のこれからについて話し合いたいな                                                                                                 |
| いろいろな人の意見を基にこれからも活動を続けていきたいな。                         | 話し合いの準備をしよう(20)<br>→誰を呼ぶか、どんな内容にするか<br>高校生や地域の代表の方、行政の方をお招きして話し合いをしよう(1)<br>自分たちは駅前広場でどんな活動をしていったらいいのかな。<br>話し合いで得られたことをまとめこれからの活動を決めよう(5) |

平成20年度公開授業研究会指導案共同参観<sup>2)</sup>—5夏—(2008, p.2)より筆者加筆修正

本学習としては、以上のような図となっている。1年間の間でどのように行っているかが分かる図となっている。各教科との接続も行っている。割合のグラフの読み取りでは、算数、自分の考えを組み立てたり、自分の意見を組み立てたりする、質問の順序などを考える。調査などから生み出された図や統計的資料から効果的に活用し調べたり表現したりしていたり、駅前広場へのかかわり方を自分なりに考える事が出来るという事を社会科としている。総合的な学習の時間といえども、他教科との融合や合科学習を考えている。

2004年2月学習発表に向けてグループに分かれて調べている。あるグループでは、伊那北駅について、伊那北駅前広場について発表することになり伊那北駅や駅前広場の歴史について調べる中で昔の事について聞いてみたいとなり、アンケートを取ることにした。そのなかで、利用されていない、整備されていないのを改善すべき、ゴミを平気で置いて置く人がいる、駅前広場を壊す予定という意見もありそれについて市長に聞いたが管理が大変で維持費が大変の為、取り壊しも含めた駅の今後を検討しているとある。5年4月に取り壊すべきか取り壊さないでおくべきかについて話し合いしていた。そんな時、4月中頃に商店街で店を営む活性化理事会矢野さんの「何とかしたいなら存分にやればいい、八幡町としても協力する」所から実践が始まった。まずは、5月に樹木の撤去、池の掃除を市や活性化協議会の方で行った。掃除をした後、その場所で花壇を作りたいという話になり、それぞれの班がデザインを出し合った。それぞれの班はなかなかまとまらないため、教師の補助等でそれぞれの班を入れてこの字形で通路をつければいいなどになった。6月には花壇づくりを行った。高さや列なども考えながら行っている。

池の掃除を行ったのに、池の水の変色を見つけて、6月中旬には祐介がろ過機をなんとかしないといけないとなりろ過機の改良に取り掛かる、ろ過のフィルターが隙間だけであるからとフィルターに代わるものを入れるべきだとろ過について調べている。その中で、ろ過には炭がふさわしいと考え、20種類で試している。綿も使用するといいとして、様々な組み合わせとその順番を実験して決定している。各班の考えをまとめて決め、駅前広場にろ過機を九月に設置した。(やしマット→活性炭→砂→毛糸→砂)毎週一回炉材を洗い池の清掃も継続して行うことにした。

矢野さんの提案で、9月2回の土曜日に朝市を担当する事となり食料品店や花屋などで売っている。初めは、手伝いをするだけであったが、商品についても知ろうと実際の店を訪れてから次回では、看板を作り、テントなどに設置している。客から「きれいだね。頑張ってるね」などと声をかけられたりすることで、駅の掃除だと会話は少ないが朝市だと会話出来ることで駅前が明るくなるといいと感じている。10月には、本活動に関わってくれた駅員の矢野さんが退職するという事でお別れ会を伊那北駅で開いた。その後も、朝市の活動も継続しながら、前から商店街が実施している八幡町ハロウィンに参加した。

本活動で地域の方々の心を動かし、フリースペース活用や朝市の実施につながり地域の動きに入り込み会話したり行動したりすることで地域の一員として生きていること(地域に生きている)を実感していくわけである。人はその実現のために動き結びつきを更に強

いものになっている事を感じている。

### 第3項 子どもの問いから追究する重要性

総合的な学習の時間では、子どもの問い、子どものやりたいこと、学びたいことから追究してきている。

本実践でも、表3-1にあるように子どもの問いから始まっている。本実践では、「日時計を作りたい」「ガーベラを飾りたい」などといった子どもたちの問いから始まっている。「アンケート」を取るなどを言って、実際にアンケートをとったりしている。地域の人と協働するというのも、子どもが地域の人とで会うことで行われるわけであり、教師が一方的に指定や指示するものでは全くないと考える。平野朝久(2000)によると、「総合学習においては、題材(テーマ)そのものが子どもの求めや願いに基づいて決め出される、そのために、子どもの求めや願いの見取りが慎重になされなければならない。したがって、数か月かかって題材が決まることも珍しくない。総合学習では、子どもが自分の求めや願いに基づいた題材を追究する過程で、様々な問題に直面するそれは他人事ではなく、自分が何とかしたい問題であり、全力を尽くして取り組む。」としなければ述べられている。総合的な学習で大事なことは、子どもが「自分事」ととらえて、自分が受動的学習者ではなく、能動的学習者として学びに向かうことである。自分事として捉え、探究自ら学びに向かうことは薄いであろう。

### 第4項 総合的な学習の時間におけるまちづくり学習の考察

#### 【本実践の考察】

本実践は、総合学習である町の活性化に関する実践を取り上げた。きっかけは、ろ過の活動から始まっている、2年間以上にまたがっているが、本学習を1年間で社会科と総合学習の合科で社会参加もしくははしていくということができているのではないかと感じた。アンケートを取ったり地域の人と共に朝市を行ったり、ハロウィンイベントを行ったりと子どもたちが地域の人と関わって行こうと考えられる実践ではなかったかと感じた。地域の人と言っても、本実践では、伊那高校の高校生や地区の代表の方や行政の方と協働している。地域の人も一人ではなく、たくさんの立場の人の話を聞くことで、子どもたちは、自分たちの街を活性化するためにどのようにしたらよいかより具体的に考えることができる。

まちづくり学習の視点から、以下のように分析できる。

| 項目                   | 評価 |
|----------------------|----|
| 問題を調べて、調査し探究する。      | △  |
| 地域にある物的資源・人的資源を活用する。 | ○  |
| 直接的な社会参加             | ◎  |



|              |   |
|--------------|---|
| 住み手の立場から捉える。 | ○ |
|--------------|---|

社会的な問題を調べて探究することはできているが、総合学習のため、社会認識が付いているかどうかは定かではない。社会認識をつけた後、公民的資質をつける必要がある。子どもたちと一緒に地域の高校生や、行政の人と協働でフォーラムを行ったりしていることで物的資源や人的資源を活用しているといえる。直接的な社会参加は、朝市を担当したり、やはたちょうハロウィンに参加し足りたりしていることで社会参加が高まっている。行政・住民・自分たちの意見も聞いていることで様々な視点を取り入れていると考えられる。

#### 【総合的な学習の時間と社会的有用感の関係】

伊那小学校の事例でもあるが、小学校学習指導要領(2020)には、「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の探究のプロセスが必要であると示されている。課題の設定から情報をしっかりと収集し自分なりにその課題を分析して解決まとめていくことが大切である。問題解決の学習のプロセスである。また、目標の3つ目には、「探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。」地域と協働していくことと互いの良さを感じ、そして社会参画して良さを見つけあうことにより社会的有用感につながると考えられる。社会的有用感とは、社会に認められる必要があるが、そのためには子どもたち自身が探究したい課題である、地域にある「問い」や疑問を見つけてくる。問いを解決したいとなり問題解決していく。子どもたち自身で学び続けていく必要がある。

## 第2節 サービス・ラーニングの実践におけるまちづくり学習

### 第1項 サービス・ラーニングとは

アメリカのサービス・ラーニングは、「実践することで学ぶ」というデューイの経験主義から来ている<sup>3)</sup>。アメリカで広く行われているコミュニティ・サービス活動（奉仕的社会活動）と教科学習（理論）を繋げた社会貢献型の体験学習の事を指す。それぞれの地域社会のニーズに導かれ対応するもので、サービス活動を成し遂げることという経験を通して、「学び」を引き出す授業である。具体的なプロセスは、①コミュニティの抱える課題の調査⇒②取り組む課題の特定⇒③特定した課題解決⇒④計画⇒⑤実行⇒⑥振り返り・評価というような形を取っている。この流れだけ見ると既存の問題解決学習と似ていると思われがちであろう。しかし、アメリカでは、社会貢献する事により子どもたちが役に立つ喜びや学びの動機づけを実感している。そして、効果として、よりよい問題解決者としての一人一人の成長と自分の暮らす地域社会の取り組みを通じて、社会的責任を受け入れ、他者にサービスすることを学び社会変革につながる社会的成長、深みが有り繋がりを持った「学び」を助長する知的成長へと繋がる。子どもたち自身が子ども市民となって実際の大人と動かしていく必要が有る。

## 第2項 サービス・ラーニングの実践

実際には以下のプロジェクトが行われている。園芸プロジェクトで町を花で埋め尽くすのを地域の人と行い、年配の人が自分の家系図を書くための支援、困窮状態にある家庭の実態を知り、その住宅を見つけて支援していくなどがある。小中高大と上がっていくたびにプロジェクトの内容はより深みを持っていく。学校教職員の会議や市の重要会議にクラスの代表者が発言したりするなどまで発展する。このように見ていると町の人たちと協働で何かのプロジェクトを行っているのが読み取れる。

本研究では、「clean streets, green streets」の街をゴミのない街にするために行っている実践を取り上げる。本実践は、社会以外にも数学、美術などと言った教科横断的实践である。ワークシート等は小中高のどこの学校でもできるように作られている。

サリーブラウンの p.34 の表 3-2 を翻訳したものが以下である。

表 3-2 Clean streets, Green streets の各教科での学び

| 主な教科                  | 学習目標                     | 必要なスキル                 | 大きなアイデア                              | サービス活動                                     |
|-----------------------|--------------------------|------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------------|
| 社会科                   | 学校と地域の接続、地域問題、情報資源を使う    | 助けを申し出る<br>傾聴力<br>促進する | グローバルに考え、地域に行動する。                    | ゴミのクリーンアップ<br>注意書きのポスター：                   |
| 数学                    | 比率と割合                    | 比較する<br>計算スキル          | 地域の違う種類の評価—測定、表現、感情、視点—              | パーセンテージ評価                                  |
| 理科                    | 実験<br>物質の保存<br>化学と物理の変化  | 調査、分析<br>問題解決          | 保全<br>—自然の方法です。—<br>保守主義             | 崩壊実験<br>リサイクルオプションの説明<br>包装調査              |
| 言語科目<br>(日本では、国語に当たる) | 適切な文法<br>文章構造<br>正確な言語能力 | 説明する<br>要約する<br>明確にする  | コミュニケーション “最初に理解しよう”<br>(covey,1989) | 事由に書くことができる日記<br>エッセイを書く<br>クラスメイトや家族と議論する |

Sally Berman (2015) より筆者翻訳し作成

表 3-2 から読み取れるが、教科横断的な中でも、社会科の役割としては情報を集めたり、学校と地域を接続したり、地域問題を分析するところにあるところがわかる。そして、助けを申し出するなど、他者（特に地域の人）の助けがいることになる。また地域の

声をしっかり聴くことも大切である。これによって地域の人との協働が社会科で重要であることが読み取れる。大きなアイデアとなるのが、単元全体の目標に当たる。その目標に向けて、スキルを身につけさせながら、どのようなことが必要なのかを考えさせ行動に移らせていくことがわかる。

サービス・ラーニングでは、学習を始める前に計画をしっかりとたてて置くべきであり段階表を作るべきである。3つの段階（監視、計画、評価）の段階を作る必要が有るとしている。この実践例で示された計画の段階表が以下のようなものである。

表3-3 Clean street, Green street の段階表

| 経営計画 ; Clean street , Green street |                                                                                                   |                                                                                                                      |                                                                                                      |
|------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 段階                                 | 計画                                                                                                | 監視                                                                                                                   | 評価                                                                                                   |
| 1                                  | 道路の契約部門はハー下ナ<br>シック用プを認認して道路<br>探用する確認し取得し<br>すクケる情アし保ササイ<br>をる一まる手紙書きま<br>をのまるる紙書きま<br>をのまるる紙書きま | 道路部門との連絡を維持<br>し性を評価する。                                                                                              | 家族の評価を認める。<br>エの評価を認める。<br>クの評価を認める。<br>下の議論を認める。<br>生の議論を認める。<br>徒の議論を認める。<br>と家の議論を認める。            |
| 2                                  | 反達と語りし合って論す<br>る。シ割り当て(役割)担<br>“look of letter 振よ可ダ ク可<br>活動、書にト付と親の許<br>論し面ク送源す。親の許<br>書にト付と親の許  | 著る名濟みの許可書取集<br>す。保護者電話番号をて用<br>人「look of Litter」の作<br>「look of Litter」の作<br>「look of Litter」の作<br>「look of Litter」の作 | 必要に心くじて計画を修<br>する。ラコでイブンテ<br>評価をラコで行イブンテ                                                             |
| 3                                  | 必を要に心じて両親の助けを動<br>借行行てて、ゴミ目の選別の掃と量<br>ををををををををををを                                                 | クリットンアッブク<br>ポ学生はチエ本チ共一有<br>エ生トスターチをををを<br>ベニススターチをををを<br>ポーススターチをををを                                                | 生徒に進拂状ををををを<br>価さし進基まずののの<br>話し進進基まずののの<br>一は進進基まずののの<br>の「は進進基まずののの<br>イ新正は進進基まずののの<br>る新正は進進基まずののの |
| 4                                  | 2回目をの清掃活動、第の<br>クリ二のンアッ活、ごみ分<br>別一おのンアッ活、ごみ分<br>すおのンアッ活、ごみ分<br>すおのンアッ活、ごみ分                        | 個人読み接続エセ<br>をのののののののののの<br>計のののののののののの<br>ツのののののののののの<br>ツのののののののののの                                                 | おはにたおはにたおはにた<br>は規を規を規を規を規を<br>新規を新規を新規を新規<br>規を規を規を規を規を規を                                           |
| 5                                  | 最終的なる掃除をす。来<br>のラけるによらフに頼る。エ<br>をラけるによらフに頼る。エ<br>をラけるによらフに頼る。エ                                    | ホリ生がオ<br>ンが学お互<br>の習お互<br>熱は学お互                                                                                      | 生徒と教師が<br>トて話合<br>て話合<br>て話合                                                                         |

Sally Berman (2015) より筆者翻訳し作成

### 第3項 振り返りの重要性

志々田（2009）では、サービス・ラーニングの学習過程の中で振り返りの重要性を指摘している<sup>4)</sup>。現在のサービス・ラーニングの学習過程では、既存の学習過程をどう活用しようとするかというものが多くと指摘している。「振り返り」を強化することは、教育的経験を学習成果へと転換することができるかと指摘している。コルプの循環型学習モデルでは、①具体的経験②振り返りの観察<sup>5)</sup>③抽象的概念化④能動的実験に分けていることを指摘しており、振り返りが学習プロセスを誘引する役割を担わせたことでサービス・ラーニング論に刺激を与えたとしている。

### 第4項 サービス・ラーニングにおけるまちづくり学習の考察

本実践は、ゴミを扱った実践であった。ゴミについて調査し研究しながら自分たちの街に足りないものは何かを調査し研究する。その時に理科や国語の要素も入れながら教科横断的に行っていた。それだけでなくサービスという社会的活動を必ず入れていることである。社会的活動をすることで奉仕の精神も生まれ自分たちで何かを使用それが地域や社会の一員となるようになっており、本研究である社会的有用感と関連付けることができる。そして、次のサービス活動をするために、振り返り活動を入れている。振り返りを行うことで教育活動にとって意義があり、さらにどのように次の活動にしようかと変更していくことが可能で改善していくことができる。

まちづくり学習の視点を基に分析してみると、以下のようになる。

| 項目                   | 評価 |
|----------------------|----|
| 問題を調べて、調査し探究する。      | ◎  |
| 地域にある物的資源・人的資源を活用する。 | ○  |
| 直接的な社会参加             | ○  |
| 住み手の立場から捉える。         | △  |

ループリック評価を用い、段階を用いながら自分は奉仕段階を進めていこうとしている部分は評価できる。また、計画し修正するといったPDCAサイクルを回している。保護者・地域の人として道路公団の人と話をしながら進めている。直接的な社会参加は、3回の清掃活動を計画し行っている。ゴミの選別と計量を図ったり、清掃用具の組み立てなどを行ったりしながら、次の計算方法や調査方法を考えながら行っている。

### 第3節 日本型サービス・ラーニングの実践におけるまちづくり学習

唐木（2008）によると、サービス・ラーニングを日本型にすることを提案している。唐木（2008）では、4段階指摘している<sup>6)</sup>。①問題把握⇒②問題分析⇒③意思決定（価値判断）⇒④提案・参加である。日本型サービス・ラーニングの条件は5つである。地域の課題を教材化、プロジェクトの課題を組織する。振り返りを意識すること、学問的な知識・技能を習得活用SL（以下、サービス・ラーニング『Service Learning』をSLと略）する

場面を設定すること、地域住民を協働することである。

### 第1項 地域社会の課題を教材化

廃棄物処理は地域社会の課題として存在している。燃えるか燃えないか、缶・ペットボトルのリサイクル、ゴミの分け方・出し方はどうかといったことは自治体で異なってくる為、全国的な基準が難しく、住民と協力して対策や事業を展開している。当初の計画通りには進まないと悩ましい状況がある。廃棄物は地域社会の解決こんな課題となる。ゴミを出す主体であるため、自身の生活に引き付ける事が出来価値ある教材となっている。地域社会の課題の中では「環境」に含まれる。

横浜市はごみ排出量の削減を目指し、「ヨコハマG30（ゴミ減量目標30%でごみゼロ）」という取り組みを進めている。小学校副読本などでも記載されている。

地域の人々と対話する活動を単元構想に位置づけている。住民の本音を聞き出し様々な矛盾に気付かせることに役立ち追究するエネルギーへと転化するという考え方がある。

### 第2項 プロジェクト型の学習を組織

表3-4 「生活に結び付くゴミ分別たんけん隊の学習段階」の学習活動

| 学習段階        | 学習活動の概要                                                                                                        | 学習活動の展開                                                                                                              |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| I<br>問題把握   | 家のごみの出し方を振り返り、横浜市のごみ減量政策に対する関心を高める。                                                                            | 第1時：4月1日から家でもごみの分別をしているのかな。                                                                                          |
| II<br>問題分析  | ごみの出し方、ごみの収集の仕方、清掃工場の仕組みなど、廃棄物処理に関する社会の仕組みを理解する。                                                               | 第2時：家のごみの出し方を調べて話し合おう。<br>第3時：集めたごみはどこへ行くのかな。<br>第4時：清掃工場を見学してみよう。<br>第5時：見学したことを話し合い、実際のごみの量を調べよう。                  |
| III<br>意思決定 | 「ゴミの分別」に焦点を絞り、域の人々から聞いた話に基づいて、ごみ処理の方法について自らの考えを持つ。また、地域人々が計画的・協力的にごみ処にに取り組んでいることに興味をめる。                        | 第6時：地域のごみステーションを調べ話し合う。<br>第7時：分別が厳しすぎる必要があるかを話し合う。<br>第8時：働いている人の考えや収集の様子を取材しよう。<br>第9時：収集している人に話を聞こう。              |
| IV<br>提案・参加 | 「地域のために自分たちにできること」を考える中で、地域の人々が計画的・協力的にごみ処理に取り組んでいることに理解を深める。また、子ども自らが実際にごみ処理に関する社会的活動に参加するとともに、そこで考えたことを振り返る。 | 第10時：地域のために自分たちにできることを話し合う。<br>第11時：自分たちの計画を地域の人にも聞いてもらう。<br>第12時：地域のためにできることを計画しよう。<br>第13時：実践し地域の人の感想を聞いて活動を工夫しよう。 |

『子どもの社会参加と社会科教育』唐木清志（2008，p.100）より筆者修正

日本型S Lにおける学習段階の枠組みに当てはめると次のようになる。

日本型S Lという面から見ると、注目すべきは「IV 提案・参加」である。子どもの社会認識が深まっていなければ、強制的な提案・参加となる。提案・参加は、11時で身近な地域でどのようなごみ収集が行われているかを知った。

Wさんの話を聞き、発展的学習として地区のごみ収集活動に参加してその振り返りを行った。

子どもからは『『ごくろうさま』と言われたのが嬉しかった』という感覚は社会的有用感と呼ぶとして次の社会参加を促す原動力となる。

### 第3項 振り返りの重要性

実践は「ふりかえり」を意識しており、唐木は社会参加に焦点付け分析しているが山本が大事にしているのは「社会的な思考・判断」であり、社会参加活動を経験したことから、社会的な思考判断が深まり、深まったことで結果として子どもの社会参加に対する意欲を高めたこととなる。社会的な思考判断と社会参加の意欲を繋げるもの、教室と地域の学習を繋げるものがふりかえりである。唐木は「見つめたい子」に位置づけられたIさんの振り返りをしている。Iさんは、体験や話し合いをその都度振り返り学習を深めた様子であり身の回りのものから考えている。社会的な活動の継続には振り返りが必要である。

これは、唐木以外でも峯(2020)<sup>6)</sup>も指摘している。「無自覚な行動」から「自覚的な意識」への変化が必要だとしている。自分なりに評価し価値観を明確にすることが重要であるとしている。

### 第4項 学問的な知識・技能を習得、活用する場面を設定

山本実践は『やってみよう ごみの減量とリサイクル』という横浜市の副読本が有効活用されている。廃棄物は総合的な概念で様々な学問と関わっているが、4年生の為、高度の知識は難しいが、リサイクルの仕組みやごみ処理の知識や3RSの知識は必要である。

山本実践は調べ学習を共有し吟味して、価値判断が加えられる。そして、深められた社会的な思考判断が最終的には「自分にできる取り組み」として地域の人と協働する事へと発展していく。そのような仕組みが現実社会でどのように機能しているかを動的に理解させることにまで発展させている。知識が活用されて生きて働く知識となる。

### 第5項 地域住民との協働を重視

山本実践は、地域の人々の様々な協力に成り立っている。例としては、清掃工場で働く人、ゴミステーションで働く人、自治会長などである。多くの人の協力でごみ処理の取り組みが地域住民と子どもの共同作業となることが出来た。10時に話し合いをしたことを11時に自治会長に相談し収集活動に参加した。初めは、取材した人であったが、ゴミ処理を一緒に進める関係へと発展したことにより1地域住民へと認識していることになる。

最後に横浜市環境事務局に手紙を送った。G30会議を教室内で行い、案を出し合い、ブルタブ集めを行っていく事とした。

唐木は社会参加の視点を取り入れるには少し工夫するだけで行えるとしており、日常的な社会科授業をしっかりとしていくべきとしている。

#### 第6項 日本型サービス・ラーニングにおけるまちづくり学習の考察

サービス・ラーニングを唐木（2008）が日本型に直しているため、日本でも扱いやすいものとなっており、カリキュラムとして成立しやすい事がある。4段階にすることによって、段階ごとに設定しやすくなっている。今回唐木が実践例と出しておる中でも中学年の実践である。ゴミの実践と言えば、リサイクルや分別方法等について調べ学習を通して学び、清掃工場に行くのは一般的である。途中で、唐木は社会的有用感が高まったと書かれているが、ゴミ拾いの活動に参加するのは、子どもの中でも行ったことであるし、それだけで果たして社会的有用感及び社会的有用感が高まったとは考えにくい。また、社会参加も授業内でG30について考えてそれを提案し地域の人と関わったとはいえ、地域の人と協働したとはいえない。ゴミ処理活動に参加するだけでは、なかなか地域の人と一体となれたとは言えないのではないかと感じた。地域で困っているごみの分別問題やカラスなどによるゴミが盗られてしまう問題とかを解決すべきではないかと感じた。

| 項目                   | 評価 |
|----------------------|----|
| 問題を調べて、調査し探究する。      | ○  |
| 地域にある物的資源・人的資源を活用する。 | ○  |
| 直接的な社会参加             | △  |
| 住み手の立場から捉える。         | ○  |

家庭のごみの出し方から授業を出発させている。問題把握→分析→意思決定→提案・参加の手順を踏んでいる。物的資源・人的資源では、地域のごみステーションや自分たちのごみについて調べている。また働いている人の話や様子を調べて自分たちで考えている社会参加としては、ゴミ処理活動に参加すること、ブルタブ集めに参加することとしているが、しかし社会参加「じぶんたちにできることは」で考えたものは果たしてこれだけなのだろうか考える。住み手の立場というのは、自分が住んでいる街を調べたり、近くのごみステーションを調べたりすることにより、住んでいる自分たちの視点から捉えなおすことができているのではないだろうか考える。

#### 第4節 先行実践からの示唆

米国のサービス・ラーニングでは、直接取り入れると奉仕活動、もしくは社会的活動という意味合いが強くなる。日本に直接取り入れようとしてもカリキュラムが違うため、直接は取り入れられることができない。



総合的な学習とは、経験、探究、追究活動中心の学習となる。経験の中の知識では、子どもに入る知識が個々によって変わってくるのが予想される。社会科の授業では、社会認識をつけた後に、公民的資質の育成である社会参加及び社会参画を行う必要が有る。

日本型サービス・ラーニングでは、ゴミ活動に参加しているだけ等活動の希薄さが見受けられる。直接的に自ら関わって協働で行う事ができていない。まちづくり学習に関しては、直接地域の人と関わって自ら地域の役に立ったと実感しやすい事がある。

この3点から示唆を得たことが以下の点となる。

サービスを通じて、自らカリキュラムを作って地域の人とともに作っていくこと（地域の人と協働）を行う必要が有る。また、PDCA サイクルを重視することも必要である。サイクルが途絶えてしまうと計画してやって終わりというのが、総合的な学習などの体験学習でよく行われている。しかし、社会貢献活動を自ら子どもたちがしていくことで社会的有用感を高めることにつながる。知識（社会認識）を獲得するだけでなく、経験、見学、そして自ら追究しそして、クラスの仲間地域の人と考えていくことを授業で行う必要である。そして、社会科における知識である社会認識も入れながら社会参加カリキュラムの作成、学習過程や単元構成をしっかりと作成し行う必要が有る。

#### 【注】

1) 伊那小学校は、昔から成績をつけないなど独特な学校があります。

<http://www.ina-ngn.ed.jp/~inasho/>

2) 伊那小学校共同参観授業とは、公開授業研究会時に共同で参観する授業のことである。

3) 村上徹也「ボランティア活動を通して市民を育む米国のトレンド「サービス・ラーニング」日本青年奉仕協会 パワーポイント資料2

4) ゴルブは、「「振り返り」を強化することは、教育的経験を学習成果へと転換することができる」としている。

5) 志々田は、反省的観察と訳したがサービス・ラーニングとの関連から筆者は振り返りの観察とした。

6) 唐木清志(2008)「子どもの社会参加と社会科教育の在り方—社会科における知識・技能活用能力の育成—」全国社会科教育学会シンポジウム発表資料

7) 峯明秀(2020)日本社会科教育学会シンポジウムによって、振り返りの重要性を指摘している。

## 第4章 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習のフレームワークと学習論

本章では、第1節で社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習のフレームワークを第2節では、社会的有用感を高める単元からどのような単元で行えるかについて実践例から紹介する。

### 第1節 まちづくり学習開発のフレームワーク

#### 第1項 まちづくり学習のスコープ

学習者の認識対象となる、まちづくり学習授業開発の為のスコープは、社会的な見方考え方、地域の中で問題になっておりこれから問題になるのであろう身近な地域に関する課題（地域課題）とする。地域課題は、大小様々であるが、地域の中で育つ子どもにとってもこれから居住する上で重要な課題であり、社会的論争問題などにも生じているものもある。

現代の県や市に身近な地域に関わる問題は、少子高齢化や人口減少の問題、外国人流入、が特に重要となっている。具体的には、近年少子高齢化人口流出が相次ぎ、過疎化問題、コンパクトシティの問題が起こってきている。また、まちづくりに関連する問題点も多く存在する。台風や地震などが多い地域において防災・減災・安全の視点、災害ごみや水質汚濁の問題などがある。全国各地の駅前や商店街などにおいてシャッター通りが多く生まれ、商業施設の郊外化が進むなどの問題も起こってきている。

このような課題は、価値判断や意思決定を求められる問題も多くある。筆者が住んでいる津市の大門商店街を例として提示したい。ここでは、2017年に商店街のアーケードがなくなった。これには、「雨にも濡れないように残したほうがいい」、「昔からの伝統なので残しておいたほうがいい」などといった意見がある一方、「老朽化が進んでいる。」「アーケードを取ることで明るくなる」といった地域の中での意見論争があった。現在も、一つ課題を解決するにも、行政・民間・市民が協力して行っていく必要があることが分かる。地域創生や地域活性化、地域の魅力開発など地域に関する言葉もたくさんできている。地域にはどのような課題が具体的にどのようなものがあるか、鹿児島大COC地域創生プロジェクトを参照する<sup>1)</sup>と以下のような課題があると掲げている。

エネルギー、環境、教育、福祉、人口、健康・地域医療、観光、社会インフラ、水産業、農林これらの問題は、地域について社会認識を踏まえ、考察することにより、その問題点や解決策が明確となる。社会的有用感を高める社会科まちづくり学習では現代社会の地域課題の中から問題解決できそうかを勘案し地域課題として位置付けていく必要が有る。

#### 【「歴史」「安全」「住民」「環境」「店」領域】

第3章のサービス・ラーニングのカテゴリーと唐木（2008）の地域課題のカテゴリーを手掛かりに、まちづくり学習の領域を設定していく。地域協働型社会参加を視点としたまちづくり学習では、防災、ゴミなどの環境、商店などを取り上げてきた。

歴史や店は、市や県を掲げてのまちづくり、安全や犯罪、健康と福祉は、安全・健康環境は、エネルギー問題に関連して生じているまちづくりの場合が多い。

まちづくり学習では、環境問題、まちづくり課題等の中から「歴史」「犯罪と安全」「住民」「環境」「店」の5領域を設定した。

これらの地域課題をまちづくり学習として観点から捉えなおすと、歴史伝統から生じている「歴史」領域、安全に過ごすという点での「安全」領域、人口問題・少子高齢化問題からの「住民」領域、持続可能な地域づくりという点での「環境」領域、商店や商店街の活性化から「店」領域という5領域を設定できる。

5領域は、社会的有用感を高めるまちづくり学習のスコープとなる。5領域に対応する主要テーマを設定したものが表4-1となる。その領域の問題は、関連する他領域の問題も関連しながら課題解決学習を行う必要が有る。

「歴史」領域には、歴史的文化財、博物館、城下町に関する課題、歴史的景観等の歴史が大切にされるものの価値観が関わる。

「安全」領域には、消防・救急に関する問題、地震・台風などの自然災害が安全安心な街への価値観が関わる。

「住民」領域には、公共問題、高齢者問題、タバコ・アルコール、生活保護問題、人口問題が起こっていく中で生活しやすい街への価値観が関わる。

「環境」領域には、ポイ捨て、ゴミ収集などのゴミ問題、夜間の電気、騒音問題、違法駐車などの環境で住みよい街への価値観が関わる。

「店」領域には、シャッター通り、商店街、などのさらに良くなる街への価値観が関わる。

表4-1 スコープとしての地域課題の領域と主要テーマ

| まちづくり                       |                                         |                                                        |                                                  |                            |
|-----------------------------|-----------------------------------------|--------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|----------------------------|
| 歴史と地域の関わり                   | 防災と地域の関わり                               | 住民と地域の関わり                                              | 環境と地域の関わり                                        | 商店と地域の関わり                  |
| 「歴史」領域                      | 「安全」領域                                  | 「住民」領域                                                 | 「環境」領域                                           | 「店」領域                      |
| ○歴史的まちなみ<br>町並み、景観<br>保存の問題 | ○消防問題<br>消防設備、避難訓練<br>○防災問題<br>地震、津波、台風 | ○人口問題<br>少子高齢化、産業の空洞化<br>○公共問題<br>公共交通<br>○健康問題<br>喫煙所 | ○ゴミ問題<br>ポイ捨て、ゴミ収集<br>○電気騒音問題<br>○違法問題<br>違法駐車など | ○商店問題<br>商店の空き店舗、街の活性化、商店街 |

唐木(2008, p.32)の地域課題のカテゴリーを参考に「焦点と地域の関わり」の項目を加えて筆者作成

まちづくり学習の5領域である「歴史」「防災」「住民」「環境」「商店」の主題的学習の目的内容関連する価値観を示したものが以下となる。

表4-2 領域ごとの主題的学習の目的内容・価値観

|     | 「歴史」領域                      | 「防災」領域                       | 「住民」領域                 | 「環境」領域                   | 「商店」領域                    |
|-----|-----------------------------|------------------------------|------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 目的  | 歴史や文化遺産をまちづくりの視点から捉える       | 防災・減災の視点から、安全に暮らせるまちづくりをしていく | 住んでいる住民に住みよいまちづくりをしていく | 自然環境に働きかけて環境保全したまちづくり    | まちににぎわいをもたせるまちづくり         |
| 内容  | 遺跡・歴史的町並み・自然遺産などについて生じている問題 | 台風や地震、未曾有が起きた時の問題            | 人口問題、公共問題など住民が抱えている問題点 | 環境破壊、ゴミ、騒音などエネルギーにかかわる問題 | 空き店舗対策、商店街の活性化など店にかかわる問題点 |
| 価値観 | 歴史遺産                        | 安全安心                         | 住みやすさ                  | 環境保全                     | 地域活性化                     |

唐木(2010)を参考に「商店」領域を付加して筆者作成

それぞれの領域に対しての価値観、問題が重要となってくる。それには、目的・目標・価値観がかかわってきていることが分かる。

## 第2項 まちづくり学習のシーケンス

小学校社会科まちづくり学習のシーケンスは、小学校の発達段階とし、学習内容と協働的社会参加への変化から設定した。

小学校も高学年になり産業学習や政治学習等になり、物事を多面的にとらえる事ができるようになり社会的有用感をより高めやすくなる。初めのうちは、自己肯定感で留まるが、自己有用感、社会的有用感へと高める事が可能となる

### 【小学校の発達形成】

本研究では、まちづくり学習の授業開発のシーケンスを小学校の発達段階から捉えていく。

文部科学省<sup>3)</sup>は、小学校は、低学年と高学年で大きく発達段階が分かると書かれている。低学年については、以下のような状態であるとしている。

低学年：大人の言うことを守る中で、善悪についての理解と判断ができるようになる。また、言語能力や認識力も高まり、自然等への関心が増える時期である。また、この時期に限らず、家庭における子どもの徳育にかかわる課題として、都市化や地域における地縁的つながりの希薄化、価値基準の流動化等により、保護者が自信を持って子育てに取り組めなくなっている状況がある。さらに小学校低学年の時期においては、こうした家庭における子育て

不安の問題や、子ども同士の交流活動や自然体験の減少などから、子どもが社会性を十分身につけることができないまま小学校に入学することにより、精神的にも不安定さをもち、周りの児童との人間関係をうまく構築できず集団生活になじめない、いわゆる「小1プログラム」という形で、問題が顕在化することが多くなっている。

高学年：9歳以降の小学校高学年の時期には、幼児期を離れ、物事をある程度対象化して認識することができるようになる。対象との間に距離をおいた分析ができるようになり、知的な活動においてもより分化した追求が可能となる。自分のことも客観的にとらえられるようになるが、一方、発達の個人差も顕著になる（いわゆる「9歳の壁」）。身体も大きく成長し、自己肯定感を持ち始める時期であるが、反面、発達の個人差も大きく見られることから、自己に対する肯定的な意識を持たず、劣等感を持ちやすくなる時期でもある。また、集団の規則を理解して、集団活動に主体的に関与し、遊びなどでは自分たちで決まりを作り、ルールを守るようになる。一方、ギャングエイジとも言われるこの時期は、閉鎖的な子どもの仲間集団が発生し、付和雷同的な行動が見られる。

要約すると、低学年では、大人の言った言葉の中で善悪の判断ができる。言語能力や認識力、自然への関心が高まる。一方で、小1プログラムが起きやすく、子どもの中でまだ「関心」まででとどまっている。

高学年は、物事を対象化して、対象と事物を認識することができる。一方で自己肯定感が持てず劣等感を持ちやすい。ギャングエイジであるため、閉鎖的な子どもの仲間集団がいくつもできる傾向がある。

本シークエンスでは、発達を踏まえたまちづくりカリキュラムを設定し、低学年・中学年・高学年に分類する。対象学年、取り上げる教科、学習項目、地域、地域協働型社会参加を行う主体、社会的有用感を加味したカリキュラムである。教科書の項目、学習指導要領を基に作成しており、社会的有用感を高めやすい単元を取り上げる。

表4-3 発達を踏まえた社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習カリキュラム

| 対象     | 教科               | 学習項目                 | 地域       | 地域協働型社会参加を行う主体                   | 社会的有用感の高まり                                                                                             |
|--------|------------------|----------------------|----------|----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第3学年   | 社会科              | わたしたちの住んでいるところ       | 校区・市内    | 市観光協会振興組合                        | 市を知って広めるまで行けば高まりやすい                                                                                    |
| 第3学年   | 社会科              | わたしたちのくらしとまちではたらく人びと | 市内       | 工場やスーパー、商店                       | 何回も見学に行き買う、作る等の体験するで高まりやすい。街で昔からある商店と関わらせる。                                                            |
| 第3学年   | 社会科              | 安全なくらしを守る            | 市内       | 警察署、消防署、消防団                      | 子どもにとって身近であるイベントなどを企画するなどを行うと高まりやすい                                                                    |
| 第4学年   | 社会科              | わたしたちの住んでいる県         | 県内       | 県庁、観光協会、道の駅                      | 県をアピールするのにHP、新聞、ポスターを作り発行する等で高めやすい。                                                                    |
| 第4学年   | 社会科              | 住みよいくらしをつくる          | 市内       | 水道局、浄水場、下水処理場、ゴミ処理場、ゴミ捨て場        | ESDと絡めて、自分たちがゴミや水道の使用を少なくする方法を考えると同時に役所の人と施策を見直させ、市に提案する。ゴミ捨てアプリを提案する等で高まりやすい。                         |
| 第4学年   | 社会科・総合学習         | 自然災害から人々を守る活動        | 市内・県内    | 自治体・市役所・県防災課                     | 住民や市役所の人と避難ルートや防災マップ、避難訓練を行う。                                                                          |
| 第4学年   | 社会科              | 地いきのはってんにつくした人々      | 市内・県内    | 祭り保存会、資料館、ガイドボランティアの方、市役所文化財保護課等 | ボランティア団体の人と地域を案内したり、歴史的街をどう残すかを考え自分たちも地域の人との会議に参加するなど高まる。                                              |
| 第4学年   | 社会科              | わたしたちの住んでいる県         | 市内・県内    | 市町村観光協会、観光連盟、各市の物産、伝統工芸品文化財      | グループ毎に各市の物産、町並みなどを調べる共通点等を調べながら県としてどのようなものをアピール、もしくは盛り上げるべきかを考えとこれからどのようにまちづくりをしていくべきかを決めていくことで高まりやすい。 |
| 第5学年   | 社会科・総合学習         | わたしたちの食生活を支える食料生産    | 市内・県内    | JA、漁業組合、漁師、農家の方                  | 田植えから稲刈りをしてみる。実際に自分たちのお米を売ってみる。(水産業も釣った物を売る。)                                                          |
| 第五学年   | 社会科・総合学習         | 工業生産とわたしたちのくらし       | 県内外      | 自動車や部品工場、中小企業工場                  | プログラミング学習 <sup>4)</sup> と並行で行い実際自分たちが自動車会社や関連工場こんな車でこんな設備があるといいのではと一緒を考えて、新たな車を考えて宣伝する事で高まりやすい。        |
| 高学年5年生 | 社会科・国語科          | 情報社会に生きるわたしたち        | 県内       | 放送局、新聞会社、フリーペーパー、遠隔情報システム会社      | 7章で本単元に関わる実践をしたが、他の媒体でも可能で高まりやすい。メディアの原稿では国語的な内容も扱う。                                                   |
| 高学年5年生 | 社会科              | 国土の環境を守る             | 国内・県内    | 林業従事者・県の農林課等                     | 各県にある天然林や人工林からどのような製品を作る事ができるかどんなものができるかを考える。どんなデザインにすると良いのかを考得デザインが使われると有用感が高まる。                      |
| 高学年6年生 | 社会科・総合学習         | わが国の政治のはたらき          | 県内・国内    | 県議会、市役所、県庁等                      | 選挙の問題、地方自治の問題、本当にこの制度で良いのかを考えさせて、このように収入支出すればよいとか、この議題について話すべき等を市や県の人と考える事でともに社会参加できやすい。               |
| 高学年6年生 | 社会科・総合学習、外国語(英語) | 世界のなかの日本とわたしたち       | 県内・国内・国外 | 県国際交流センター、外国とかかわりのある人、県国際交流課     | 外国籍にルーツにある人と関わり、外国文化を体験するだけではなく、外国の人が住みやすい街にする為の案内ブック作成、英語での案内などをしてみるなどが有用感を高められるであろう。                 |

網掛け部分は実験授業にて実施。日本文教出版年間一覧表を基に筆者作成

小学校3年生から6年生に向けてシーケンスを設定した。永田(2013)<sup>6)</sup>は、小学校中学年から社会的な内容まで興味関心が高まること。高学年中学校では、総合的思考力や社会・地域を批判的、構造的にみることが可能であると示している。

取り上げる学習項目と地域では、中学年では地域学習として市町村や都道府県学習、高学年では、地域教材を用いた産業学習、政治学習を取り上げる。まちづくり学習においてどのような有用感を持ちやすいか、そして、社会参加としてどのような人との接触が起こりやすいかについてカリキュラムを設定した。小学校という発達段階から、地域規模での学習が望ましいと考えられる。

特に、5・6章で述べる情報単元におけるまちづくり学習は、子どもたちが発信するというのを学習しやすく、3・4年生の地域で学んだことを生かして産業学習として行うことが可能であるという利点がある。

### 第3項 まちづくり学習のフレームワーク

社会的有用感を高めるまちづくり学習のスコープとシーケンスから授業開発のフレームワークを設定した。

まちづくり学習で必要とされる、5領域で設定している。

「歴史」領域では、小学校の発達段階において、歴史的まちづくりを探究する。協働型社会参加活動を企画し、実行することにおいて社会的有用感を高める。

「防災」領域では地震、台風などの自然災害、防災問題などを探究する。協働的社会参加を企画し実行することにおいて社会的有用感を高める。まちづくり学習の視点に基づくスコープとシーケンスからフレームワークを示した。

「住民」領域では、高齢化などの人口問題、公共交通問題、土地問題、健康問題などを探究する。

「環境」領域では、児童が実際に使用しているゴミ・電気・ガス問題のエネルギー問題、違法駐輪駐車問題を探究する。協働型社会参加活動を企画し、実行することにおいて社会的有用感を高める。

「店」領域では、地域にある商店、商店街、活性化事業などを探究する。協働型社会参加活動を企画し、実行することにおいて社会的有用感を高めようとする。

表4-4 まちづくり学習授業開発のフレームワーク

|         | 「歴史」領域                       | 「安全」領域          | 「住民」領域             | 「環境」領域             | 「店」領域                        |
|---------|------------------------------|-----------------|--------------------|--------------------|------------------------------|
| 3年生・4年生 | 市町村・都道府県の歴史・古い道具などについてのまちづくり | 地震や津波についてのまちづくり | 警察や消防、公共交通などのまちづくり | 環境保全、環境破壊に対するまちづくり | スーパー店の商店街活性化、街の魅力発信に関するまちづくり |
| 5年生     | /                            | 森林・林業とのまちづくり    | 漁業・水産業などのまちづくり     | 公害、工業、水質汚濁とのまちづくり  | 中心商店街の活性化まちづくり               |
| 6年生     | 歴史的建造物、歴史人物とまちづくり            | 安全・安心なまちづくり     | 税金、地方議会、公共団体とまちづくり | 環境破壊とのまちづくり        | 税金と商業施設設置の関係                 |

網掛け部分は実験授業を実施，唐木(2008p39)を参考に筆者作成

このまちづくり学習授業開発のフレームワークに対応するまちづくり学習を設定しまちづくり学習に対応する単元を開発した。

単元設定したのは、小学校3・4年生で地域学習を終えた5年生の産業学習におけるフレームワーク「店」領域における情報単元におけるまちづくり学習である。

## 第2節 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習論

まちづくり学習とは、総合的な学習の時間や社会科を使って行われる場合が多く、シーケンズや社会科における現在のまちづくり学習は第1～4章第1節を使って述べてきた。

筆者が考えるまちづくり学習論を述べる。

まちづくり学習とは、第1章第2節で定義したように、以下のように定義されている。

自ら物的資源・人的資源を使い、地域課題の解決方法を考え、企画し、まちの一員として地域の人と協働し、社会参加する事で住みよい地域の未来を創る行動力を養う学習。

### 第1項 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習論の目的

社会科におけるまちづくり学習を行う事により、一人一人の自分たちが社会に役に立ったと実感し、地域の人的資源・物的資源を活用しながら将来社会とかかわっていこうとすることができる態度を育てる事である。本まちづくり学習の目的としては、まちづくり学習を行う事により、社会に役に立ったと実感する社会的有用感が高まる事である。

まちづくり学習の目標には、市民性にかかわる認識と資質の統一的育成となり、具体的には表4-5に示すようなものを設定できる。



表4-5 まちづくり学習の目標

|    |                                                                          |
|----|--------------------------------------------------------------------------|
| 認識 | 大小さまざまな地域レベルで表出している地域課題の社会認識の形成<br>価値判断が生じている解決策の認識形成<br>社会認識にかかわる価値観の形成 |
| 資質 | 地域課題解決に向けた社会参加力の育成<br>地域課題解決に向けた社会的有用感の育成<br>地域課題解決に向けた問題解決力の育成          |

永田(2013, p.111), 唐木(2010, p.56)を基に筆者作成

## 第2項 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の内容

まちづくり学習の内容としては、先行研究等から以下のような内容が考えられる。地域の人とハザードマップを作成したり、地域にある店や工場、産業などを宣伝したり、共に何か商品を開発する、自治会の行事を大人の人と一緒にやるといった経験が必要である。ここで一つ重要であることは、総合的な学習ではなく社会科でやるといった意義である。時間も考えながら、社会認識で必ずこれが必要となった事を価値判断し話し合いながら社会参加を行う必要が有る。

唐木(2008)を参考に、筆者はこのような社会科における社会参加の流れを設定した。



唐木(2010, p.67-69)を基に、筆者作成

図4-1 社会参加の流れ

本流れは、問題解決学習が進んでいき、提案・参加能力が生まれていくことが予想される。問題把握で、どのような問題があるのか、それには、どのように問題を分析できるのか。それはどうなっているのだろうか、そして、話し合いを通じながら社会的意思決定や価値判断を行っていき自分たちでどうやって行うことができるかを知る。

表4-6は神奈川県教育委員会(2018)<sup>7)</sup>を基に、小学校の単元を示したものである。

本単元は、開発に携わる人「中井中央公園」として、中央公園について知り、調べに行き、どのようなものが最近できたことものを知る。公園があることの良さを知る。そして、カフェが作られていること知る。そして、見学調査して、確かめる。人々の話から、活性化を目的としていることを知る。そして、学習課題を持つ。活用方法を話し合う。地域の人と話し合い、どのような活用方法にするかを決める。実際に活動する。

表4-6 単元 開発に携わる人「中井中央公園」

|                                                 | ねらい                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 段階            |
|-------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|
| 第1次<br>(1 h)                                    | ○中井中央公園について想起する<br>中央公園の写真やこれまで利用した                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 問題把握          |
| 第2次<br>(3 h)                                    | ○中井中央公園を見学し、学習問題を持つ。<br>中井中央公園に行き、実際に体験したり見学したりする。<br>公園やそこを利用する人々の様子を調べる<br>中井中央公園について疑問に思ったこと、調べたいこと<br>などをもとに、学習問題を作る。                                                                                                                                                                                            | 問題分析          |
| 第3次<br>(2 h)                                    | ○中井中央公園について、くわしく調べる。<br>・中井中央公園の完成までの歴史を調べる。<br>・中井中央公園について、開発・整備に携わる町役場の方<br>の話を聞き、中井町やそこに住む人々の願いについて知<br>る。<br>・中井中央公園があることによる、自分たちの生活のよさ<br>について確かめる。<br>・中井中央公園は現在も開発中で、最近新たに「なかい里<br>都まちカフェ」がつくられたことを知る。*「なかい里<br>都まち CAFE」……町のにぎわいと地域経済の活性化を<br>目的に、平成29年5月に中井中央公園内に整備された。<br>中井町商工振興会が運営。地域ブランドの特産品なども<br>販売。 | 問題分析          |
| 第4次<br>(3 h)                                    | ○「なかい里都まちカフェ」について見学の計画を立て、<br>見学する。<br>・「なかい里都まちカフェ」や、週末ににぎわう公園の様<br>子などの写真や資料などを見て、多くの人が訪れている<br>ことに気がつく。<br>・「なかい里都まちカフェ」を見学する計画を立てる。<br>・「なかい里都まちカフェ」内部の様子を見学し、施設の<br>つくりや販売しているもの確かめる。<br>・「なかい里都まちカフェ」を計画した人や働く人々の話<br>を聞き、中井町のにぎわいや地域の活性化を目的とし<br>ていることを知る。<br>中井町のために、自分たちにも何かできることはないか、<br>学習問題をもつ。          | 見学調査          |
| 第5次<br>(4 h)                                    | ○「なかい里都まちカフェ」の活用方法や、もっと広く知<br>ってもらうための方法について考える。<br>・見学したことやインタビューしたことをもとに、グルー<br>プで中井町の人々の願いをかなえられるような「なかい<br>里都まちカフェ」の活用や知ってもらうためのアイデア<br>を考える。<br>・「なかい里都まちカフェ」の活用や知ってもらうための<br>アイデアを交流し合い、お互いのよさを取り入れること<br>で、よりよい考えにつなげる。                                                                                       | 価値判断/意思決<br>定 |
| 第6次<br>(1 h,<br>参加に<br>ついて<br>は、これ<br>以降扱<br>う) | ○学級で話し合い、計画したアイデアを伝える。<br>自分たちで考え計画した「なかい里都まちカフェ」活用や<br>知ってもらうためのアイデアを、町役場やカフェで働く<br>方々に伝える。<br>*総合的な学習の時間を使い、実際に活動する。                                                                                                                                                                                               | 提案・参加         |

神奈川県教育委員会(2019)を基に筆者作成

### 第3項 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の方法

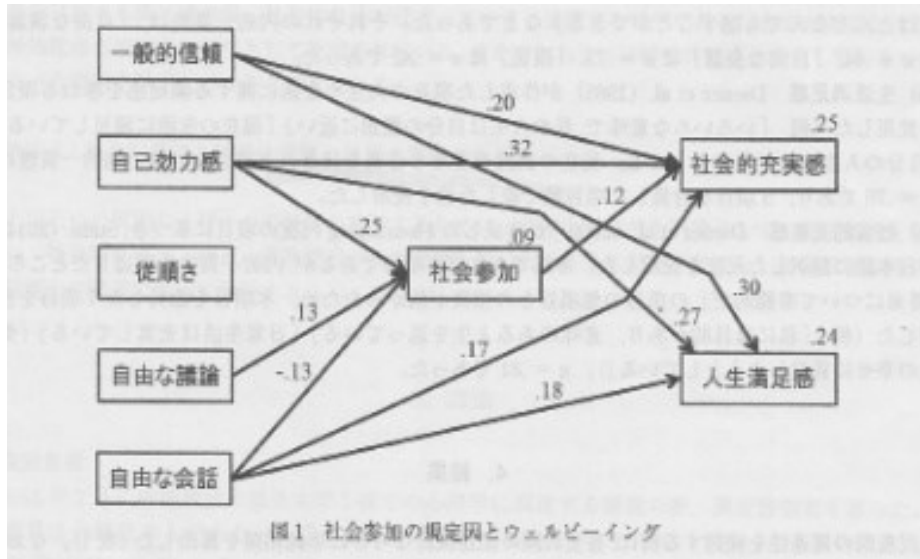
まちづくり学習の方法に関しては、基本的に地域にある問題を取り上げて授業を行う必

要がある。太田（2018）が指摘しているように、社会科としてまちづくり学習を行う場合は、以下の手順を踏む必要が有る。「愛着」⇒「共感」⇒「参加」⇒「提案」という発達段階に応じた学習というのが必要になってくる。社会に役に立ったと実感することが社会的有用感を高めるには重要であると考え。その為、参加では終わらず、第2章第2節で述べた通り、「地域の人と実行」を入れ、地域などの大人とともに、何かを行って達成されたことにより社会的有用感を高める事ができると考える。つまり、本学習の方法としては第2章第2節第3章で述べてきた地域協働型社会参画の方法を用いて小学校社会科まちづくり学習を行う事である。

#### 【社会参加と心理学の関係】

社会参加と心理学の関係から考えている南泉哲(2018)<sup>8)</sup>で、『社会参加は如何に促進されるのか？—個人及び家族要因とウェルビーイングとの関連—で心理学と社会参加、そしてシチズンシップとの関連も述べている。シチズンシップを育んでいくことは、容易ではなく、学校、社会などミクロからマクロレベルまで取り組まなければならない。社会参加については社会関係資本から説明が付き、他者とどれだけ開かれているかという社会的ネットワークとどの人でも信頼できるという一般的信頼、人に良いことをすれば、回りまわって自分を助けてくれるという広く開かれた社会に対する信頼である。社会関係資本が高くなり健康面でのウェルビーイングも高くなる。本研究では、仮説を3つ立てて検証している。1つ目は、一般的信頼は社会参加を促進する。Bandura（1986,1987）の社会的認知モデルでは、自己効力感個人の行動を促進する重要な要因と規定してあり、自分が役に立つかもしれない、変革できるかもしれないという効力感につながっているとも書かれている。2つ目は、自己効力感社会参加を促進する。家族及び友人関係をマイクロレベルと捉えて、マイクロレベルは家族要因を取り上げて、社会参加との関連を考えている。社会に参加しようとする人たちは自分の人生や生活に対する満足度が高い。3つ目は、社会的参加と精神的健康は正の関連がある。大学生に研究を行ったようである。質問紙では、社会参加の頻度、一般的信頼、自己効力感、家族コミュニケーションパターン、生活満足感、生活的充実感で構成している。

結果としては、社会参加は、一般的信頼、自己効力感、自由な議論と正の相関がみられている。社会参加とウェルビーイング（幸福感）の関係でも社会的充実感や生活満足感が認められている。両親とは自由な会話より自由な議論が社会参加に繋がることから話し合う事が必要であることが分かった。一般的信頼からは、他者との繋がりを日ごろから意識しているからこそ、社会との連携意識は高い。そして、自己効力感が社会参加を促すことが分かり合理的計画理論、計画的行動理論を支持する結果が出ている。



森泉哲 (2018) 『社会参加は如何に促進されるのか』 pp.191-201 より

図4-2 社会参加の規定因とウェルビーイング

以上の森泉の論文から心理学の視点から社会参画，そして協働という視点から捉えようとした。自己効力感は社会参加を促進する事が明確に理解できる。筆者が指摘する協働型社会参加を行えば，当然自己効力感のみならず，自己有用性，社会参加まで促すことが出来るようになると考えられる。社会参加を促すことで満足感を得られるという事は達成感を味合わせる事が出来，そして健康的に過ごすことが出来，社会的に充実感が味わう事が出来る。社会との連携も必要という結果が出てきている。自己効力感，自尊心が低いと，社会変革や社会参加は中々起こしにくい役にたつものになっていない場合が多くある。このような社会参加では，地域協働型社会参加を行っていき学習方法が有効である。そのためには，地域協働型社会参加を用いた本まちづくり学習を示す必要がある。

表4-7に示す以下のような手順が考える必要があるのではないかと考える。

表 4-7 社会的有用感を高めるまちづくり学習の手順

| 項目番号 | 段階                           | 内容                                 |
|------|------------------------------|------------------------------------|
| 1    | 問題把握                         | 「どのような問題が、なにをすべきか、どの解決策がより望ましいのか」  |
| 2    | 問題分析                         | 「なぜそのような問題が生じるのか」                  |
| 3    | 価値判断                         | 「このような問題を解決する手順はどんなものがあるのか」        |
| 4    | 自分自身で見学調査                    | 「自分たちで調査してみよう。」                    |
| 5    | 意思決定                         | 「解決策は、どのようにすべきか。」                  |
| 6    | 地域協働型社会参加①地域の<br>人と調査しながら考える | 「調査しながら、この解決策で正しいのだろうか」            |
| 7    | 再見学                          | 「自分たちの班ごとで見に行ってみよう。」               |
| 8    | 地域協働型社会参加②/提案                | 「このような解決策案で進めてよいか」                 |
| 9    | 提案したことを踏まえ修正                 | 「〇〇さんの意見を基に直してみよう。」                |
| 10   | 参加・参画                        | 「参加/提案してみよう」                       |
| 11   | 振り返り                         | 「活動に対して振り返ろう。地域の人と行って活動が認められたと思うか」 |

唐木(2010,p.67)を参考に4・6・8・11段階を付加して参考に筆者作成

筆者は、唐木を参考に社会的有用感を高めるまちづくり学習の段階表を作成した。筆者は4段階を付加した理由としては、自分自身で自ら何が問題なのかを自分の力で調査しに行くことで新たな発見が生まれる。そのあとで意見を出し合い意思決定していくことに意義があると考え、地域の人と協働することにより、社会参加が行われ社会的有用感が生まれていくと考えられる。解決策についても「これでよいのだろうか」を地域の人に聞いていくことでより地域協働が生まれるのではないかと感じた。また、振り返りが重要であるというのを日本型サービス・ラーニングにおける実践の示唆や峯(2020)は、「無自覚な行動」から「自覚的な意識」の変化が必要であるとしている。11のところにはしっかりと単元の中で位置づけていく必要があるのではないかと考える。

以上のようなまちづくり学習論を用いて小学校社会科まちづくり学習の授業5年生「情報単元」を提案し実践を行った。

【注】

- 1) 鹿児島大学 COC センター地域課題より参照 <https://www.kagoshimau.ac.jp/coc/regional.html>
- 2) 唐木清志 (2008)pp.23-27「第Ⅲ章日本型サービス・ラーニングの構想」『子どもの社会参加と社会科教育—日本型サービス・ラーニングの構想—』東洋館出版社 169p.
- 3) 文部科学省, 子どもたちの発達段階と認識すべき課題  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm)
- 4) プログラミング学習とは, 2020 年から小学校で実施される学習の一つである。文部科学省プログラミングの手引き参照。  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/1403162.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1403162.htm)
- 5) 日本文教出版小学校社会年間一覧表  
[https://www.nichibun.co.jp/textbooks/sshakai/download/r2/r2\\_shakai\\_nenkei\\_ichiran.pdf](https://www.nichibun.co.jp/textbooks/sshakai/download/r2/r2_shakai_nenkei_ichiran.pdf) を基に作成
- 6) 永田成文(2013)「地理教育における社会参加」風間書房『市民性を育成する社会科授業の開発』pp.112 - 113
- 7) 小・中学校における政治的教養を育む教育指導事例集小学校 4 年」神奈川県教育委員会  
<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/cnt/f537244/sidoujirei29.html>  
2020 年 11 月 25 日最終閲覧
- 8) 森泉哲 (2018)『社会参加はいかに促進されるのか?—個人及び家族要因とウェルビーイングとの関連—』南山大学短期大学部研究紀要 pp.191-201

## 第5章 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の実践

### 第1節 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の指導案

#### 第1項 単元「5Aのみんなで地域の魅力を発信！ふるさと新聞」の概要

##### 【ふるさと新聞とまちづくり学習】

地域協働型社会参画を見据えた参画のはしごの段階を基に、5年生の情報単元で地域協働型社会参画による社会科まちづくり学習を開発した。具体的には、単元名を「5Aの魅力発信！ふるさと新聞」とし、地域新聞である「ふるさと新聞」の人と子どもたちが協働して、地域の大門商店街に関する新聞記事作りを行う事により、大門商店街にかかわる地域の人も協働する授業を実施した。授業後に、アンケート、ループリック表等により子どもたちの社会的有用感の高まりを検討する。

5年生情報単元を用いたまちづくり学習を行った理由は以下の通りである。

1点目は、情報単元（産業学習）を用いたまちづくり学習が行われていない。小学校3・4年生は、地域学習で市・県について学習を行う。その為、地域でお世話になった店、商店街、工場、市役所などとまちづくり学習を行う実践は多くみられた。例えば、市の観光ガイドブックを作る、キャラクターキャンペーンに応募するなどである。しかし、5年生は、農業・水産業・林業・工業・水産業・情報産業などの産業学習が行われる。産業学習では、産業の役割、産業に働く人の苦労や仕事内容、その産業と社会との関わりを扱って授業する事が多く、論文や教科書（三重県においてシェア率の高い日本文教出版で分析）、小学校学習指導要領（平成20年度版）において、情報単元を用いたまちづくり学習の記述はみられなかった。

家原(2020)によると、産業学習の課題として、生産されたものについては、身近であるが、その生産工程や生産者と自分とのつながりが薄いことが挙げられると指摘している。情報やメディアといったことは、子どもたちにとっては身近であり、なじみがあるが取材の工程や新聞会社と自分とのつながりは、集金時の新聞店との受け取り、古紙回収などしか子どもたちにとってなじみがあまりないことがある。

2点目は、情報単元を用いたまちづくり学習を行う事で、社会的有用感を高めやすくなると思ったからである。

小学校3・4年生の地域学習で地域について学習を行っている為、地域には、どのような店やどのような商店街、工場があることを学習している為、産業学習を用いたまちづくり学習を行う事は社会的有用感が高まりやすいと考えられる。

情報単元を用いる事で、情報を自ら発信する事が社会に自ら役に立ったんだと実感を持って理解しやすい。今回は新聞（地域新聞）であったが、テレビやネットなどでも同じである。学校で国語の新聞づくり学習と絡めて新聞を作る事や新聞社の方に作り方を教えて頂くことは行われている。クラス全体で、新聞記事を取材し、調べ、精査し、記事を書きそれを公共の新聞記事として掲載して頂くという経験は中々ない。また、それを店などに飾っていただくことで認められると感じやすいと考えた。

実践校と実践クラスと実践日時は次のとおりである。

三重県国立F小学校 5年A組 32名(1名は、3次7時終了後転出)

2019年6月～2020年2月

実践校の児童は、地域との関係は薄い状況にある。実践校の社会科では、大きく2つを大切にしている。1つ目は、「問い」を大切にした授業展開である。「問い」については、授業の発問や今後の追究課題として扱い、子どもの話し合いの中または、さらなる見学・調査課題として出てくるようになっている。2つ目は、話し合いにおける、価値判断を中心とした学習課題としている。

情報を発信することができる、正しい情報を仕入れる事ができる“新聞”作りを通して、地域の活性化につながるまちづくりのために、子どもたちが新聞社を含む地域の人々と協働して社会参加ができると考えた。

ふるさと新聞は、三重県津市にある地域新聞社である。津市内、松阪市北部の情報について、取り上げて“地域を盛り上げる”事をコンセプトとしており、まちづくりに関わっている会社だと考えた。

小学校3・4年生の地域学習においてまちづくり学習を行った実践は見受けられるが、5年生の情報単元とまちづくりを繋げた単元は管見の限り見つからなかった。

本研究に関わる「ふるさと新聞」の授業実践は主に3次以降である。夏休みの課題として、ふるさと新聞の人と取材したい内容を調べさせ、これを基に新聞社の人と取材をし、地域を盛り上げる記事を書いて発信した事により、子どもたちの社会的有用感が高まると考えた。

#### 【単元「5Aのみんなで地域の魅力発信！ふるさと新聞」の概要】

単元「5Aのみんなで地域の魅力発信！ふるさと新聞」の構成を示したものが表5-1である。

第1次では、情報と身近な生活を考える部分である。自分と情報の関わりについて話し合う。クラスで取った情報に関わるアンケートから現在、どのメディアを使用する人が多いのか、なぜ、メディアによって、違いがあるのかを考えさせた。その中で新聞に着目して新聞の役割について考えさせる。

第2次では、地域新聞である三重ふるさと新聞を取り上げた。三重県にある地域新聞を出させ、地域新聞の中で津市には、三重ふるさと新聞や三重タイムズがあることを取り上げ、その中で三重ふるさと新聞を取り上げる。三重ふるさと新聞と大手の新聞社を持ってこさせ比較させて、違いを見つけさせる。地域密着、自ら末永くこの地域に住まい暮らす、地域社会の一員であることに立脚する、よりよい地域づくり、街づくりに積極的に寄与することを目的にしている事を把握させる。三重ふるさと新聞のつくり方の手順や働いている人の思いや願いを紹介し、なぜ少人数で地域新聞を作ろうとしているかを考える。三重ふるさと新聞と三重タイムズを読み比較して、三重ふるさと新聞の魅力を考える。三重ふるさと新聞では、地域の情報を伝えるだけでなく、地域の政治や地域で知っておくべき情報である地



域ジャーナリズムについても伝えていることを理解させる。

第3次では、ふるさと新聞での記事を作成して発信する。2次と3次の間に、津市の商店街の「大門商店街」で自分が取材したい店やイベントを調べさせる。3次では、ふるさと新聞の方に取材の仕方、記事の書き方、ふるさと新聞の会社の変化について、ふるさと新聞の社長さんから2時間話を聞く。ふるさと新聞で取材するときの質問に用を考え、記事への起こし方を学ぶ。そして、取材を行う。取材は班毎に行う。取材の合間に、三重ふるさと新聞も見学する。取材終了後、原稿用紙に個人で記事を書いてくる。又記事のレイアウトなども考えてくる。考えてきたものを班で共有する。班で共通したキーワードを見つけさせて、班で記事を作成する。記事の内容について他の班、三重ふるさと新聞の社長さんに向けてプレゼンテーションを行う。記事の作成から記事にあうタイトルを考える。この記事にあうようにするには、どのようにしたらよいかを考えて話し合うようにする。その時には、視点をもたせてから話し合うようにする。全部の記事が出た後で本記事作成に対して、振り返りを行うようにして、まちづくり学習としての本学習を考える。

表5-1 単元「5Aのみんなで地域の魅力を発信！ふるさと新聞」の構成（全13時間）

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1次：情報と身近な生活とを考える・2時間</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1時：自分たちとメディアの関係を考える(1)</li> <li>・2時：様々なメディアがある中で新聞の役割について考える(1)</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| <p>2次：三重ふるさと新聞が地域に根付く新聞となっているかを考える・3時間</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3時：三重ふるさと新聞の意義や役割について考える(1)</li> <li>・4時三重ふるさと新聞の制作手順について知り、その人達の思いや願いを考える。(1)</li> <li>・5時：三重ふるさと新聞と他の地域新聞と比較して、三重ふるさと新聞の魅力を考える。(1)</li> <li>・6時：三重ふるさと新聞には、地域ジャーナリズムと地域情報紙の役割があることを知り改めて三重ふるさと新聞の魅力を考える(1)</li> </ul>                                                                                                                                         |
| <p>3次：地域の人と協働してふるさと新聞の記事を書いて発信する・11時間</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・7-8時：三重ふるさと新聞の人と取材する時の内容を考え、記事への起こし方を学ぶ(2) (地域協働型表4:5~6)</li> <li>・9-10時：地域の人(ふるさと新聞の人)と協働型社会参加(大門商店街に関する取材)を行う(2) (地域協働型表4:5~6)</li> <li>・11-12時：新聞のつくり方を復習し、新聞の記事作成を行う(2) (地域協働型表4:6)</li> <li>・13-14時：記事についてプレゼンテーションを行う(2) (地域協働型表4:6~7)</li> <li>・15-16時：記事作成から連載記事のタイトルを考える(2) (地域協働型表4:7)</li> <li>・17時：記事作成を行ったことによるふりかえりを行う(1) (地域協働型表4:8~9)</li> </ul> |

筆者作成

## 第2項 「地域の人と協働してふるさと新聞の記事を書いて発信する」

### 【3次「地域の人と協働してふるさと新聞の記事を書いて発信する」の概要】

表5-2は第3次の授業展開を示したものである。

表5-2 3次「地域の人と協働してふるさと新聞の記事を書いて発信する」の授業展開  
(11h)

| 学習内容<br>時数                          | 地域協働<br>型社会参<br>加の段階 | 主な発問や指示                                                                                                   | 学習活動《手法》                                                                              | 習得知識・態度<br>〔経験〕                                                 | 資 料                                |
|-------------------------------------|----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|------------------------------------|
| 1.取材のコツを知る(7時)                      | 5～6                  | ○昔の新聞と今の新聞の違いは何だろう。<br>○ふるさと新聞の社長さんへの質問をしましょう。                                                            | ○昔の新聞を各班に置き、今の新聞を全員に配り、昔と今の新聞を比較する。<br>○ゲストティーチャーの三重ふるさと新聞森社長から話を聞く。                  | ○取材のコツでは、①相手の事を調べる②メモを有効活用する                                    | 資料：三重ふるさと新聞2019年10月号、1948年新聞記事     |
| 2.取材の質問を考える(8時)                     | 5～6                  | ○取材の時の質問を考えましょう。                                                                                          | ○取材の質問を考える<br>○取材のスケジュールを理解する。                                                        |                                                                 | 写：大門の地図<br>資：ipad、子どもが持って来た資料      |
| 3.取材をする、ふるさと新聞の見学をする(9-10時)         | 5～6                  | ○各班、新聞の記事を作る事を考えて取材をしてきましょう。記録、質問する人に分かれて行きましょう。<br>○ふるさと新聞の会社では、新聞がどのように作られているかを見てきましょう。                 | ○大門商店街の自分が記事にする班で取材先へ取材をする。<br>○三重ふるさと新聞の会社で新聞が、どのように出来ているかを知る。                       | デザイン、校正、編集、                                                     | 資：取材撮影用ipad                        |
| 4.ふるさと新聞の記事を書く(11-12時)              | 6                    | ○記事を書いてきた人発表しましょう。<br>○班の中で個人が作ってきた記事を共有しましょう。<br>○班で一つの記事を共有しましょう。                                       | ○自分の書いてきた記事を発表する。<br>○他の人が書いた記事と《比較》して考える。<br>○班のメンバーの共通するキーワードを見つける。<br>○班での記事を作成する。 | ○記事を書くときは、地域を盛り上げる記事を書くことを意識する。<br>○500～600字で書く。                | 写：子どもの書いてきた記事<br>資：取ってきた写真の入ったipad |
| 5.三重ふるさと新聞の社長さんへプレゼンテーションする(13-14時) | 7                    | ○各班5分で自分たちが作った記事のプレゼンテーションをしましょう。<br>○他の班の人は、質問とか、修正すべき点を指摘しましょう。<br>○質問やアドバイスを頂いたところから修正しましょう。           | ○自分たちの班が作った記事、記事と横に載せる写真を発表する。<br>○他の班の人、先生、ふるさと新聞の社長さんの話を聞く。                         | ○文章としてつながっているのか、年号、内容がっているのか等校正作業をきちんと行う。                       | 資：各班分の写真<br>写：記事に載せる写真             |
| 6.ふるさと新聞の記事のタイトルを決める(15-16時)        | 7                    | ○記事をまとめるとどんなタイトルになりますか<br>○自分たちの記事とか、他の記事の内容とか考えて行きましょう。                                                  | ○自分たちの記事にあうタイトルを考える<br>○自分たちの記事のタイトルを話し合う                                             | ○読み手にとってどうなのかを考える。<br>○大門商店街への来客数が減っていることから、来て寄ってほしい。大門の魅力を伝える。 |                                    |
| 7.本次のまとめをする(17時)                    | 8～9                  | ○ふるさと新聞の記事が載った感想をつたえ合いましょう。<br>○新聞を作った事によって他者の人に見てもらった経験はありますか。<br>○“大門を元気に”タイトルの記事は、地域を盛り上げる事ができたのでしょうか。 | ○ふるさと新聞の記事を作った感想を伝えあう。<br>○家族や地域の人に認められた経験について聞く。<br>○本実践とまちづくり“地域を盛り上げる”事について話し合う。   | ○まちづくり及びふるさと新聞社から記事作りと地域を盛り上げるとのつながりを考える。<br>○地域の人に認められる。       | 資：<br>資：ふるさと新聞自分たちが取材、記事作りの写真      |

筆者作成

本単元全体題材は、題材「情報を作り伝える～三重ふるさと新聞～」としている。

#### 【本単元の目標】

一つ目は、現代の社会では、情報が溢れており人々は利用目的に応じ選択し手に入れていることを理解するとともに、その中で三重ふるさと新聞を取り上げる。ふるさと新聞の役割、意義について調べたり考えたりしたことを分かりやすくまとめることができる。

二つ目は、三重ふるさと新聞を調べてきたり記事について読み比べたりすることから発行するまでの手順の人々の工夫や努力に着目し、三重ふるさと新聞の意義や役割を考え、記事として表現できる。

三つ目は、三重ふるさと新聞を含む地域の新聞に関心を持ち、取材を自分たちで意欲的に行い、追究しつづけるとともに、新聞を含めたメディアとの自分とのかかわりについて捉えなおし、自らが社会参加する事で地域社会の一員としての自覚をもって生活していくことができる。

#### 【指導上の考察】

本題材は小学校新学習指導要領第5学年の内容(4)を受けて設定した。大単元「わたしたちの暮らしを支える情報」のうち第1小単元の情報を作り伝えることについて学習するために、津市内にある三重ふるさと新聞を取り上げ、新聞の比較、魅力、新聞を作る人々に着目して、調べたりしてまとめたりして、三重ふるさと新聞の意義や役割を捉える。また、役割などについて調べたことや考えたことを通して、三重ふるさと新聞は、地域に住む人々の情報源の一つとして重要になっていることであるとともに、現在、情報化社会になる中で、明治期から存在する新聞が重要な情報発信メディアであることを理解する。さらに、学習したことを基に、自分も地域社会の一員として地域の新聞やメディアに関心を持ち、そこから自覚をもって行動することができる態度を養う。本題材を取り上げる理由は、四つある。

一つ目は、自社内に新聞作成の全ての工程を行っており、社長、記者兼編集者など作成者が全員いる会社であることは特殊でありすべてを見学することができることである。子どもたちが新聞を作る工程やそこで働いている人々の役割について考え、理解させることができると思ったからである。多くの子どもたちは、新聞社が多くあり、そこで作って発行していることも知っている。また、本校には、電車通学をしている子どももおり、電車で新聞が運ばれているのを見たことがある子どももいるが、どうやって作られ運ばれているか、そして、関わる人までには詳しく知らない現状がある。

二つ目は、津市内にある三重ふるさと新聞株式会社があることから、子どもが調べに行くのも容易であると考えたからである。

三つ目は、三重ふるさと新聞株式会社は、中日新聞の第2・4週木曜日に入れ込み新聞で無料配布としてなっており、津市・松阪市北部に発行している。中日新聞は三重県の住民の多くが購読している新聞であり中日新聞の中に入っていることを示すことで身近に感じることができるからである。

四つ目は、新聞は、事前にとったアンケートからも7割近くで購読しているの、興味を持つことができると考えたからである。地域の記事を載せている三重ふるさと新聞ということで、津まつりなど児童が知っているイベント、参加したことあるイベントなどもあることで、子どもが記事や新聞について「問い」を生み出しながら追究していき学習していくことで子どもの興味・関心が高まっていく教材であり、本新聞からも自らも社会の一員として積極的にかかわっていきこうとする姿が見受けられやすいと考えたからである。

私たちは、生活の中で情報を接し手に入れながら生活している。天気予報、ニュース、カーナビ、ニュース、知りたい店、等の情報を集めている。情報を手に入れる方法であるメディアは、大きなものとして、新聞、雑誌、インターネット、テレビ、ラジオなどがある。それぞれのメディアで伝える情報の種類が違うが、ラジオは、音声のみ、新聞・雑誌は、文字・写真・絵を通じて発信している。テレビは、映像・音声・文字である。インターネットは、映像・音声・文字・写真・絵と多くあり、世界中の情報を知り、大量の情報を知ることができる。テレビ・新聞・ラジオなどの一度に多くの情報をマスメディアと呼ぶが、安易に情報を流してしまい問題になる場合もある。誤報、捏造問題等でたびたび問題となることもある。

今回取り上げる新聞は、記者が調べて、社会に関する情報やニュースを詳しく載せている。一つ一つ記者が取材し、校正したものが載せられている。新聞の利点としては、記事を残しておく、見返したりスクラップしやすくしたりすることができる。一方で、残しておくことで、家の邪魔になってしまい、毎月購読するとお金がかかり、現在は電子版も発行していることである。現在新聞離れが進んでしまい、1990年代は50%の購読率であったが、2015年現在、30%前後といった状況で今後もさらに減少傾向になると考えられる。新聞の役割としては、2つあるとされている。1つは、知る権利を守る事である。早く、正確に、偏らずに伝える事である。2つは、隠れた事実を掘り起こすことです。新聞記者は、何度も何度も取材し調べ直して記事に起こしている。誤報でもインターネットは安易に流してしまうもしくは流れてしまうが、新聞は取材するため誤報が少ない。

三重ふるさと新聞株式会社は、中日新聞から分離し夕刊伊勢となり、その後、中日新聞から地域版の拡大版として三重タイムズができ、その後、経営分離して1997年9月に創業した。22年前から東丸之内のビルで新聞づくりを行っている。津市・松阪市北部で75,000部中日新聞店から発行されて無料配布されている。三重ふるさと新聞は、地域ジャーナリズムと地域情報紙の2つの役割を中勢地区において担う新聞社である。その視点は、自ら末永くこの地域に住まい暮らす、地域社会の一員であることに立脚する、よりよい地域づくり、街づくりに積極的に寄与することを目的としている。

三重ふるさと新聞が地域に焦点を当てている理由としては、創業当時、人が情報を与える手段は限られていた。地域に情報・視点を拡大させることで、より詳しい情報を与える事ができると言えたからである。一時期は、タウン誌が流行った時期もあったが、一定程度の地域新聞の読者もいて、地域に関心を持つことができている。また、地域の企業や商

店に足を運んでもらえるように、地域の企業、お医者さん、商店の広告を載せるようにしている。

昔と今では、記事のレイアウトなども変わっている。昔は、白黒であり、手書きの原稿を作っていた。今では、ビジュアルが充実し、カラーでコストダウンし、印刷も5万部を30分で完成できるようにし、すべてデータでの処理でマニュアル化としている。昔より文字も大きく（14文字から12文字）、読者に有益になりより見やすい記事作りを心がけている。

三重ふるさと新聞株式会社の従業員は5人いる。社長とデザイナー、そして、3人は記者兼編集者として活躍している。三重ふるさと新聞株式会社の制作手順は、大きく4つである。1つの作業は、地域の記事に関する企業や人に取材である。その後、割り付け作業である。大きい方眼用紙にそれぞれの記事をどこに置くかを記入しておく。この時に長さ等を測りながら意識しておくようにする。3つ目の作業としては、レイアウトを行う。割り付けで決めた寸法で、写真・記事・見出しをパソコン上に記事を書いておいていく。量が大きすぎたり少なすぎたりする場合は、調整しながら記事を記入していくようにする。ここまですべてを一人の編集者が担当し、大体取材以外を1記事1日で行う。最後に、校正作業として、出来た記事をみんなで見合い誤字脱字や文章の内容がおかしくないかを確認する。終了後、データ化し印刷会社で輪転機を使用しコスト安く多くの部数発行でき、発行されてきている。そして、中日新聞に送られ配布されている。

三重ふるさと新聞株式会社では、地域にある165号線を津から大阪までたどってみるといったような連載企画、名松線企画として地域の現状や地域おこしの活動を知らせて、地域を更に盛り上げていくようにする企画等をしている。また、広報紙や社内報をインタビューからレイアウトまですべてを作成し、地域の企業をバックアップしていることで地域の人にも信頼される新聞となっている。

これからの抱負としては、「独自の新聞社と独立していきたい。」「より、独自の地方新聞を読んでもらえるようにしていきたい。」としている。

このように、三重ふるさと新聞には、地域に愛される新聞であるように様々な独自性を出している。子どもたちにも三重ふるさと新聞の工夫と努力、三重ふるさと新聞がさらに地域に根付いていく新聞となるようになるにはという視点を持たせやすい教材であると考えられる。

児童についてである。話し合い、新聞を見ながら話す時でも、子どもは学習に意欲的で、何事にも真面目に取り組む姿勢を見せている。また、調べ学習で宿題に出すと、ノート2ページぐらい調べてくる子もいて、何事にも探究心がある。授業で行った内容について調べてまとめたりしている子もいる。ふるさと新聞について調べてくるという宿題を出したところ、三重県の新聞をすべて調べてくる子どももいた。話し合いのときにも子どもたちが活発に発言する様子が毎回みられ、相互指名での授業でも、児童がほとんどの児童が活発的に発言する姿が見受けられる。お互いの意見を尊重し、その後、自分の意見を伝

える児童もいる。しかし、自分の意見を通そうとして周りの様子を感じにくい児童もいる。

本題材の学習にあたり、事前にアンケートを実施した。アンケートでは、複数回答可で、以下の3点を質問した。(30名の児童が回答) 1つは、「普段調べたりするとき何をしていますか」(メディアを指す)と聞いたところ、インターネットが26名、雑誌が6名、新聞が7名、漫画2名、テレビ13名、本5名と答えた。圧倒的にインターネットとテレビから状況を得ていることが分かる。2つは、「新聞を家でとっているか」を聞いたところ、取っている人が21名、取っていない人が9名と答えた。約7割の子どもが新聞を購読しているが、約3割が新聞を購読していない状況である。新聞を購読している子どももほとんどが、子ども新聞を取っているということで一般の新聞を読んでいる児童が少なく、どんな紙面があることが知らない。3つは、「新聞を見るときは、どこの面を見ますか」と聞いたところ、テレビ欄7名、政治欄3名、経済欄3名、地方欄2名、スポーツ欄4名、広告欄3名と言った状況である。欄外に、4コマ漫画、社会漫画を書いている児童が多く、人気の本、間違え探し、中日春秋、月の形、小学生の書道作品などを書いていた。多くの人が小学生新聞に興味を持っていることが分かる。又、一般の新聞はどのような紙面が書いてあるのかについてまでは、知らないと考えられる。

本校は、校区を持たない学校であり、子どもたちは様々な地域から通っている。ふるさと新聞についても配布されていない現状もあり、全員が三重ふるさと新聞を取れる環境にはない。「三重ふるさと新聞について知っていますか」と授業に質問したところ、3131名中7名が知っていると言っていた。24名が知らなかったと答えている。三重ふるさと新聞を読んだ後、子どもたちにノートに感想を書かせたが、「幸せになる新聞」、「身近なニュースが書いてある」、「三重ふるさと新聞は、地域思いの新聞」だと回答している。子どもの中には、「ほかの新聞は嫌いだが、地域の新聞の事が書いてあり、私はこの新聞が好きだ。」と書いている。子どもたちから三重ふるさと新聞を読む前と読んだあとで、新聞に対する興味が子どもたちの中で変わっている。6時終了後、ふるさと新聞が4面から6面へとリニューアルしている姿を子どもたちの中から朝の会等で話として出している姿も見受けられた。何人かは「わたし持って来た」「地域に関する記事が増えている」「私たちの意見が通ったのかな」と見せ、発言する児童もいた。リクエストでは、子ども目線で、字の大きさ、ルビ、子どもが楽しめるコーナーといった話だけでなく本学習を踏まえ、地域の〇〇店を取り上げてほしい、もっと盛り上げる記事がほしいなど特定店や特定地域を書いている児童も多くいて興味関心が高まっている。

子どもは、七夕や津まつりで大門やフェニックス通り周辺に訪れたことがある。大門商店街で知っていることを子どもたちに聞いてところ、「夜店をやっている。」「アーケードが最近無くなった。」「平治煎餅がある。」と答えていた。聞いた後、ふるさと新聞の記事に大門商店街の事を書くことを伝え書きたい場所を夏休みの宿題とすると伝えると、「近くだから調べに行こう。」「地域の魅力伝えないと。」という事を発言しており、地域の魅

力を伝える記事を書かないという意識が高まっている。

夏休みの宿題では、大門商店街について調べたいことを書いてきていた。店や施設などをインターネットなどで調べてきた子どももいれば、実際に調べに行ったり電話で聞き取りしたりしている子どももいた。調べている児童では、施設と地域や市民とのかかわりなどに着目し、ふるさと新聞の理念などに基づいて行うようになった。候補地として児童が書いてきたのが、「とらや本家」「平治煎餅」「津観音」「センターパレス」「はちみつまんじゅう」「津市真ん中広場」「夜店」「オーデンビル」「水谷屋」「とけいや」「岩田川」「だいたて祭り」などが出てきた。そこからふるさと新聞社の人と決め、班などを決め発表した時、「早く記事を書きたい。」「早く班を知ってアポイントメントを取りたい」等と言う子どもの気持ちが高まっている。

第1時は、現代の社会では情報が溢れていることから、いつどうやって、情報を得ているかを出させた。インターネットから情報を得ていることが多いことを理解して、事前にとったアンケートから、インターネットとテレビから情報を得ている人が多いことを確認し、テレビとインターネットが何故多いのかを交流した後、新聞がなぜ3位なのかを考え、新聞に視点を向けさせた。

第2時は、アンケートを基に、5年A組の新聞の購読状況と今現在までの新聞購読状況のグラフから、気づいたことを発表させた。新聞が少しずつ読まれなくなっていることを気づいていた子どもが多かった。新聞には、どのような紙面があり、実際に紙面を見ながら確認した。新聞が若者の中でも読まれなくなっていることから「新聞はなくなってしまってもよいのか」について考えさせ、新聞は無くなってはいけないという話し合いになっている。

第3時は、新聞の種類がさまざまあり、新聞の種類の名前を挙げた。子どもの中には、三重にはたくさんの地域新聞があることを調べてくる子もいた。三重ふるさと新聞を示し、事前に三重ふるさと新聞について調べてきたことと新聞の記事を見ながら、三重ふるさと新聞は地域の事を伝える新聞であることを理解した。その中で、「なぜ、地方版があるのに、ふるさと新聞があるのだろうか」について話し合わせ、ふるさと新聞の意義や役割について考え、地域づくり・街づくりの応援団として記事を作っていることを捉える事ができた。

第4時では、三重ふるさと新聞に関わっている人々の想いや願いを取り上げた。三重ふるさと新聞のできる流れを知り、編集者兼記者、デザイナー、社長のそれぞれの人の仕事の工夫と努力で一つの紙面ができていることを知った。「一人でレイアウトふりまでする必要があるのか」について話し合わせた。一人で作成することで、「記事の正当性や一貫性を保とうとしていること」、地域とのつながりを作るうえでも記者が編集者を兼ねて行っていることについて気づかせた。

第5時では、ふるさと新聞は地域に愛される新聞であることを確認して、地域新聞では、ふるさと新聞と他の地域新聞のよさを調べた後、「ふるさと新聞をよくしていく為に

はどうしたらよいのか」を考え、ふるさと新聞への魅力について考えている。授業の最後に、ふるさと新聞へのリクエスト用紙を書かせ、ふるさと新聞へ持っていき発信した。

第6時では、ふるさと新聞を見比べて、地域行政等の地域の事実を伝える記事と今まで学習してきた地域を盛り上げる記事があることを知り、「ふるさと新聞は、明るいニュースを伝える事がふるさと新聞の役割なのか」を考える事で、ふるさと新聞の役割や魅力について改めて考えた。

第6時後、すぐに子どもたちにはふるさと新聞のリクエスト用紙について社長さんの思いを伝えた。第6時後に、子どもたちにはふるさと新聞の記事を書くことになった事を伝え、今回は地域づくり・街づくりの応援団の視点から大門商店街の記事を書くことを伝えている。また、大門商店街で記事として取り上げたいことを宿題としている。

第7時より前に、宿題を基に、選定地を2～4か所決めて、発表し、7時までに選定地に取材のアポイントメント、次時の説明などを行った。

第7時では、ふるさと新聞の人に来てもらい、記事を作る時の工夫等を知る。ふるさと新聞の人と取材するときどのように聞けばよいかなど取材のコツを知り、取材する内容を考える。

第8・9時では、8時で話し合ったことにふるさと新聞の人と協働してその店の魅力など取材等を行う。(9時の後、宿題としてふるさと新聞の人の資料を基に記事を作らせる)

第10時では、記事として自分たちが直してきたものを班で共有し、2班ごとに1つの記事を作成する。ふるさと新聞の記事に合うようにそれぞれの記事のキーワードやここが大切であるという事を出し合い一つの記事を作成する。

第11時では、各班で作った記事をまとめ、4班毎に記事の一つを作成する。(4記事出せる場合は2班ごとに作った)記事を見直しながら作る事で、校正作業について理解して行う事ができる。

第12時では、新聞に載った事で地域や社会の人に認められた事から、自分たちは社会の役に立つことができたのだろうか、自分と社会との関わり方を考える。



【本時案】

(7・8時間目)

ゲストティーチャーである三重ふるさと新聞の森社長に行っていただく。

資料1 森社長合同授業概要

授業開催日 11月7日(木) 8:45分から10時25分

(9時半から9時40分で10分休憩)

授業教室:附属小学校1階会議室

授業者:増田直史

ゲストティーチャー:ふるさと新聞 森社長

教室にあるもの:①ホワイトボード②マイク③プロジェクター等 ④iPad

子どもたちがもってくるもの:筆記用具, 調べたいものを書いたワークシート, メモ用紙, 宿題にして有った質問用紙, 資料など

授業体形:グループ体形(4人×8班), 長机でのグループ活動

授業の流れ:(前半)45分間休憩後5分

①自己紹介と簡単な話5分

<森社長と交代し>45分

②ふるさと新聞の作成の流れ

③新聞の歴史今と昔(見比べるなどの演習)

④記事の書き方, 具体的な記事の内容

(どのようなところに書くか)

(増田交代)

(後半)45分

①子どもたちが書いてきた質問に森社長に答えてもらう 15分

②宿題で書いてきた質問を検討する⇒どんな質問が良いかを考える 20分

③次回以降の流れを説明する 10分

※ふるさと新聞社にお願いしたいこと

・ふるさと新聞を作るにあたりどんな新聞か知りたいので一人1部どの日時でもよいので新聞を頂きたいです。

④取材の仕方などの工夫

・なるべく昔と今を比較できる記事をご用意いただきたいです。

本時の学習の目標は、三重ふるさと新聞の人に取材のコツや記事にする際にどのようにまとめればよいのかについて話して頂くことにより、次回の取材に向けて、取材のときの質問を吟味し再度考える事ができるである。

本時の準備物は次のとおりである。指導者は、三重ふるさと新聞、大門商店街の資料、ワークシートを準備する。ふるさと新聞の人はふるさと新聞の記事作り資料を準備していただく。子どもは、三重ふるさと新聞（班毎）、取材の質問等のメモ用紙を準備する。

本時の学習過程（60分）

| 学習活動及び指導者の働きかけ                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 指導上の留意点及び予想される子ども等の反応等                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 前時までの振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ふるさと新聞の学習を振り返り、「ふるさと新聞はどんな目標で記事を作っているのでしたか」と尋ね、ふるさと新聞は地域の応援団として発信している事、また、「なぜ少人数で新聞を作っているのでしたか」と尋ね、大手の新聞ではなく記事の内容にこだわっていることに注目させる。</li> <li>・ これからふるさと新聞の記事をふるさと新聞の人とともに書いていくという気持ちを持たせふるさと新聞の人の自己紹介等をしてもらう。</li> </ul> <p>2. 三重ふるさと新聞の人から、記事の書き方取材の仕方、ふるさと新聞の意義を理解する。</p> <p>○ 「ふるさと新聞の人から聞かせていただいた話をメモしましょう」と言い、各班に昔のふるさと新聞と今のふるさと新聞、ふるさと新聞を置き、メモ用紙に記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ゲストティーチャーの三重ふるさと新聞の森社長に交代し、以下の点について中心に教えて頂く。①ふるさと新聞の今と昔②ふるさと新聞の役割③新聞のつくり方の流れ④作る時の条件・書き方⑤取材の工夫やり方⑥取材でもふるさと新聞ならではのについて教えて頂く。</li> <li>・ 三重ふるさと新聞さんならどのような質問</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「地域の魅力を伝えることです。」</li> <li>・ 「地域づくり・街づくりの応援団です」</li> <li>・ 「記事の内容の正確さです。」</li> <li>・ 「その人ならではの記事が書けるところです。」</li> <li>・ 「森社長が来てくれました。」</li> <li>・ 「記事の事を教えてくれるのかな。」</li> <li>・ メモを取らせるようにさせる。内容が難しい時には、適宜教師が補足や子どもたちにつまりどういう事と言う風に問いかけながら行う。</li> <li>・ メモを書くのに難しい児童内容が話の内容が分からず困っている場合は支援するようにする。</li> </ul> |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>をするかについても話してもらう事により自分たちが考えた質問が記事を書く上であったのかという視点で聞くようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 子どもの宿題の中の問いにある、「地域を盛り上げる記事とは、どんな記事なのだろうか」と、尋ね自分たちはどんな記事を目指すべきかを考える。</li> </ul> <p>○ 三重ふるさと新聞が新聞を作るにあたり大事にしている地域づくり・街づくりの応援団であり地域に寄り添える新聞づくりをしていることについても改めて理解し、街を更に知ってもらい来てもらう事から始まることを理解する。</p> <p>3. 三重ふるさと新聞の人に聞いてみたいことを共有する。</p> <p>○ 事前にワークシートで宿題にしてある「ふるさと新聞の人に質問したい内容は何ですか。」と尋ね、何人かが発表していく。後の三重ふるさと新聞の人から聞かせていただく話につなげる。</p> <p>○ 三重ふるさと新聞の人に前に来てもらいこのような疑問があることを理解してもらい質問に答えてもらう。</p> <p>4. 班で取材に行くときの質問を考える。</p> <p>○ 班毎に分かれ、ワークシートに1人5個自分が考えてきたことを共有し、ふるさと新聞の人取材の話から16個の質問を基に取材に必要な質問を改めて考え、4～5個の質問を決める。</p> <p>○ この時に、ただ単純に営業時間や商品などの質問ではいけないことに気付かせ地域を盛り上げると言う視点をもたせる。</p> <p>○ 班毎に取材の時にどこを視点とするかを決</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「地域を盛り上げるという事は、街全体を盛り上げる事です。」</li> <li>• 「店の紹介をするだけでも街を盛り上げたことになるのではないかと思います。」</li> <li>• 「記事を書いて更に街に人が集まってくる事が盛り上げる事につながります。」</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ふるさと新聞社の人に教えてもらっていない質問などを中心に取上げるようにする。</li> <li>• 「ふるさと新聞のこだわっていることについて聞いてみたいです。」</li> <li>• 「記事へ書くのに取材をどうしたらよいか聞いてみたいです。」</li> <li>• 「取材していて困ることについて聞いてみたいです。」</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「〇〇という店は、どんな店ですか？」</li> <li>• 「〇〇店のこだわりはなんですか？」</li> <li>• 「他にはない伝統の作り方はありますか」</li> <li>• 「大門になぜ作ろうと思ったのか」</li> <li>• 「この店は、この場所で続けているのですか？」</li> </ul> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



授業開始から 10 分～15 分 移動時間

ふるさと新聞 10 分 (交代で会社内を見学)

取材時間 50 分 (10 分休憩)

後半チームは前半 45 分から 50 分取材後半 10 分三重ふるさと新聞見学とする。授業終了前 15 分から授業終了まで移動時間とした。

移動手段は、バスと歩きとし、持ち物としては、クリップボード、メモ用紙、筆記用具、水筒である。写真や絵などについてもメモやカメラで取らせる。

場所：子どもの宿題内容からふるさと新聞に聞き見学地決める

はちみつ饅頭、津観音、とらや、平治煎餅、センターパレス、真ん中広場の盛り上げる施設ジャンルが違うもので(祭り、食べ物と雑貨等)別々で記事を考える。

引率者(班毎)：ふるさと新聞の方、中村寛治先生、永田成文先生、佐野琴美さん(仮)、嶋野雄太、増田直史

・9月に取材先アポイントは増田が事前にアポを取ることを伝え、10月初旬に子どもに事前に取らせる。

※取材については、ふるさと新聞の人にも来てもらい、実際行う事が理想であるが難しくであればふるさと新聞の人にも別で作ってもらう。(当日ふるさと新聞によりすこし話を伺う)

☆課題として、ふるさと新聞の記事の書き方を配り、自分たちで記事までに書いてくるようにする。

イラストや写真もここに記事に載せてくるようにする。

#### (10時間目)

本時の学習目標は、ふるさと新聞の記事を個人で書いてきたものを班で共有し、班ごとにふるさと新聞を作成する。自分たちのふるさと新聞の記事を作る事により、自分たちの新聞記事が社会に役に立った新聞となるのだと実感することができる。本時の準備物については、指導者：三重ふるさと新聞、三重ふるさと新聞からの条件の資料(パワーポイントもしくは資料)、割り付けした原稿用紙を配布予定である。子どもは、三重ふるさと新聞(班毎)、取材してきたことのノート、(ワークシート)、個人が作ってきた新聞記事(原稿用紙)である。学習過程としては、以下の通りである。

#### 学習過程(45分)

| 学習活動及び指導者の働きかけ                                | 指導上の留意点及び予想される子どもの反応等 |
|-----------------------------------------------|-----------------------|
| 1. 個人で作ってきた記事を全体で共有する。<br>・ 「記事を書いてきてみんなの前で発表 | ○ 何人か挙手させて、子どもたちを発表さ  |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>したい人」と個人で作った記事を何人かに発表させる。どんなことに気をつけて書いたかについても説明させる。</p> <p>○ タブレットなどで前のテレビにも写すようにし、様々な記事を皆が書いていることを理解する。</p> <p>2. 個人が作った記事を班で共有して一つの記事を作成する。</p> <p>「班の中で個人が作ってきた記事を共有してみましよう、構成も皆で行って見ましよう」と言い、班の体形にする。</p> <p>○ 10分時間を取り、班の4人で回し合いながらお互いの記事を見合う。</p> <p>○ 班で共有する時に、どこに注目して作ったか、そして、国語辞典を見ながら実際に言葉を直していく。</p> <p>「班の皆の記事を受けて、班で一つの記事を作ってみましよう。」と言い、班の中で一つの記事を作ってみる。</p> <p>○ イラストや写真についても班で決めさせるようにする。</p> <p>3. 本時の学習を振り返る。</p> <p>○ 「班の記事を発表しあいましよう」と言い、記事を発表し、共有する。</p> <p>・ 次回までにこの記事のタイトルを何にするか考えてくるように伝え授業を終える。</p> | <p>せるようにする。</p> <p>○ 前回の書いた時に面白い記事を書いた子どもに発表させるようにする。ここでは確認のみとし、あまり時間をかけないようにする。</p> <p>○ 記事を皆で見合うようにする。見合うときに、ほかの子どもの事を批判せずに行うようにさせる。</p> <p>○ 班の中を批判するのではなくことばではなく、言葉を正しくより分かり易くという視点から直させるように支援する。</p> <p>○ 困っている子ども、質問があれば、机間指導しながら支援するようにする。</p> <p>○ 全員の意見が共有できたものを作成できるように一人だけのものではなく、全員の意見を共有して一つの記事を作るように支援する</p> <p>○ なるだけ、社会に役立ったという気持ちを入れるように、全員の意見を取り入れて作成するようにする。</p> <p>○ クラスの班の子たちがどんな記事を書いているかを知ることにより、より記事をさらに良くしようとする記事への気持ちが生まれる。</p> <p>・「私のグループの作成したもの：・・・です。」</p> <p>・「言葉をこう変えるとさらにいいと思います。」</p> <p>○ ふるさと新聞の記事を作っていることで社内目標や方針から考えるようにさせ</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

|  |    |
|--|----|
|  | る。 |
|--|----|

### 板書計画

|                          |                |       |
|--------------------------|----------------|-------|
| ○/○                      | 班の記事（2つの場合）    |       |
| ふるさと新聞作成に気を付けたこと         | ・①班の記事         | ②班の記事 |
| ・文字数を考えた                 | ・③班の記事         | ④班の記事 |
| ・見てもらう事から言葉とかを考えた        | ・⑤班の記事         | ⑥班の記事 |
| ・地域の人に知ってもらいたいという気持ちで作った | ・⑦班の記事         | ⑧班の記事 |
|                          | ⇒それぞれの記事の良いところ |       |

### （11時間目）

本時の学習目標は、班で作った物を更に校正、推敲し4つの記事へと作っていく。自分たちのふるさと新聞の記事を作る事により、自分たちの新聞記事が社会に役に立った新聞となるのだと実感することができることである。本時の準備物としては、指導者は三重ふるさと新聞、三重ふるさと新聞からの条件の資料（パワーポイントもしくは資料）、割り付けした原稿用紙を配布予定、班で作ってきたものである。子どもは、三重ふるさと新聞（班毎）、取材してきたことのノート、（ワークシート）、個人が作ってきた新聞記事（原稿用紙）、タブレットの準備物である。学習過程としては以下である。

### 学習過程（45分）

| 学習活動及び指導者の働きかけ                                                                                                                                                                  | 指導上の留意点及び予想される子どもの反応等                                                                                                                                                                  |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 班で作った記事を改めて復習する。</p> <p>「班で作った記事を振り返ってみましょう。記事に作った物を発表しよう」と言い、できた記事をテレビに写し発表させる。」と言い、班で作った記事を振り返る。</p> <p>○ 班で作った記事をパソコンなどで見せるようにする。</p> <p>○ 直してきた班とかはどこを直したのかを発表する。</p> | <p>○ 書き直してきた人を何人か挙手させて、子どもたちを発表させるようにする。</p> <p>○ 前回の書いた時に子どもにも発表させるようにする。</p> <p>・「行数に合わせるのを苦労して直しました。」</p> <p>・「○○の店のこだわりを前面に出せるようにしました。」</p> <p>・ 記事を皆で見合うようにする。見合うときに、他の子どもの事を</p> |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>2. イラストや写真についても4班（2班）で1つ決めさせるようにする。</p> <p>一班5分で取材の中で聞いてきた事、自分たちがこの記事に書けた思い、ふるさと新聞の記事の方針や目標とあっている点、記事とイラスト・写真の関連性に着目してプレゼンテーションする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発表してない班は、他の班の記事をきき、班で直すべきところは相互に意見を言い合う。その後、班で再度直す。</li> <li>・ 最後にふるさと新聞からアドバイスをもらい、自分たちが直したらよいところを学ぶ。</li> </ul> <p>3. プレゼンテーションで言われたところを直し再度構成しながら良い記事を作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 再度班ごとに分かれ、どこが直すべきかなどを見ながらお互いに直し合うようにする。</li> <li>・ すべて直すことは難しいため、どこが直すべきかを考えながら直すようにする。</li> </ul> <p>4. 本時の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「記事を作った感想を言いましょう」と言い、記事を作った感想を発表し、共有する。</li> </ul> | <p>批判せずに行うようにさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 班の中を批判するのではなくことばではなく、言葉を正しくより分かり易くという視点から直させるように支援する。また、班で選ばれなかった班についても、使えそうな表現、などあれば、そこから記事に活かせるようにする。</li> <li>・ 班のみんなで作った事を実感させるために、全員が発表できるようにする。</li> <li>・ ふるさと新聞の方針、社是、プレゼンテーションの内容からお互いの意見を交わし合わせるようにする。</li> <li>○ 班毎に分かれ、ふるさと新聞の人が入りアドバイスを行って記事を決めていく。</li> <li>○ 困っている子ども、質問があれば、机間指導しながら支援するようにする。</li> <li>・ 「今まで記事を作るという経験はしたことはなかった。」</li> <li>・ 「難しさや大変さを知ることができた」</li> <li>○ なるだけ、社会に役立ったという気持ちを入れるように、全員の意見を取り入れて作成するようにする。</li> <li>○ クラスの班の子たちがどんな記事を書いているかを知ることにより、より記事をさらに良くしようとする記事への気持ちが生まれ</li> </ul> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



|                                   |                                                                                                                                       |
|-----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>・「記事のタイトルを考えてきたものを発表しましょう」</p> | <p>る。</p> <p>・「私のグループの作成したもの:・・・です。」</p> <p>・「言葉をこう変えるとさらにいいと思います。」</p> <p>・「〇〇にしました。」</p> <p>○ 記事に合うものを何個かの中から選んで記事のタイトルにするようにする</p> |
|-----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

### 板書計画

|               |                      |              |
|---------------|----------------------|--------------|
| ○/○           | 2つの記事（4つの記事で来た場合③④も） | 記事のタイトル      |
|               | 記事①                  | ・津大門から・・・    |
|               | 記事③                  | ・大門のみりよくすぽっと |
|               | 記事②                  |              |
|               | 記事④                  |              |
| ⇒記事に共通しているところ |                      |              |

この間に、新聞が掲載された。(12月から1月にかけて)

(12時間目) 2月実施

本時の学習目標は、ふるさと新聞の記事を実際に書いて新聞として発行されたことにより、「ふるさと新聞が」保護者・地域などからの意見から自分たちが認められたことにより、社会に役に立っていて自分は社会の一員であると感じる事ができる。

本時において、指導者は三重ふるさと新聞（製作分）を準備する。

本時の学習過程は次の通りである。

学習過程（45分）

| 学習活動及び指導者の働きかけ                                                                       | 指導上の留意点及び予想される子どもの反応等                  |
|--------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|
| <p>1. ふるさと新聞と今までのかかわりを振り返る。</p> <p>・ 「新聞の記事を作成するまでどんな流れで作りましたか」と、尋ね、ふるさと新聞の今までの流</p> | <p>・ 「記事になる店や歴史などの場所をきめて取材に行って記事を書</p> |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>れをパワーポイントか模造紙などで振り返らせる。</p> <p>○ 6月の授業から新聞作成の記事までどんな流れでふるさと新聞という地域の方とどうやってかわってきたかという視点をもたせる。</p> <p>○ 「ここまでふるさと新聞について学習してきましたか？」と尋ね、発表させる。</p> <p>2. ふるさと新聞の記事を作成し保護者・地域・社会の人に認められたことで社会に自分たちが関わるといふ事を考える。</p> <p>「皆で作ったふるさと新聞を見た人？」と尋ね、ふるさと新聞と協働してふるさと新聞の記事を作った事を確認する。</p> <p>○ その時に、地域に人や保護者の方から認められたことを実感する。</p> <p>○ 新聞を購読していない自分たちが作成した新聞記事を配布し、自分たちの作成したものが載っていることを実感する。</p> <p>○ 新聞は全員に行き渡るようにし、5分取りしつかり自分たちの記事を読むようにする。</p> <p>○ 「ふるさと新聞の記事が実際に発行されたことについて皆はどう思いますか」と尋ね、ふるさと新聞の記事が実際に様々な人に見てもらったことになった事から社会と関わり社会に役に立ったと実感する。</p> | <p>きました。」</p> <p>・「こんなに長い期間三重ふるさと新聞と関わってきたのだと感じました。」</p> <p>・「地域・社会の人と関わる機会ってなかったように感じます。」</p> <p>・「見ました。」</p> <p>・「お母さんに新聞を自分たちで作ったんやと言われました。」</p> <p>・「おばあちゃんに載っていたよ。取材に行って調べたのだねと言われました、私こんな店知らなかったと言われていろんな人に知ってもらえたのだと思いました。」</p> <p>・「新聞は多くの人に知ってもらえるツールだと感じました。」</p> <p>・「新聞に出るっていうのは初めての経験だった。」</p> <p>・「今までクラスで新聞作ったりしたけど、実際に調べて新聞作る事はなかったです。」</p> <p>・「お母さんや地域の人から自分の新聞が出していることを知ってもらえたのだと思いました。」</p> <p>・「社会に自分たちの記事が調べた</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>3. 地域の人と協働し地域を盛り上げる新聞を出す事で社会の役に立ったと感じる事ができたかについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「ふるさと新聞の記事をふるさと新聞の人と記事を作って社会、地域の役に立ったと思いますか」と尋ね、「ふるさと新聞の記事が社会に役に立ったと思いますか」と板書する。</li> </ul> <p>○ 3分間程度時間を取り、自分の考えを作らせノートに書かせる。</p> <p>○ ノートに書いたことをもとに話し合いをさせる。</p> <p>○ 相互指名を行い、発言は自由にさせるが、自分の考えを発言するだけではなく、友達の考えと繋げて発言させていく。そのために、自分の考えと相違点や類似点を意識しながら友達の発言を聞くように促す。</p><br><ul style="list-style-type: none"> <li>「地域の人と協働で行う事でこれかも社会にかかわっていかうと思いましたが」と尋ね、自ら一人の力で変わることができるという社会に参加する意義について考える。</li> </ul> | <p>ことが知ってもらえたのが嬉しかったです。」</p> <p>○ 出来るだけ全員の意見を発表できるようにする。</p><br><p>&lt;役に立った&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「地域の人に自分たちの調べた店が知ってもらえました。」</li> <li>「地域の人から自分たちの活動、記事について認めてもらったからよかったです。」</li> <li>「地域の人、取材した人、ふるさと新聞の人等様々な人とこの活動を通じて行うことができました。」</li> </ul> <p>&lt;役にやってない、まだまだである&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「自分たちが新聞記事を書くところまで自分たちで行いたかったです。」</li> <li>「社会に役に立ったところまでは、感じられなかったです。」</li> <li>「地域の人たちにかかわっていきたいです。」</li> <li>「防災訓練や自治会に参加して自分たちとしての意見に言いたい。」</li> <li>「今までご意見番などがあるのは知っていたけど、自分が行っても変わらないと思っていたけど入れてみると変わるかもしれないと思いました。」</li> </ul> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

|                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                     |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>4. 本時，単元の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ふるさと新聞の学習をして，新聞に対する意識が変わりましたか。」と尋ね，新聞に対する意識の変化を見る。</li> </ul> <p>○ 最後に社会的有用感に関するアンケートを書かせ，授業を終わりとする。</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「自分が言うだけでは変わらないけど，大人とともに変わる必要が有ります。」</li> <li>・ 「新聞には，こんなにも様々な事が載っている。」</li> <li>・ 「新聞って遠い存在に思えていましたが，身近にあるものだという事が分かりました」</li> <li>・ アンケートについては，中間時と同じにする必要はなく，ふるさと新聞の記事まで実際に書いてみてと促し，変容を確かめる。</li> </ul> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 第2節 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の授業の実際

指導案上から探究していく中でずれた部分もあったが，それは，子どもの思考及び社会参加に向かっていく一段階であり，それを踏まえたことで社会的有用感が高まっていったのだと考えられる。

### 【7-8時】

7-8時では，森社長による授業（講演）と森社長への質問，取材の時の質問を考える事を考える時間とした。

森社長による授業（講演）では，三重ふるさと新聞の理念や社長さんが新聞記者になった理由について昔と今の新聞の違い，取材の時のコツについて話していただいた。その時には，工夫や苦勞等についても話していただいた。取材のコツでは，①相手の事を調べる②メモを有効活用する③取材対象を楽しませる！！（リラックスをさせる）④交通整理をしながら取材をする。取材でのメモは，①だれの②どこで③何をしたのか④どこでそうしたのか⑤コメントを聞くことをしておくが重要であるという事を教えて頂いた。

講演を終えた後に，質問時間を取った。質問では，「取材店にとって，いやな質問をしても良いのか」「取材するときのメモをどのようにしたらよいのか」等といった質問が出ていた。

質問を考える演習では，夏休みに調べてきたプリント及び ipad，資料を基に取材する質問を考えた。森社長さんもみえたので，どのような質問か聞きに行く場面も見受けられた。

### 取材のアポイントメント

7・8時を受けて，子どもたちは，授業の一部の時間を使い，電話役を決めてアポイントメントを取った。6個の取材先に，電話をかけてどのようなこと取材したいかを決めた。子

どもたちは、担当の方や取材場所をメモした。

#### 【9-10時】

9-10時では、取材先に取材と三重ふるさと新聞での見学を行った。

大門商店街への取材

移動手段：バスと歩き

写真や絵などについてもメモやカメラで取らせる。

場所：前半取材：はちみつまんじゅう，平治煎餅（2班ずつ）

後半取材：津観音，センターパレス，街の駅大門，丸の内商店街振興組合

引率者（班毎）：ふるさと新聞の方（新聞社見学），中村寛治先生，永田成文先生，増田直史，三重大生3名，三重大院生2名

☆課題として，ふるさと新聞の記事の書き方を配り，自分たちで記事までに書いてくるようにする。イラストや写真もここに記事に載せてくるようにする。

三重ふるさと新聞社の見学

ゲストティーチャーである森社長による解説で，三重ふるさと新聞の社内見学をさせて頂いた。特に，4時で扱った新聞の製造工程を実際に見る事ができ，パワーポイントで伝えた製造過程は実物で見た時との違いなどを感じられたのではないかと考えられる。（割り付け，広告，記事打ち込み，印刷，データ発送等）ここからも自分たちが作る新聞は，社会に発信されるのだと感じていたと考えられる。また，森社長が質問コーナーを設け，質問に答えていた。

#### 【11-12時】

取材を基に新聞記事を書いていく時間である。この時間では，始めにC20の「地域を盛り上げるとはどういう事を書くのか，お店に人が来たら良いのかそれとも地域全体に人が来るようになればいいのかわからない」という疑問を取り上げ，地域を盛り上げる意義を考えた後，1人1人が書いてきた宿題で書いてきた記事を班で共有するようにした。共有するときに共通するキーワードから記事を書く内容を決めていった。その後，班で一つの記事の作成を行った。11時開始時に次回は前で自分たちが作成した記事をプレゼンテーションすることを伝え授業を終えた。

#### 【13-14時】

この時間は各班で作った記事を他の班や担任，指導者，森社長にプレゼンテーションさせた。事前に子どもたちには他の班の記事を読んでこさせ質問できるようにした。2時間で8班が発表するようにした。質疑応答の時間も取るようにした。

### 【15-16時】

2時間では、自分たちの記事にあうタイトルを考えた。めあては「5Aにぴったりのタイトルを考えよう」とした。本2時間は国語科との融合という担任主導で進め、サブで筆者が入った。後半部分で、タイトルでどれが合うかを絞っていった。

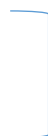
3つまでに絞った「大門めぐり」「大門の見所調査」「大門（商店街）を元気に」の3つから話し合いを通じ一つ「大門（商店街を元気に）」に絞っていった。社長のアドバイスや今までの意見を基に、記事を修正していく時間とした。

(話し合いの様子)

「もっと大門を元気に」

「大門商店街を元気に」

「大門の見所調査」



3つのどれが合うかを考える。

大門商店街を元気に焦点化

もっとがいるのか。

大門に活気がないみたい

元気に大門を、元気な大門への方が良いのでは。

最終的には、社長さんへ大門を元気にもしくはもっと大門を元気に！どちらにしたほうがよいかを検討してもらおうという結論となった。

### 【17時】

本時が本実践のまとめである。すべての新聞記事が新聞として出たことを確認する。社会にイベント等で見てもらい認められた経験がある。まずは、ふるさと新聞の記事を作ってみての感想を言い合った。その後、お母さんお父さんなどから言われた経験について言い合った。最後に“大門を元気に”という記事は地域を盛り上げる事は出来たのかという課題について話し合いを行った。

## 第6章 社会的有用感を高める小学校社会科まちづくり学習の分析

### 第1節 社会的有用感を高める社会科まちづくり学習の授業分析

筆者は、評価基準とルーブリックとアンケートにより評価を行った。

この3つから評価した理由として以下のようなになる。

一つ目の評価基準を設定した。評価基準を設けて学習指導要領3目標で分析することで本基準が生かされたのかがわかり、自分が本学習の意義がどのようにあるかを子どもたちが理解したのかが表れたのかがわかりやすいと考えたからである。国立教育政策研究所(2018)<sup>1)</sup>によると、「学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められます。」と示されており、学習の成果を目標ごとに分けて、指導と評価を一体化することが必要となってくる。そして、指導は、子どもの目標分析からPDCAを通じて教師は改善していく必要があり評価していく必要があると考えたからである。

二つ目のルーブリック評価を設定した。項目(尺度)水準とそれをどの段階で満たすのを見ることができる。この段階表は、教師・保護者・児童・誰が見たとしてもわかりやすく、この子はこの段階であるといったようにわかりやすいからである。

中央教育審議会(2012)<sup>2)</sup>によると、「国で開発された学習評価の基準の作成方法であり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的評価に有用で、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある」と書かれている。尺度を設け、それを本授業実践では力を7つの力として本授業で培うべき力を筆者が内容とともに決めて行うことができたと考えている。それによって分析を行うことができると考えられる。

三つ目はアンケートによる評価である、本実践では、社会的有用感というものが高まったのか、また社会参加特に協働的社会参加が有効な方法だったのかを示す研究である。子どもたちからこの2つの気持ちを知るにはアンケート(質問紙調査)が有効な方法であると考えた。また、事前と事後での比較を行うことにより、どのように変わったのかもわかりやすいと考えた。

#### 第1項 評価基準による分析

評価基準による分析は、指導内容に照らし学習指導要領及び解説に従い、「知識及び技能」「思考力判断力表現力等」「学びに向かう力・人間性」に分け評価基準を設定し表6-1に表した。

表6-1 評価基準

| 知識及び技能                                                                                 | 思考力判断力表現力等                                                                               | 学びに向かう力・人間性                                                                                                      |
|----------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 情報が溢れており人々は利用目的に応じ選択し手に入れていることを理解するとともに、ふるさと新聞の役割、意義について調べたり考えたりしたことを分かりやすくまとめることができる。 | 三重ふるさと新聞を取材から発行するまでの手順の人々の工夫や努力に着目し、子どもたちが調べまとめる事ができる。自分で調べたいことを決め、取材したことをまとめ記事として表現できる。 | 三重ふるさと新聞を含む地域の新聞に関心を持ち、取材を自分たちで意欲的に行い、追究しつづけるとともに、新聞を含めたメディアとの自分とのかかわりについて捉えなおし、自らが社会参加する事で地域社会の一員としての自覚をもつができる。 |

筆者作成

単元の1次、2次及び3次8時にかかわる授業については、知識及び技能に当たる。1次では、様々なメディアがあることを知り、その中でアンケートやグラフの読み取りを基に新聞の意義について自分たちで考えた。また、2次では、新聞をふるさと新聞と自分が読んでいる新聞（主にブロック紙）などと比較して、地域新聞の意義を知った。また、三重県にはたくさんの地域新聞があるのを子どもたちの調べてきたノートなどを共有することから知った。また、ふるさと新聞と他社の地域新聞（三重タイムズ社）との比較を通じてふるさと新聞の意義や魅力、良さなどについて考えた。3次の8時では、ゲストティーチャーであるふるさと新聞の社長から『ふるさと新聞の大切にしていること、取材の意義』などについて知ることができた。

この事により、小学校社会科5年生の単元としてメディアに対する知識及び技能は扱った。子どもたちは、長期間にかけてふるさと新聞を事例に地域新聞の意義や役割について理解し考えて自分の意見を持つことができたと考える。また、普段使用している新聞と比較することにより違いなどに着目することができたと考える。課題としては、メディアの中で新聞以外のメディアについて知る事が薄くなってしまったのではないかと懸念がる。子どもの持ってきた地域新聞にさらに着目することができたのではないかと考える。

2次のふるさと新聞にかかわる話し合う授業やふるさと新聞の作る手順にかかわる授業や3次である取材して記事としてまとめる授業について思考力判断力に当たる授業である。2次では、パワーポイントを使用し、ふるさと新聞を作る手順、ふるさと新聞の会社事情などについて知り、まとめた。毎時間2次では、「ふるさと新聞は残すべきか」などといった価値判断などや意思決定を伴う話し合い活動を行うことで自分の考えを持ち考えていることをさらに深めることができた。また、3次では、調べて終わりではなく、記事として表現するために、調べたり話し合ったりしながら考え表現している姿が見受けられた。課題としては、ゲストティーチャーの話などが子どもたちにもう少し早く聞けるとよかったのではないかと考える。また、人々の努力という目標があるが、地域新聞は少人数



で行っているであるとか分担して行っているといったことについては扱ったがもう少し薄かったのではないかと考えられる。

1次のメディアの種類，2次のふるさと新聞の授業，3次で地域新聞の記事を作成する地域協働型の社会参加をしていく授業については，学びに向かう力・人間性に当たると考えられる。本来，私は学びに向かう力はすべての授業，単元全体としてつけておく力であると考えている。ここでは，特に重要な部分というところで述べることにする。1次のメディアの種類は，ほとんどの人がインターネットなどといったものを考えていたため，テレビ，新聞などを考えている人が少なかったが，関心を持ち調べていく中でガイドブックやパンフレット，地域情報誌なども見つけることができた。2次では，ふるさと新聞の会社の情報を行ったり，それについて自分たちで調べに行ったりすることにより，自興味や関心が高まった。3次では，単元としては，取材を一回，三重ふるさと新聞社長さんの来校を3回取り入れた。(工場見学を含む)子どもたちは，これを受けて子どもたちは，新聞を身近なものに感じるようになっていた。また，自分たちが記事を作成するために取材することで，アポイントメントを撮ったり，取材内容を考えたりすることで新聞社の目線で考えることができた。また，社会参加を行うことにより，地域社会の一員として考え自ら行動することができたのではないかと考える。それによって，新聞に載る記事が欠けていったのではないかと考える。

## 第2項 ルーブリックによる評価分析

本授業実践では，大きく7つの力を養っている。iは，地域の人と協働するという地域協働型社会参加から来ている。IIは，子どもの権利条約にある相手の意見を受け入れるところから来ている。iiiは，自己有用感にかかわる部分である。自分が役に立ちという部分である。ivは，社会科では重要である調べることだけでなく，まとめる力である。Vは，提案する社会科などにあるが，誰かに伝えることが重要となってくる。VIは，新聞社の意図を取り入れながら記事という社会参加を行う必要がある，VIIは，社会的有用感にかかわる部分であり，社会的に認められるといった部分である。

- i 主体的に地域の人と協働しようとする力
- ii 他者の意見を取り入れ，自分で深めていこうとする力
- iii 社会と関わり社会の為に自ら役にたとうとする力
- IV 調べ，取材したことを基にまとめる力
- V 自分や自分たちの意見を自分の言葉で発信できる力
- vi 自分たちの意見を一つにして，意図に沿って記事へと表現する力
- vii 誰かに認められようと努力する

ここから具体的な姿として示したものである。

表6-2 ふるさと新聞ルーブリック表

| 項目（尺度）/段階                      | 1                  | 2                                   | 3                               | 4                                         |
|--------------------------------|--------------------|-------------------------------------|---------------------------------|-------------------------------------------|
| i 地域の人と協働しようとする力               | 地域の人と関わっている。       | 地域の人を考えを自分に取り込もうとしている。              | 地域の人を考えや思いを照らし合わせながら、協働している。    | 地域の人を考えや思いを自ら出向き、調べ、質問しながら協働している。         |
| ii 他者の意見を取り入れ自分の意見を深めていこうとする力。 | 自分の意見は、しっかりと持っている。 | 他者の意見を取り入れようとしている。理解が不十分のまま取り入れている。 | 他者の意見を取り入れ、自分や自分の班の意見や考えを深めている。 | 他者の意見から自分や自分の班に必要な部分を考え、そこから意見を深めている。     |
| iii 社会と関わり社会の為に自ら役に立とうとする力     | 社会の問題を知り、社会の人と関わる  | 社会の問題を知り役に立てることはないかと考えている。          | 社会の問題を知り、役に立てることを行動する           | 社会の人ともに自ら積極的に役に立てることはないかと考え行動する。          |
| iv 調べ、取材したことをまとめる力             | 箇条書きなどになっている。      | 自分なりの分かり易いまとめ方でまとめている。              | 重要などころだけをまとめている。                | 記事を作成することを考えながら重要などころをまとめている。             |
| V 自分の言葉で発信できる力                 | 自分の考えを話すことはできる。    | 自分の考えの根拠を考えながら話すことができる。             | 自分の考えの根拠を考え、筋道を考えながら話している。      | 自分の考えの根拠を考え、筋道を考えながら、他者に伝わりやすい形で話している。    |
| VI 意図に沿って記事へと表現する力             | 記事を考えながら表現している。    | 説明文との違いを理解しながら、記事として表現している。         | 会社の方針と記事の内容を考えながら、表現している。       | 会社の方針と記事の内容を考えながら、見出しと内容を一致させ記事として表現している。 |
| VII 社会参加し社会に認められようと自ら努力する力     | 社会に参加する。           | 積極的に社会参加する。                         | 社会参加し認められようと自ら探究し努力する。          | 社会参加し認められようと他者と協働しながら探究する。                |

筆者作成

ルーブリック評価の項目と対応して項目ごとに記載する。

【iの項目について】

2次終了時の部分で、1の段階に達している子どもは、半数ほどいる事がノートや授業記録からも読み取れた。取材や電話対応をしていく中で、2の段階に9割以上の児童が達していたと考えられる。3については、三重ふるさと新聞の社長さんからのアドバイスや願いを取り入れて再度修正しようとする姿が見受けられた為、ほとんどの児童が3まで到達している。4の段階については、意図的に調べたり、考えたりする姿が見られたりする姿あった児童である2割程度が該当する。

#### 【iiの項目について】

他者の意見を取り入れて自分の意見を深めていく項目である。1の段階については、夏休みの段階では、自分で調べたいことを考えている為、これにあたる。2の段階としては、筆者や担任、他の班の人の意見、班員の意見、そして、取材した店、地域協働型社会参加にあたるふるさと新聞の方の話も聞いてメモしていたらこれにあたりと考えておりこれは達成している。3の段階としては、他者の意見を、自分たちの班や自分たちの記事に取り入れようとしているという段階である。13・14時の時にプレゼンテーションで他者の意見を積極的に取り入れようと発表後に、他班の意見、三重ふるさと新聞の社長さんのアドバイスや質問、自分や担任の先生の質問からの受け答えをしていた。そして、さらに班で話し合いながらどうしようか考えて修正して姿である。これについては、各班1人以上はこの評価まで行けている。4段階まで行くと自分の中で考えて遂行して抜粋する姿があれば該当するが、津観音の班や平治煎餅の班で見られた。

#### 【iiiの項目について】

この項目は①と関わってくる部分である。取りあえず、社会と関わろうとしていれば1となる。自己有用感と関わってくるが、自分や自分たちが役に立てるか考えていれば2となる。子どもたちは、実践が進む度に、「この記事を読むことで、大門商店街や店を訪れてくれるかな?」「街に人が増えるかな」と言った言葉が出ていた。これは役に立てるかを考えることになると考えられる。よって、2は達成している。行動という形で、取材し、地域を盛り上げる記事を書こうとしているという事で3には全員値する。しかし、「自ら積極的に」というのを意識して社会と関わろうと考えているのは、全員まではいかずに、「取りあえずやらない」「関わる必要はある」と、安易に考えてしまっている児童もいたことが伺える。よって、3と4の評価が半数程度にあたった。

#### 【ivの項目について】

調べ取材しまとめる力である。社会科では、資料を読み取ったり、調べてきていたりしたことをただ羅列した時にまとめている。これでは、1段階である。本実践でも、9・10時の取材時では、箇条書きに書いたり、取材メモを書いたりしている児童もいた。記事を書いていこうとすると、分かり易くイメージマップや矢印などでまとめないと分かりにくくどこが重要かもわかっていないことがある。その為、それに向けてしっかりとまとめられた人は4の段階まで評価も上がっていたと考える。

#### 【vの項目について】

ほとんどの児童が、自分の言葉で話すことはできており1は達成している。そして、根拠を用いて話している。しかし、原稿に書いたり、前で話したりするときに、まとめずにそのまま発表してしまうと言った児童も13・14時のプレゼンテーションで見受けられた。

一方、プレゼンテーションの発表の仕方、記事の書き方を変えたり、強調したりして、他の人に発表を分かり易くするものもあった。そのような児童は2割程度該当し4まで達成している。それ以外の児童は、工夫するという部分で担任や筆者が何回か指摘して記事内容を変更すると言った部分があった。改善の余地が見られたため3または2まで達成となる。

#### 【Ⅵの項目について】

意図に沿って記事を書くと言った部分である。新聞記事の社是である「地域を盛り上げる」部分と記事として適切かどうか、記事と見出しの内容が一致しているかが重要である。13・14時の段階では、三重ふるさと新聞の社長さんから指摘されたが「説明文になっています」と言ったことであった。地域の店の魅力を書くのだと気づいた児童が多かった事で2段階に上がった。そして、教員が「地域を盛り上げる」が会社の視点だという事に気付かせることで視点も加えた記事を書くことが9割の班が出来ていた。見出しの言葉までこだわった班が4班程あり、この班は、4段階になっている。記事については、800字の原稿用紙を配布し、何回か記事のタイトルや記事の内容について考えている。考えて何回か書き直している子たちは、何班か見受けられた4段階になっていると考えられる。

#### 【Ⅶの項目について】

社会参加する事により社会に自ら認められようと探究していく力である。三重ふるさと新聞と関わり、記事を出そうと協働し、記事を作成しているため2に該当する。認められようと何をできるか考えている人がテーマを話し合う15・16時の段階で多くの人で見られた。しかし、それを他者と認められようとしている。他者に認められたときと言ったことを考えながら話し合っているのは、25%から30%の児童と言った部分であった。17時の最後の話し合いの時には、「地域の人に認められようと努力すればよかった」と発言する部分は4段階にあたりと分析される。

#### 第3項 アンケートによる評価分析

社会的有用感の有用性が高まったのかそして社会的有用感が高まるには地域協働型社会参加が有効な手立てなのかを検証・分析するために、3次の事前と事後で以下のようなアンケートをとった。

#### 【事前アンケートの結果】

31名提出 設問③のみ複数選択1名の為30名で計算

設問1 三重ふるさと新聞の記事を自分たちで記事を作りたいと思いますか？

1 4名 (13%) 2 12名 (39%) 3 6名 (19%) 4 9名 (29%)

1と2で16名(52%)存在し、みんなに新聞を見てほしい、三重の色々な情報を見てほしい等がある。3の児童は作ってみたい気持ちはあるが、授業での新聞のつくり方や新聞

係の経験から難しいと感じているという児童も多く存在する。本授業実践を通して、児童の変化が感じられるようにする。

設問2 三重ふるさと新聞の学習を通して、地域には魅力があると思いませんか？

1 14名(45%) 2 10名(32%) 3 4名(13%) 4 2名(6%) 未回答1名(3%)

1と2で24名。(77%) 授業を通して、指導者は授業中、ふるさと新聞は「地域づくり・街づくりの応援団」という視点、子どもたちは「地域思いの新聞である」「地域の記事が多い」と発言、書いており地域に愛される新聞であること、地域にはそれぞれには魅力がある事を理解していること、地域について魅力があることが見受けられる。

設問3 三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは地域や社会の一員であると感じましたか？

1 (30%) 2 7名(23%) 3 6名(20%) 4 8名(27%) 複数選択1名

地域社会の一員という意味は理解が難しかったところが反映している。「他の人に伝えると地域の中に生きている」、「津市に住んでいる」、「新聞に載っていることで新聞と自分のかわりを知れるなどの理由がある。」等と感じていることを書いている児童が一方で、「まだ小学生で社会の事を考えていない」、「まだ大人になっていない」と回答している。社会や地域の一人だという市民性の意識が薄く、これが続くことで地域との隔たりが予想され本実践を通し地域とのかかわりを考える必要がある。

設問4 三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは社会の為に何か役に立てるといいなと思いませんか？

1 7名(22%) 2 7名(22%) 3 7名(22%) 4 10名(32%)

1・2と回答した理由として「ほんの一部の出来事でも載っている」、「みんなを喜ばしいから」、「みんないい人だし景色もいいしいところが多い」「色々知っているから」「少数で新聞づくりを頑張っているから」と回答している。ふるさと新聞の人達が頑張っている様子から自分たちも社会の役に立つことができるのではと感じている様子が見受けられる。

「まだわからない」「新聞を学習しても役立つとは思わない」等と回答している。3・4と回答した児童が多い。日常生活と社会の学習との繋がりを見つけれられてない児童が多い。社会の役に立ったと感じられた経験もほとんどない。何が役に立ったかもわからないという子どもの実態がある。今回の実践を通して実感を持たせないと子どもたちの気持ちは変わらない。

設問5 あなたが社会の為に役に立ったと感じた時はどんな時ですか？

複数回答可の設問

|                |     |
|----------------|-----|
| 1 困っている人を助けた時  | 11名 |
| 2 地域の人から褒められた時 | 6名  |

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 3 地域の人と一緒に何かがしたとき | 11名 |
| 4 地域のイベントに参加した時   | 3名  |
| 5 作ったポスターが街に貼られた時 | 2名  |
| 6 ボランティアを行った時     | 11名 |
| 7 その他             | 2名  |
| 未回答               | 1名  |

・1「困っている人を助けた時」、3「地域の人と一緒に何かがしたとき」、6「ボランティアを行った時」の人数が高い。

子どもたちの中では社会の為に役に立つというのがボランティアをする事と考えている児童が多い。新聞を作り伝える活動を3の項目が多いことを取り上げ、地域の人とともに行うようにする。地域と協働する社会参加を行う事で社会に役に立ったという経験を持ち認められたと実感させる。

設問6 地域の人（例えば近所の人、地域で働いている人）と一緒に関わりたい、地域の為のイベントを行いたいと思いますか？

1 9名(29%) 2 7名(22%) 3 6名(19%) 4 8名(26%) 未回答 11名(6%)

1・2の理由としては「友達に参加している」、「人と人がつながれるから」、「自分が頑張れば皆が頑張れたらうれしいから」等の意見がある。これにより、人同士のつながり、みんなで協力して地域社会と関わりたいという意思があることが見受けられる。これを選択した子どもたちはさらに活動していく中で地域や社会にいる人と関わりたいと実感させる必要がある。

3・4の理由としては、「めんどくさい」「嫌なことを誘われると嫌だから」「大変そうだから。でもなんかしたほうが良いと思ったから」これを選択した子どもは、大人と活動すると時間がかかりそう。現実味がなさそうと感じている児童が多い。これは地域の人と関わる経験の不足や地域の人とうまく付き合いができてないことが関係している。良好な関係係を作り、地域の人と関わり特に大人と関わりながら行動することで変わることができる実感させる。

#### 【事後の結果と分析】

事後では、項目を追加して、実際に行った行動や今後の社会参加についての質問項目として入れた。そして、まちづくり学習という主体性からの子どもたちから捉えさせようとした。5設問目の社会的有用感に関わる設問では、社会的有用感が高まったと考える児童が、50%前後である。すべての児童は社会的有用感が高まった実感を持つことは、難しいところはある。そして、あくまで本学習が1回のきっかけに過ぎないため、これらから様々な社会との関わり、社会参加を促していく必要がある。

8設問目のまちづくりに関わられたと考える児童は、①②に回答した全体の70%に上っている。そのことから自分たちは、まちづくりに関わられたと感じる人が多いと感じる。

|                                                      |    |      |                                                      |    |     |               |
|------------------------------------------------------|----|------|------------------------------------------------------|----|-----|---------------|
| <b>1三重ふるさと新聞の学習を通して、地域には魅力があると思いましたか</b>             |    |      | <b>6あなたが社会の為に役に立ったと感じた時はどんな時ですか？<br/>(複数回答可能)</b>    |    |     |               |
| 選択肢                                                  | 人数 | 割合   | 選択肢                                                  | 人数 | 選択肢 | 人数            |
| ①思う                                                  | 16 | 52%  | ①                                                    | 15 |     | 3(ゴミ拾い)、あまりない |
| ②少し思う                                                | 14 | 45%  | ②                                                    | 13 |     |               |
| ③あまり思わない                                             | 1  | 3%   | ③                                                    | 12 | (7) |               |
| ④思わない                                                | 0  | 0%   | ④                                                    | 8  |     |               |
| 合計                                                   | 31 | 100% | ⑤                                                    | 6  |     |               |
|                                                      |    |      | ⑥                                                    | 12 |     |               |
| <b>2三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは地域や社会の中の一員であると感じましたか？</b>    |    |      | <b>7三重ふるさと新聞の人と関わってみて、地域の人とかかわる事についてどのように感じましたか？</b> |    |     |               |
| 選択肢                                                  | 人数 | 割合   | 選択肢                                                  | 人数 | 選択肢 |               |
| ①感じる                                                 | 6  | 19%  | ①積極的に関わってみたい                                         | 11 |     | 35%           |
| ②少し感じる                                               | 13 | 42%  | ②少し関わってみたい                                           | 15 |     | 48%           |
| ③あまり感じなかった                                           | 8  | 26%  | ③少し面倒だった                                             | 5  |     | 16%           |
| ④感じなかった                                              | 4  | 13%  | ④面倒だった                                               | 0  |     | 0%            |
| 合計                                                   | 31 | 100% | 合計                                                   | 31 |     | 100%          |
| <b>3. 三重ふるさと新聞の記事作りを通して、あなたは社会の役に立てたと感じましたか？</b>     |    |      | <b>8三重ふるさと新聞の学習を通して、大門のまちづくりに自分は関わられたと思いますか。</b>     |    |     |               |
| 選択肢                                                  | 人数 | 割合   | 選択肢                                                  | 人数 | 割合  |               |
| ①感じた                                                 | 3  | 10%  | ①思う                                                  | 5  |     | 16%           |
| ②少し感じた                                               | 19 | 61%  | ②少し思う                                                | 17 |     | 55%           |
| ③あまり感じなかった                                           | 7  | 23%  | ③あまり思わない                                             | 7  |     | 23%           |
| ④感じなかった                                              | 2  | 6%   | ④思わない                                                | 2  |     | 6%            |
| 合計                                                   | 31 | 100% | 合計                                                   | 31 |     | 100%          |
| <b>4.三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは社会のために役に立てるといいなと感じましたか？</b> |    |      |                                                      |    |     |               |
| 選択肢                                                  | 人数 | 割合   |                                                      |    |     |               |
| ①生まれた                                                | 7  | 23%  |                                                      |    |     |               |
| ②少し生まれなかった                                           | 16 | 52%  |                                                      |    |     |               |
| ③あまり感じなかった                                           | 8  | 26%  |                                                      |    |     |               |
| ④感じなかった                                              | 0  | 0%   |                                                      |    |     |               |
| 合計                                                   | 31 | 100% |                                                      |    |     |               |
| <b>5、三重ふるさと新聞の学習を通して、社会の人に認められたと感じましたか？</b>          |    |      |                                                      |    |     |               |
| 選択肢                                                  | 人数 | 割合   |                                                      |    |     |               |
| ①感じた                                                 | 3  | 10%  |                                                      |    |     |               |
| ②少し感じた                                               | 13 | 42%  |                                                      |    |     |               |
| ③あまり感じなかった                                           | 8  | 26%  |                                                      |    |     |               |
| ④感じなかった                                              | 6  | 19%  |                                                      |    |     |               |
| ⑤その他(分からない)                                          | 1  | 3%   |                                                      |    |     |               |
| 合計                                                   | 31 | 100% |                                                      |    |     |               |

筆者作成

図6-1 事後アンケート集計表

【事前と事後アンケートの比較】

社会的有用感と地域協働型社会参加に関する項目を抽出し、比較・検討を行う。

| 三重ふるさと新聞の学習を通して、地域には魅力があると思いますか？ |      |      |        |      |            |      |         |     |     |       |    |
|----------------------------------|------|------|--------|------|------------|------|---------|-----|-----|-------|----|
|                                  | ①思った | ①割合  | ②少し思った | ②割合  | ③あまり感じなかった | ③割合  | ④感じなかった | ④割合 | 未回答 | 未回答割合 | 合計 |
| 事前                               | 14   | 13%  | 10     | 32%  | 4          | 13%  | 2       | 6%  | 1   | 3%    | 31 |
| 事後                               | 16   | 52%  | 14     | 45%  | 1          | 3%   | 0       | 0%  | 0   | 0%    | 31 |
| 増減率                              | 2人+  | 39%+ | 4人+    | 13%+ | 3人-        | 10%- | 2人-     | 6%- | 1人- | 3%-   | 0  |

| 三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは地域や社会の一員であると感じましたか？（複数回答がある） |      |      |        |      |            |     |         |      |      |        |     |
|--------------------------------------------------|------|------|--------|------|------------|-----|---------|------|------|--------|-----|
|                                                  | ①感じた | ①割合  | ②少し感じた | ②割合  | ③あまり感じなかった | ③割合 | ④感じなかった | ④割合  | 複数回答 | 複数回答割合 | 合計  |
| 事前                                               | 9    | 30%  | 7      | 23%  | 6          | 20% | 8       | 27%  | 1    | 0%     | 30名 |
| 事後                                               | 6    | 19%  | 13     | 42%  | 8          | 26% | 4       | 13%  | 0    | 0%     | 31名 |
| 増減率                                              | 3-   | 11%- | 6+     | 19%+ | 2+         | 6%+ | 4-      | 16%- | 1-   |        | 1+  |

| あなたは社会の役に立てたらいいなと感じましたか？。四捨五入して計算した |      |     |        |      |            |     |         |      |      |        |     |
|-------------------------------------|------|-----|--------|------|------------|-----|---------|------|------|--------|-----|
|                                     | ①感じた | ①割合 | ②少し感じた | ②割合  | ③あまり感じなかった | ③割合 | ④感じなかった | ④割合  | 複数回答 | 複数回答割合 | 合計  |
| 事前                                  | 7    | 22% | 7      | 22%  | 7          | 22% | 10      | 32%  | 0    | 0%     | 31名 |
| 事後                                  | 7    | 23% | 16     | 52%  | 8          | 26% | 0       | 0%   | 0    | 0%     | 31名 |
| 増減率                                 | 0    | 1   | 9      | 30%+ | 1+         | 4%+ | 10-     | 32%- | 0    | 0%     | 0名  |

| 地域の人（例えば近所の人、地域で働いている人）と一緒にあって関わりたい、地域の為のイベントを行いたいと思いますか？ |              |      |               |      |           |     |          |      |       |         |     |
|-----------------------------------------------------------|--------------|------|---------------|------|-----------|-----|----------|------|-------|---------|-----|
|                                                           | ①積極的に関わってみたい | ①割合  | ②少し関わってみたいと思う | ②割合  | ③少し面倒さかった | ③割合 | ④面倒くさかった | ④割合  | 数、未回答 | 数、未回答割合 | 合計  |
| 事前                                                        | 9            | 29%  | 6             | 19%  | 6         | 19% | 8        | 26%  | 2     | 6%      | 31名 |
| 事後                                                        | 11           | 35%  | 15            | 48%  | 6         | 16% | 0        | 0%   | 0     | 0%      | 31名 |
| 増減率                                                       | 2+           | 14%+ | 9+            | 28%+ | 0         | 3%+ | 8-       | 26%- | 2-    | 6%-     | 0名  |

| あなたが社会の為に役に立ったと感じた時は、どんな時ですか？（複数回答可能な為）、合計は記載しない |              |                |                 |                |                  |              |      |     |  |  |  |
|--------------------------------------------------|--------------|----------------|-----------------|----------------|------------------|--------------|------|-----|--|--|--|
|                                                  | ①困っている人を助けた時 | ②地域の人から褒められたとき | ③地域の人と一緒に何かをした時 | ④地域のイベントに参加した時 | ⑤作ったポスターが街に貼られた時 | ⑥ボランティアを行った時 | ⑦その他 | 未回答 |  |  |  |
| 事前                                               | 11           | 6              | 11              | 3              | 3                | 2            | 11   | 2   |  |  |  |
| 事後                                               | 15           | 13             | 12              | 8              | 6                | 12           | 3    | 0   |  |  |  |
| 増減率                                              | 4+           | 7+             | 1+              | 5+             | 3+               | 10+          | 8-   | 2-  |  |  |  |

筆者作成

図6-2 事前アンケートと事後アンケートの比較

三重ふるさと新聞の学習を通して、地域や社会の一員と自覚したかという質問である。



①の割合が11%②の割合が19%、③が6%増加と言った状況である。

よって、①が増えたというわけではない。しかし、地域や社会の一員として、感じるには、全てにおいて、地域や社会の一員と考えるのは、難しい。そして、本学習で扱った地域と児童が通う地域とが一致しない場合があり得るため、②③が増加していると考えられる。(国立小学校の為、通学が広範囲にわたるため。)可能性が高い。継続的に地域に関するまちづくり学習をしていくことにより、本項目は、高まる可能性が高い。また、児童の中には、「何をもって地域や社会の一員」と感じるのかを疑問視している児童がいた。これは、筆者の反省点でもあるが教師が事前に説明しておく必要もしくは、児童達が話し合いや調べ学習を通じて考えていく必要がある。また、児童にとって、どの段階になったら地域や社会の一員となれているかというのは個人の感情によって変化してくるため、本設問における回答も回答者の感情により変化してくると考えられる。

あなたは社会の役に立てたらいいなと感じたかという質問である。本質問では、

①②の人数が23人で、②の割合が30%+となっている。感じなかったと言う人が10人減り、32%減少している。役に立つという事で自己有用性を図る質問である。(本質問で社会にも役に立ちたいと考えている児童もいる。)事前では、社会の役に立つという言葉が理解しにくい為、社会の役に立てたらいいなという事で本質問が作成されている。約8割以上が本質問に対して、①②に回答していることになる。自分がどのように役に立てるか、役に立つことができるかというのは、理解できていない、考えられていない児童もいるかもしれないことが予想されるが、何かは役に立つことができるのではないかと考えている。そして、全体の2割程度は役に立てるといいなと思っているという事から自己有用感が増していることが分かる。また、①を選択した回答者は、筆者が指摘する社会的有用感を持っている可能性が高い。(事後アンケート5設問と通じる。)

地域の人と一緒にあって関わりたい、地域の為のイベントを行いたいという地域協働型社会参加に関しての変化を見る質問である。この特徴は④については、「めんどくさい」と考えている人が、事前では8人ほどいたが、0人に減っている。また、①の割合が、14%増加、②の割合が、28%増加している。何か行事や活動に参加してみたい。もしくは、地域の人と何かしてみたいと考える子どもが増加したことが予想される。①も11人いる事からクラスの3分の1の児童は、具体性を持ち、このような事をしていきたいと目標や意識を持っている児童がいる事が予想される。

あなたが社会の為に役に立ったと感じる時は、どんな時かという設問であるが、これは複数回答可能の為、割合比較等は難しい。②については、社会的有用感に関わる「褒められる」という経験である。「褒められる」「認められる」という経験は、本実践を行う事で、高まった可能性が高い。③は、変化がないが高いのは、地域の人と一緒にやる事=社会の役に立つのだというのを道徳、社会科で学習し普段の生活の中から考えている場合がある。

## 第2節 社会的有用感を高める社会科まちづくり学習の授業分析

### 【社会的有用感を高めていくことができた】

本実践では社会的有用感を高めるために行ってきた。社会的有用感を高めるためにアンケートを2次終了時と3次終了時で実施して変化を比較・検討した。

授業の子どもたちの声でも変化を見る事ができる。2次では、三重ふるさと新聞は「笑顔になれる新聞」という具体性が薄い回答が多くみられた。しかし、新聞を作っていく中では、「新聞を通して地域を盛り上げないと」「大門に人が集まるようにしたい」という共通認識が芽生えてきていたように感じる。

タイトルや新聞を考えているときには、「読者の人に知ってもらいたい来てもらいたい」という思いから作っている姿が見受けられた。

自分たちの記事が社会に出たことで社会的有用感は高まったのではないかと考えられる。



**大門を元気に**

津市大門商店街に、使われている。また、津市の時に津市が建てた「津センターバス」も休んでしまっている。お掃除やお手洗いを「お掃除機」でお手洗いを開放している。

津センターバスは、津市公共施設津市真ん中では、職員や職員が、お掃除機や掃除機を開放している。

津市公共施設津市真ん中では、職員や職員が、お掃除機や掃除機を開放している。



**子どもが老人まで気楽に来れる場所を**

津市公共施設津市真ん中では、職員や職員が、お掃除機や掃除機を開放している。

津市公共施設津市真ん中では、職員や職員が、お掃除機や掃除機を開放している。



**受け継がれてきた七夕まつり**

大勢の人で賑わう七夕まつり

大勢の人で賑わう七夕まつり

大勢の人で賑わう七夕まつり



**新しい平治煎餅へ**

平治煎餅本店

平治煎餅本店

平治煎餅本店



**津市公共施設津市真ん中**

津市公共施設津市真ん中

津市公共施設津市真ん中



**津市公共施設津市真ん中**

津市公共施設津市真ん中

津市公共施設津市真ん中

12月12日記事

1月9日記事





1月31日記事



2月25日記事

【子どもの疑問，主体性<sup>2)</sup>から授業し追究することができた。】

筆者の授業は，基本的には子どもの疑問，発問から始めるようにしていた。社会的有用感を高めるために，筆者は以下の事を行った。

手立て1 新聞記事には，感想を学校まで電話が来るようにした。

子どもたちは学校に電話が来るのか楽しみにしている姿が見受けられた。「感想来てないかな」って連絡が来るのを待つ姿が見受けられた。

手立て2 新聞記事を見てもらうイベントを行った。



写真 café ほのぼーの イベント掲載時の写真

12月22日「café ほのぼーの」と言う津市中心部活性化事業に参加して，子どもたちが書いた記事の展示を行った。展示では，ただ単純に記事を貼るのではなく，マップのように大門商店街，丸の内商店街が分かり易く貼るようにした。

イベントでは，感想を書いてもらえるようにして子どもたちの活動が社会の役に立っているのだという実感を持た

せるようにした。イベント会場では、11名に感想をいただき。後日学校で紹介をした。感想には、「新聞を見て元気が出ました。」「記事を作ってくれた皆さんの将来に期待します。」「若い力で津を盛り上げてください。次号にも期待します」等と書かれており、ここからは社会にこの記事が認められたと感じたのではないかと考察する

児童の一人も本イベントを見に来ていた。これは社会的有用感の高まりといえる。

手立て3 学校の事務室前に貼ることにした。

学校の職員玄関は、小学校教員事務職員、学校への業者来校、保護者、他校の教員などたくさんの人に見てもらえると考えて教頭先生（田中基之教頭）が掲示して下さった。

学校の先生からは、「5Aの子たち新聞作ったんや、しかも取材に行ったんや。」などとほめてくれる声もあったようである。

#### 【ふるさと新聞社との地域協働型社会参加を行う事ができた】

今回は、メディアの単元として「新聞」を取り上げ、三重ふるさと新聞社と協働で授業実践を行った。ゲストティーチャーとして森社長には、4時間（2時間×2回）の授業来校、ふるさと新聞社には、2時間の新聞社の見学（見学時の説明）をお願いした。新聞社の方には授業以外では、取材先（大門商店街）へのアドバイス、記事の内容をチェックしてレイアウトして、記事として筆者と再チェックしてから掲載する流れを行った。また、本記事では、子どもの意に添うように平仮名とかはそのままで掲載した。掲載した記事を筆者は、記事が掲載された日の朝の会で毎回配布した。

筆者は、社長との10回以上の直接打ち合わせと社長・担任の先生とのこまめな電話連絡をしながら行った。

子どもと新聞社の関わりの面では間接的なかかわりと直接的なかかわりである。

間接的な関わりとしては、授業でふるさと新聞を取り上げる、教師がインタビューや電話で聞いてきたことを授業で発問や話で伝える、ふるさと新聞記事を配布しどんな記事が書いてあるかを読み取る。ふるさと新聞社から記事を掲載して新聞として発行する。

直接的な関わりとしては、ふるさと新聞社への記事の提案をする。ふるさと新聞社の森社長から講演をしていただく、その時に取材の仕方記事の各コツを教えて頂く。ふるさと新聞の見学をする。「地域づくりの応援団」という新聞社の社是を前提にふるさと新聞の記事を書く。子どもたちが書いた記事について直接アドバイスを頂きそこから修正する。レイアウト図を参考にレイアウトして頂く。三重ふるさと新聞社へ載せて頂く。

これを見ても、子どもたちがただ単に取材し記事にまとめたのではない。しかも、子どもたちは森社長のアドバイスを基に記者目線で物事を考える事ができてきたのではないかと感じる。このように子どもたちは、ふるさと新聞を学ぶという事言う社会認識をする部分から社会参加という部分まで地域の人と協働しながら行う事ができたと考える。授業後振り返りや授業中に出てきた疑問を取り上げる事で子どもがなぜ、どうして疑問を持ちながら考えながら行う事ができた。

2次で新聞の魅力として「地域の事が載っている」と子どもの一人が挙げていた。そこから、三重県にはたくさんの地域新聞があることを発表している姿が見受けられた。そして子どもが「木曜日にふるさと新聞っていうのが入っていた」と挙げてじゃあそれについて調べていこうとなり追究していくことにした。

本実践が実現したのも、子どもたちの多くが新聞記事を見ていた時に「子どもに分かり易い記事がほしい」「難しい感じが多すぎて自分たちでは読めない」と言っていたことから始まり、新聞社への提案、そして、2次後アンケートを取ると子どもたちには「自分たちが記事を書くことで読者を幸せにしたい、笑顔にしたい」という意見が多く見受けられた。

新聞記事の各内容は大門商店街と規定した。しかし、大門商店街のどこを調べたいかについては、自由とした。これは、個一人一人の意見で授業を進めていくうえで重要であるからだ。そして、男女とかは関係なく子ども一人一人の意見で班分けをした。子どもたちは取材に行く前から事前に一人取材に行ったり、写真を撮りに行ったり、タブレットで見学地の情報を集めたりしていた。

取材地では、事前に考えた5つの質問だけでなく、沢山の質問をして情報を得ている姿が見受けられた。その後、記事を書くとなっても、取材後記事を書くのに再度取材に行ったり、記事を書いたり社長さんにアドバイスをもらいさらにタブレットや電話などを使いしらべている子どもも多く見受けられた。

記事を書くときは、この記事にこの見出しはあっているのだろうか、この文章は読者にとって伝わりやすいか、それによって「地域を盛り上げる事」に繋がっていくことにつながるのだろうかを考えていた。

タイトルについては、2時間を使って考えた。取材した大門商店街の人に「大門を元気に」というタイトルではいけないのではないかと。英文字では、読めない読者もいるのではないかなどを話し合いながら3つに絞って最後に「大門を元気に」に絞った。

本実践は、一人一人が追究し続けた結果であると言える。教師は、机間指導して助言等をしているが、決して介入していない。このことから、子どもを据えた授業なのではないかと感じた。

#### 【情報単元としての本実践について】

唐木清志（2010）による日本型サービス・ラーニングの先行実践からもわかるようにゴミの実践によるまちづくり学習や政治学習としてのまちづくり学習は多くある。しかし、5年生は地域教材を扱う事はあるがまちづくり学習として長期間単元として行う事は少ないのが現状である。

また、子どもたちにとってのメディアの意識は近年情報化が進んでいるため変わってきている。新聞やテレビ、ラジオなどを主の情報源としていない現状子どもとどのように事象と関わらせていくかが重要となる。特に新聞に着目させる場合、子どものより身近である地域新聞を取り上げる事に意義がある。また、新聞については、前述した国語と絡めて

実践が可能であることを言及する。

また、情報産業は迅速に取材し記事に書くもしくはテレビ・ラジオで報道するという行動をしている為、なかなか協働してまちづくり学習を行うのは難しい事がある。教師と子どもが、如何に 社会参加する会社と協働して行うのが重要となってくる。

#### 【筆者が定義するまちづくり学習との関連】

筆者は、筆者が考えるまちづくり学習の視点と定義づけを行った。それに合わせ、4つの視点を取り入れた授業づくりを心掛けるようにした。地域の人と協働、する、住民の視点をインタビューや調べ学習から深める。地域の物的資源・人的資源を活用するなどである。筆者は、「地域の未来を創る行動力を養う学習」と定義している。社会的有用感との関連として、ただ役に立ったと認められてこれからの自分が変わっていく必要がある。

「あー良かった。」で終わらせてはいけない。それから地域の未来を切り開こうとしていく必要がありその一端をまちづくり学習が担う必要があるのではないかと思うようになったのではないかと考える。

#### 【社会的有用感との関連】

事前と事後のアンケート、事後のアンケートを比較・分析しても、全ての子どもが全ての子どもが①の「認められた」や「役に立った」と感じたとは感じる事ができなかった。社会的有用感はその感情であるため、個人差があることは、致し方ない部分はある。しかし、④に回答した人数は減ったものの③に回答した人数がいる事を考えると。「役に立ちたい」「認められたと実感した」児童は、この後にどのように変容していくのかについては、まだまだ今後の変容を見ていく必要がある。そして、今回1回の実践だけでなく、まわりに関わったり地域の人と普段から話したりする児童とそうでない児童の普段の生活なども本学習の有用感の高まりなどにもつながって来ているようなことも考えられる。しかし、③から②への変更が大きく見られた事から考えると本実践により社会に「新聞」というものを出すことで実感が湧いたし、他者からのコメントなどから考えた児童も多かったことは指摘できる。

#### 【子ども全員が本授業を主体的に探究しながら取り組むことができていたか】

本授業実践は、授業内容としての記事の作成や大見出しが作れていなかったため、何回か当日社会科の授業内容を変更し、新聞の授業実践を行う事が何時間もあつた為、子どもが新聞学習をやろうという気分になっていたのか疑問である。一部の子どもからは、「私は、新聞の方が好き」と言っている子どももいたが、一方では、「自動車やりたかったのに」と言っている子どももいて、子どもが新聞学習に意欲的に活動出来ていたのかは疑問が残る部分もある。

新聞を取材後、1人で記事を書いてきた後では、班での記事作業になった。班での記事作りの為、記事を書く子たちと文章を見直しする子ども、写真を選んだりしている子どもに分かれている子どもといたしましたが、配慮が必要な子どもなどで話についていけない子どもや、本学習に積極的でない子ども、つまらなくなりICT機器等で遊んでしまう子ども

がいた。すべての子どもに役割を与えるという事を取材以降も与えておくよかったのかもしれないと感じた。それによって、行っている事から実感という部分につながったのではないかと考えた。

本授業実践でも、大門商店街の中で店と限定し、あらかじめ教師が班を設定している。また、何人かの意見やノートを取り上げて授業を行っているが、全員の自分が調べたいことを追究しまとめ、記事に書いていくスタイルを取るのが理想である。しかし、時間数の問題と子どもたちがすべてバラバラでは統一したものをまとめる限界性等の問題が有り、一定の基準の中でのどのように探究させ、「深い学び」へとつなげていくかが大切である。

#### 【協働する会社・事業との連携】

地域と協働するには何回も挫折があった。その例としては、取材先を予定していた和菓子店には、学校の都合と合わず断念してしまう事にもなった。新聞社が指定した原稿文字数もギリギリまで分からなくて授業内容が変更せざるを得ないこともあった。

文部科学省は<sup>1)</sup>、ゲストティーチャーの活用や地域と協働する「コミュニティー・スクール」の推進を進めている。しかし、どのように協働し、どのようにゲストティーチャーを活用しながら授業を進めていくかというマニュアルは存在しない。担任などの教師（又は専科教員）が、地域にある協働できる会社や事業・店などどのようにすれば協働できるかを考えながら単元構成を考え、提案し承諾するしか方法がない。今回の事例は、偶然子どもたちの思いが協働する会社に伝わり実現したが、必ずしもこのように上手く行くわけではない。協働しようと思っても、子どもが学習に意欲があるべきであるし、地域の人も自分たちも学校の授業や行事に関わろうという協力意識がないと始まらない。途中で断られてしまっただけでは協働する実践は進まないからである。

#### 【注】

- 1) 国立教育政策研究所(2019)「学習評価のハンドブック」 p.1-2
- 2) 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」 p.37
- 3) 子どもの疑問を出させて授業を行う。山根栄次（2010）『個を育成する社会科・総合的な学習の時間』より
- 4) ユネスコ『子どもの権利条約』については、以下を参照。

[https://www.unicef.or.jp/about\\_unicef/about\\_rig\\_all.html](https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig_all.html)

## 終章 成果と課題

### 第1節 成果

本研究の成果は次の6点である。

第一に、心理学に基づいた社会的有用感とは何かを正確に明示したことである。学習心理学に基づき自己肯定感、自己効力感・自己有用性から社会的有用感へのつながりを示したことである。唐木などは、社会的有用感を高める重要性は示していたが、つながりがどのようになるかまでは示していなかった。現在の子どもたちの状況から社会的有用感を高める必然性を述べた。そして、社会参加を行う事により、社会的有用感が育まれることを心理学の調査分析から実証検証したことである。

第二に、社会的有用感を高める学習内容としてまちづくり学習の定義を行った。社会的有用感を社会科で高めていくにはまちづくり学習であると考えられる。先行実践の論文・参考文献、教科書、学習指導要領を分析する。その上で、社会科まちづくり学習の視点を設定する。まちづくり、まちの捉え方、まちづくり学習の視点から、社会科まちづくり学習を定義した。

第三に、社会的有用感を高める地域協働型社会参加の段階表を作成し、段階表に従った地域協働型社会参加を模式化することにより地域協働型社会参加に従った地域協働型社会参加を行う。参加・参画には、直接的な社会参加・間接的社会参加などより細かく社会参加の方法が存在する。その中でも、地域協働型社会参加が社会的有用感を高める方法として使用する。参画には段階や視点をを用いる必要が有るとして、ロジャー・ハートの参画のはしご、メアリー・ジョンの参加の橋づくりなどから地域協働型社会参加に関わる段階表を作成した。そこには、地域の人と一緒にって関わると言った部分に着目して段階表を作成した。

第四に、海外の本研究、総合的な学習の時間に関わる教育、日本型サービス・ラーニングを示唆した事にある。海外のアメリカでのサービス・ラーニングでは社会的有用感が高まりやすいと感じ、日本でも同じように社会的有用感を高められる小学校社会科まちづくり学習が出来ないかを考え地域協働型社会参加が必要であると授業を構想したことにある。

第五に、まちづくり学習のフレームワーク及び学習論を作成したことである。まちづくり学習の領域を設定し、(スコープ)、小学校中学年高学年のまちづくり学習の流れをシークエンスで作り、まちづくり学習のフレームワークを設定した。また、まちづくり学習論では、本まちづくり学習の目的・内容・方法に分けてまちづくり学習論を述べた。

第六に、授業実践提案し、評価規準、アンケート(質問紙調査)・ルーブリック評価を用いて社会的有用感の高まり変化を明らかにする。小学校5年生情報メディアの単元でのまちづくり学習における授業実践を行った。具体的には、単元名を「5Aのみんなで地域の魅力を発信!ふるさと新聞」として、地域新聞である「三重ふるさと新聞」の記事内容調べ、取材、記事作成を通じ、子どもたちのまちづくり学習を地域協働型社会参加の方法(低段階から高次段階へ向けて)を用いて授業実践を用いて行い、地域協働型社会参加を行う前と行う後で社会的有用感の変化にどのように変わったのかの変化を分析し明らかにした。



## 第2節 今後の課題

本研究の今後の課題であるが、以下の通りである。第一に、未来志向を持たせた授業を行っていく必要がある。社会参加することにより、地域の人と関わることで、未来につながっていくことも指摘しておく必要がある。峯明秀(2020)が指摘しているが、「よりより未来」または「未来を見据えて」現在の社会問題について考えるべきであると指摘している。現在の社会問題について扱うだけでなく5年・10年した後、「このまちはどうなっているのだろうか。」「この車は、どのようにかわっていくのだろうか」といった課題は、まちづくり学習の中で押さえておくべき課題であると考えられる。また、先述したプログラミング的思考を促すプログラミング教育ともつながっていくであろう。20年後・30年後に向けて見据えていくべきである。第二に、社会参加の方法が果たして社会的有用感につながるのかといったことである。現在、コロナウイルスなどの感染症が相次ぎ日本そして世界全体で騒がれている。筆者は社会的有用感につながる、直接的な社会参加の中の地域協働型社会参加が有効な手段であると述べた。しかし、現状、コロナウイルスが蔓延しており、地域の人と協働するのも難しいこともある。ICTでリモートをつないで意見を聞きながら社会参加を進めるなど、社会参加も新たな形を模索する必要があるのではないか。第三に、小学校3・4年生における地域学習や歴史・政治学習でも見ていく必要が有ると思われる。第4章でのフレームワークを作成したため、筆者が実践した小学校5年生産業学習の情報単元以外の単元では、どのように授業が実践できるか具体的に計画を練って実践をしたり、参観したりしながら深めていく必要がある。また、学習指導要領における子どもたちに様々な視点から多角的な「見方・考え方」を身につけさせていく必要がある。

【実験授業に関わる資料】  
 授業で使用したワークシート、アンケート原案などを掲載する。



## 夏休みの宿題

5年A組\_番名前\_\_\_\_\_

増田直史です。5年A組のみんなには、宿題もやってきてほしいと思います。

しめ切りは9月2日宿題集めのときに中村先生に提出してください。宿題は、裏面に書いてあるので読んで夏休みに調べて書いて下さい。表にふるさと新聞の社是（社内の目標）とふるさと新聞はどんな方針で書いているか、大門商店街の資料としてのせてあります。授業の時に書いた社会ノート、マイノートを参考に作ってください。

三重ふるさと新聞の社内の目標

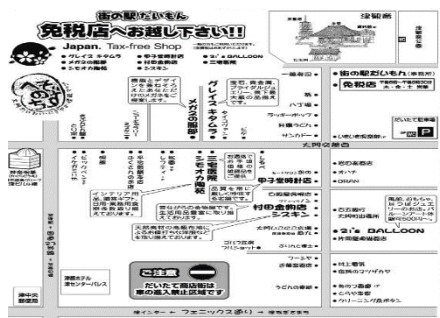
### 地域づくり・街づくりの応援団

三重ふるさと新聞の会社の方針（ばっすい版）

- (1) 地域の将来に関わる地域づくり・街づくりに関する事象を積極的に採り上げる。
- (2) 郷土のアイデンティティ（地域の思い）を高めるため、郷土史並びに郷土文化（地域の歴史や文化）に関わる事象を積極的に採りあげる。
- (3) 環境・福祉・教育・芸術文化展・スポーツ・青少年健全育成（小学生や中学生）など、よりよい地域社会を求める市民活動を積極的に採り上げる。（祭りなども含みます）
- (4) 地場産業・地域商業者（地域で働いている人）の動きを積極的に採り上げ、また気軽に使える広告媒体として、地域経済発展に寄与（こうけん）する。
- (5) 大手日刊紙が採り上げないニュース、我々にとって価値あるニュースである。

※小学校5年生にむずかしいと思う漢字の意味には（ ）で説明を書いています。

大門商店街：日本3大観音の街の一つで、津におけるにぎわっている街で、商店街の中には多数の飲食店、雑貨店等が立ち並んでいます。夏には夜店をやっており、フリーマーケットなどをやって商店街を盛り上げていこうとしています。



◎三重ふるさと新聞の人と記事にします。大門商店街のどんな事  
(祭り, 店, 昔からある歴史, 津観音等) を取材して記事に書きたい  
ですか? ふるさと新聞の目標にもある地域を盛り上げるという事  
を考えながら調べて書いて下さい。

取材したい場所:

その理由とどんなことを書きたいか:

※調べる時に実際に行って調べてもいいですが, 電話などをしてから行って下さい。  
楽しい夏休みを過ごしてください。



(裏)

取材するときの質問を考えよう！！

自分の班の記事を書く店やイベント施設：  
どんなことを書くか：

<宿題> 次の授業の時に取材の時の質問を皆で考えようと思っています！！ 次の授業までに2個以上考えてきてください！！

※ふるさと新聞の記事を書くという事を考えて取材の質問を考えましょう！！

<質問したいこと>

① \_\_\_\_\_

② \_\_\_\_\_

○班で参考になった質問

- ・(     さんの)
- ・(     さんの)
- ・(     さんの)

☆班で聞く質問

① \_\_\_\_\_

② \_\_\_\_\_

③ \_\_\_\_\_

④ \_\_\_\_\_

⑤ \_\_\_\_\_

◎班での役割

班長：

カメラ役：

# 取材シート・メモ用紙



5年A組\_\_番 名前\_\_\_\_\_

◎取材するときの紙とメモ用紙として使います！！表には、取材の流れが書いてあります。班で決めた質問はもちろん、聞きながらもっと聞きたくなった事も是非聞いて聞いた質問と答え、ふるさと新聞を見学して気づいたことなどをメモしておきましょう！写真なども撮影しておきましょう！

☆取材するときの注意点

- ①取材先には迷惑や邪魔にならないように取材をする！
- ②取材先は仕事をやられているので、時間を守りましょう！
- ③あいさつなどはきちんとして行いましょう！

## ◎取材の流れ

- 9時30分附属小学校中央玄関集合
- 9時40分津観音到着
- 移動

(前半取材班) はちみつまんじゅう, 平治煎餅

- 9時45分から10時25分 (45分)
- 移動と休憩 (10分)
- 10時35分から11時5分 (30分) ふるさと新聞社見学
- 移動
- 津観音 11時10分

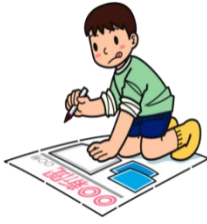
(後半取材班) 丸の内商店街, センターパレス, 駅の駅大門  
9時45分から10時15分 (30分) 新聞社見学など

- 移動兼休憩 (分)
- 10時20分から11時5分 (40分)
- 11時10分着津観音着
- 11時15分津観音出発
- 11時20分附属小学校到着
- 11時30分授業終わり



|                         |
|-------------------------|
| ◎取材で聞く質問<br>①<br>②<br>③ |
|-------------------------|

|         |
|---------|
| メモ・記録用紙 |
|         |
|         |
|         |
|         |
|         |
|         |
|         |
|         |
|         |



## 記事を作ろう！！

5年A組            番名前

◎取材が終わりました！！これからいよいよ記事を作っていきます。まずは取材したことをしっかりまとめてみましょう。レイアウトと記事を書いていきましょう。

<取材したことのまとめ>

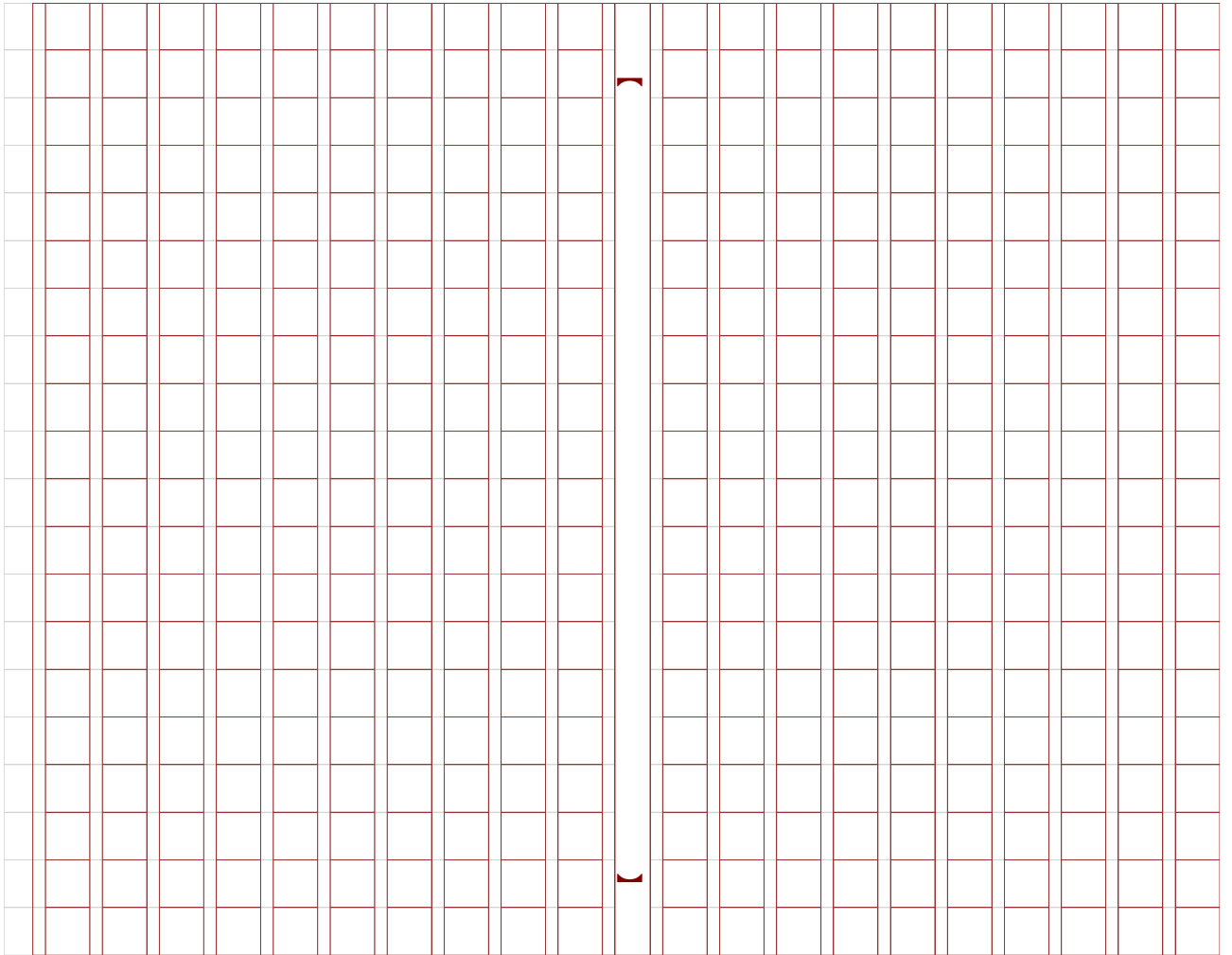
取材したことの中で記事に書きたいことをまとめていきましょう！

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |

<レイアウト図>

|                                               |  |                                               |  |
|-----------------------------------------------|--|-----------------------------------------------|--|
| <table border="1"><tr><td> </td></tr></table> |  | <table border="1"><tr><td> </td></tr></table> |  |
|                                               |  |                                               |  |
|                                               |  |                                               |  |





<班で見合ってみましょう！！>

○皆に共通している所は何だろう？絶対必要な部分は何だろう？を考えてみましょう！！

⇒班で記事を作っていこう！！班1枚の原稿用紙に書きましょう！

<タイトルはなにがいいでしょうか>自分が思うものを書いてみましょう！

【事前アンケート案】 三重ふるさと新聞に関するアンケート 1・2・3・5は理由も記入

1. 三重ふるさと新聞の記事を自分たちで記事を作りたいと思いますか？

①から④から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①思う ②少し思う ③あまり思わない ④思わない

2. 三重ふるさと新聞の学習を通して、地いきには魅力があると思いませんか？

①から④から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①思う ②少し思う ③あまり思わない ④思わない

3. 三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは地いきや社会の中の一員であると感じましたか？

①から④から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①感じる ②少し感じる ③あまり感じない ④感じない

4. 三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは社会のために何か役に立てるといいなという気持ちが生まれましたか？

①から④から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①生まれた ②少し生まれた ③あまり生まれなかった ④生まれなかった

5. あなたが社会のために役に立ったと感じたときは、どんな時ですか？

①から⑦から当てはまるもの全てに丸をつけましょう。

- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| ①困っている人を助けた時        | ②地いきの人からほめられた時  |
| ③地いきの人と一緒に何かがした時    | ④地いきのイベントに参加した時 |
| ⑤作ったポスターなどが街に貼られた時  | ⑥ボランティアを行った時    |
| ⑦その他（自分の言葉を入れてください） | _____           |

6. 地いきの人（例えば近所の人、地いきで働いている人）と一緒にあって関わりたい、地域のためのイベントを行いたいと思いますか？

①から④から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

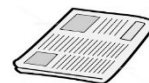
①思う ②少し思う ③あまり思わない ④思わない

【事後アンケート案】

三重ふるさと新聞に関するアンケート

アンケート用紙を書いた日時\_\_月\_\_日

5年A組 番 名前



1. 三重ふるさと新聞の記事を自分たちで作ってみてどのように感じましたか？

下のわくに書いて下さい。

2 三重ふるさと新聞の学習を通して、地域を盛り上げる記事を書くことができたと思いますか。

①から④の中から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①思う②少し思う③少し思わない④思わない

3. 三重ふるさと新聞の学習を通して、地いきには魅力があると思えましたか？

①から④の中から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①思う ②少し思う ③あまり思わない ④思わない

その理由は何ですか？下のわくに書いて下さい。

4. 三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは地いきや社会の中の一員であると感じましたか？

①から④の中から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①感じる ②少し感じる ③あまり感じない ④感じない

その理由は何ですか？下のわくに書いて下さい。

5. 三重ふるさと新聞の記事作りを通して、あなたは社会の役に立てたと感じましたか？

①から④の中から当てはまるものに丸をつけましょう。

①感じた②少し感じた③あまり感じなかった④感じなかった

その理由は何ですか？下のわくに書いて下さい。

6. 三重ふるさと新聞の学習を通して、あなたは社会のために何か役に立てるといいなという気持ちが生まれましたか？

①から④の中から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①生まれた ②少し生まれた ③あまり生まれなかった ④生まれなかった  
その理由は何ですか？下のわくに書いて下さい。

7. 三重ふるさと新聞の学習を通して、社会の人に認められたと感じましたか？

①から④の中から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①感じた②少し感じた③少し感じなかった④感じなかった。

8. あなたが社会のために役に立ったと感じたときは、どんな時ですか？

①から⑦の中から当てはまるもの全てに丸をつけましょう。

①困っている人を助けた時 ②地いきの人からほめられた時  
③地いきの人と一緒に何かがした時 ④地いきのイベントに参加した時  
⑤作ったポスターなどが街に貼られた時 ⑥ボランティアを行った時  
⑦その他（自分の言葉を入れてください） \_\_\_\_\_

9. 三重ふるさと新聞社の人と関わってみて、地域の人とかかわる事についてどのように感じましたか。

①から④の中から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①これからも積極的に関わってみたい②これからも少し関わってみたい③少し面倒だった  
④面倒だった

10. 地域のためのイベントを行いたいと思いますか？

①から④から当てはまるものに1つ丸をつけましょう。

①思う ②少し思う ③あまり思わない ④思わない  
その理由は何ですか？下のわくに書いて下さい。

11. 三重ふるさと新聞の学習や記事作りを行ってみて感じた事や考えたことを書いて下さい。

|  |
|--|
|  |
|  |

協力してくれてありがとうございます。また一緒に勉強したいです。 増田直史

## 【参考文献】

(邦文参考文献)

- 1.安部芳江(2010)「第2章 子ども参加支援理論の国際的展開と課題」『子ども支援学研究的視座』pp.51-65 学文社
- 2.安藤真理(2004)「子供を対象とした『まちづくり学習』の学校教育における展開の可能性に関する計画—横浜市—」実践報告論文集(5)財団法人住宅総合研究財団 pp.64-74
- 3.「本校で考える「学ぶ力」伊那市立伊那小学校『平成29年度伊那小学校研究紀要』総ページ p.32
- 4.井田仁康(2012)「東京の地域と教育」『地域と教育—地域における教育の魅力—』学文社 p.165
- 5.「本校で考える「学ぶ力」伊那市立伊那小学校『平成29年度伊那小学校研究紀要』総ページ p.32
- 6.今谷順重(1991)「新しい問題解決学習における社会科の授業構成」『小学校社会科 新しい問題解決学習の授業展開』ミネルヴァ書房 p.25、p.35
- 7.岩田一彦(1993)「第2章 授業の総合的分析 2 問いと授業」『社会科の授業分析』pp.29-30
- 8.柿沼葉子(2013)柳沼葉子 市川健太 岩倉成志 野中康弘(2013)「日本橋常盤小学校における『まちづくり学習』の授業効果の持続性—授業実施5年後のパネル調査—」土木学会論文集H(教育) vol69,no1, pp.9-20
- 9.唐木清志(2008)「第三章日本型サービス・ラーニングの構想」『子どもの社会参加と社会科教育—日本型サービス・ラーニングの構想—』東洋館出版社 169p.
- 10.唐木清志(2008)「子どもの社会参加と社会科教育の在り方—社会科における知識・技能活用能力の育成—」全国社会科教育学会シンポジウム発表資料
- 11.唐木清志(2010) 藤原 孝章 西村 公孝, 小島 弘道「社会参画と社会」『講座 現代学校教育の高度化 28 社会参画と社会科教育の創造』学文社 pp.7-29
- 12.唐木清志、北俊夫、平田博嗣(2014)「なぜ、社会参画力が強調されるのか」『社会科教育 2014年 10月号』明治図書 p.7
- 13.北山有華(2014)「第1章 社会的包摂/排除と実質的シチズンシップ」『英国のシチズンシップ教育 社会的包摂の試み』216p.
- 14.木下春雄(2003)「第2章 4節 子どもの参画の資質形成を目指したまちづくり学習」『小学校社会科におけるまちづくり学習の授業設計—子どもの参画の資質形成を視点として—』兵庫教育大学学位論文修士論文 pp.65-72
- 15.『子どもの権利条約』ユニセフ  
[https://www.unicef.or.jp/about\\_unicef/about\\_rig\\_all.html](https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig_all.html) 最終閲覧 2020年12月12日
- 16.小西正雄(1994)「提案する社会科の本質」『「提案する社会科」の授業①これが未来志向の“新しい授業観”だ』明治図書 pp.10-15
- 17.櫻井準也(2014)「遺跡まつりと地域アイデンティティ：「芝山はにわ祭」の事例分析から」尚美学園大学総合政策研究紀要 p.14
- 18.「自己有用性」岩手県教育委員会特別支援教育課中学校事例  
<http://www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi/mysite3/pdfki-wa-do/jikoyu-yo-kan.pdf> 2021年1月18日最終閲覧
- 19.静岡県総合教育センター(2019)社会科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業
- 20.環境政策局(平成14年8月)『持続可能な地域づくりのためのガイドブック』  
<http://www.env.go.jp/policy/report/h14-03/>
- 21.シチズンシップ教育ネット <http://www.citizenship.jp/community/> 2020年1月27日最終閲覧
- 22.「小・中学校における政治的教養を育む教育指導事例集小学校 4年」神奈川県教育委員会  
<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/cnt/f537244/sidoujirei29.html> 2020年11月28日最終閲覧
- 23.谷元美結(2018)「地域アイデンティティを育成する中学年社会科のまちづくり学習」卒業論文
- 24.田代高章(1999)「子ども参加における関係性の質的発展について」『岩手大学教育学部研究年報』第59巻第2号 pp.109-118
- 25.中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」 p.37
- 26.坪田亜美(2014)「社会の一員としての意識の育成=迫力ネター一覧」明治図書『社会科教育 2014年10

- 月号』 p.10
- 27.寺本潔(2004)「第1章 いまこそ「まちづくり学習」を」『町おこし総合学習の構想』明治図書 pp.9-14
- 28.寺本潔(2012)「まちづくり学習」『社会科教育辞典』ぎょうせい p.114-115
- 29.土井充子(2009)「地域の期待と社会科地域学習の有効性についての一考察」三重大学教育学部学校教育講座卒業論文 p.156
- 30.永田成文(2013)「地理教育における社会参加」風間書房『市民性を育成する社会科授業の開発』 pp.112-113
- 31.西村公孝(2000)「第9章 発信能力を育成する授業構想」『地球社会時代に「生きる力」を育てる 発信能力を育成する社会系教科・総合的学習の授業構想』黎明書房 pp.184-189
- 32.日本建築学会(2004)「第1章まちづくりを学ぶという事」『まちづくり教科書第6巻まちづくり学習』日本まちづくり学会編 pp.2-11
- 33.橋本康弘(2013)「第4章社会科の方法原理とその評価 社会科における社会参加」『新社会科教育学ハンドブック』社会認識期教育学会 pp.195-203
- 34.平野朝久(2000)「総合学習による教育改革」国語科と総合学習『国語教育』全国大学国語科教育学会
- 35.峯明秀(2020)日本社会科教育学会シンポジウム資料「社会参画の授業に振り返りをどのように位置づけるか」
- 36.峯明秀(2020)峯明秀 唐木清志「「見方・考え方」を鍛える社会科授業デザイン 小学校編」『見方・考え方を鍛える社会科授業デザイン』明治図書 pp.20-34
- 36.村上徹也「ボランティア活動を通して市民を育む米国のトレンド「サービス・ラーニング」日本青年奉仕協会 パワーポイント資料2
- 37.森泉哲(2018)『社会参加はいかに促進されるのか?—個人及び家族要因とウェルビーイングとの関連—』南山大学短期大学部研究紀要 pp.191-201
- 38.文部科学省 国立政策研究所(2017)「「自尊感情」? それとも「自己有用感」?」『生徒指導リリーフ18』生徒指導・進路指導研究センター
- 39.八重樫文(2014)「プロジェクト型で作る参画型学習とは」明治図書『社会科教育 2014年 10月号』 pp.20-21
- 40.柳沼葉子 市川健太 岩倉成志 野中康弘(2013)「日本橋常盤小学校における『まちづくり学習』の授業効果の持続性—授業実施5年後のパネル調査—」土木学会論文集H(教育) vol69,no1, pp.9-20
- 41.山下智也(2009)『子どもの参加論の課題と展望:ロジャー・ハートの「子どもの参画」論を乗り越える』九州大学心理学研究 pp.101-111
- 42.山根栄次(2001)「社会科と「総合的な学習の時間」との連携の可能性」『三重県教育実践総合センター紀要』 pp.9-16 三重大学教育学部
- 43.山根栄次(2015)魚住忠久 山根栄次 深草正博 宮原悟 土屋武志「総合社会科と分化社会科」『21世紀の社会科への招待』 pp.18-27 学術図書出版社
- 44.ロジャー・ハート IPA 日本支部訳(2009)「第1章 3 組織の原則」『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』216p.

(英文参考文献)

- 1.Sally Berman(2015)「clean streets, Green Streets」『Survive Learning』sky horse 社 p.202
- 2.Qamae.C(2018)「What is citizenship Education?—Definition&Types—」  
<https://study.com/academy/lesson/what-is-citizenship-education-definition-types.html>
3. Citizenship Education for the 21st century (2010) ユネスコ  
[http://www.unesco.org/education/tlsf/mods/theme\\_b/interact/mod07task03/appendix.htm](http://www.unesco.org/education/tlsf/mods/theme_b/interact/mod07task03/appendix.htm) 2020年2月1日最終閲覧

あとがき

本研究を進めるにあたって、多くの先生方のご指導を賜った。学位論文の着手から審査に至るまで永田成文先生（三重大学教育学部社会科教育講座）には常に暖かい指導とご助言を賜った。自分の進まない研究に本当にご迷惑をおかけしたこともたくさんあった。また、日頃の学生生活の指導や研究授業、小学校免許取得のための指導など、沢山のことを時に厳しく時にやさしく教えてくださった。感謝の意を表したい。山根栄次先生（三重大学教育学部名誉教授）には、研究のご助言や実践授業の指導案作成提案、実践授業参観などご助言を賜った。感謝の意を表したい。また、大日方 真史先生（三重大学教育学部学校教育講座）には、子ども参加、社会参加、ロジャー・ハートに関わる研究内容のことについて、他領域でありながら、常にご助言やご指導を賜ることができ感謝の意を表したい。また、社会科教育ゼミナールの後輩には、3年間という長くて短いような時間を一緒に研究を進めてくれたことに嬉しく感じている。他大学から来た自分に優しく話しかけてくれ教えてくれたたくさんの後輩たちには本当に感謝している。実践授業の指導案の検討、修論内容について何回も検討してくれた。そして、院生室に籠っていた時に時に笑いを誘いに来てくれた小塩 敬介さん、そして3年間ゼミを一緒に過ごしてきた荘司康弘さん、寺田春香さんは、一緒に研究を検討重ねながら作って来ることができたことに感謝したい。また、2年間苦楽を共にしながら課題研究を行った嶋野雄太さんにも感謝している。夜遅くまで一緒に院生室に残り、土日来てレジュメを作成したことを今でも覚えている。また、卒業された社会科教育ゼミナールの先輩方にも感謝したい。卒論発表会などでたくさんのご助言やご示唆をいただくことができた。研究内容に悩んでいたりする時に、声をかけてくださったおかげで現在、修論を執筆することができたことに感謝したい。

第5・6章に記載した実践については、実践を行わせていただいた三重大学教育学部附属小学校に感謝の意を表したい。快諾を下さり、アンケートについてもご助言くださった元附属小学校長松浦均先生（三重大学教育学部学校教育講座）、実践学級として快諾くださり、常日頃実践内容のご助言や授業変更、バスの手配など無理のことをたくさん申し上げて実践を行わせていただいた中村寛治先生（2019年度5年A組担任）、そして、実践に参加してくれた5年A組の児童(2019年度)に感謝したい。

大学院3年目は、三重大学教育学部附属小学校教諭との兼務で大変だったこともありましたが、沢山の方に支えていただけたことで執筆できたと思います。末尾となりましたが、いつも大学院時代、家事などで支えてくれた両親、そして、兄弟としてたわいもない話をし、共に勉強を隣でした妹に感謝したい。

増田直史